

181  
2  
518

Mitsunos Beiträge für den  
Deutschen Unterricht  
No. 3.

# Deutsche Grammatik

zum

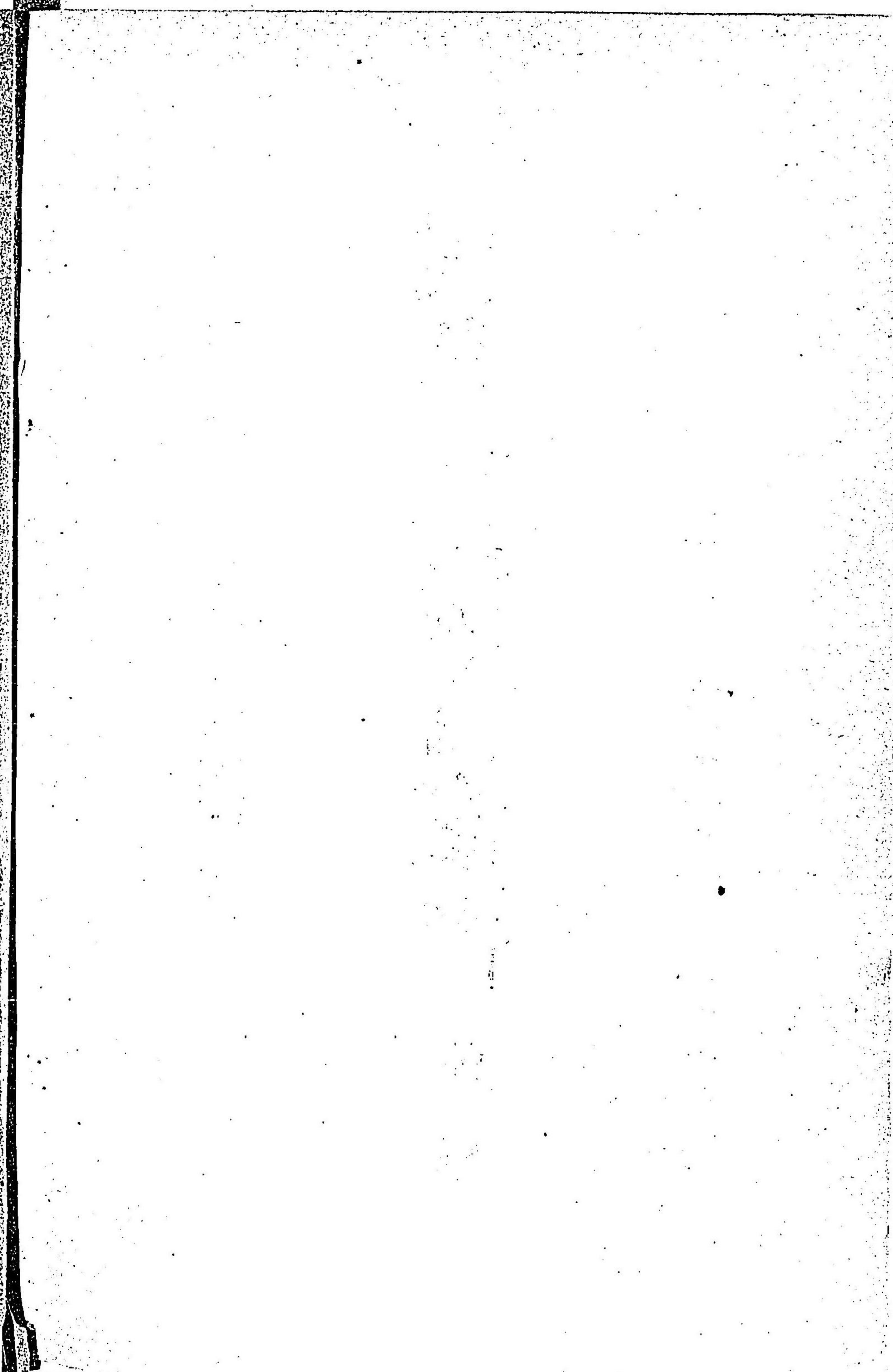
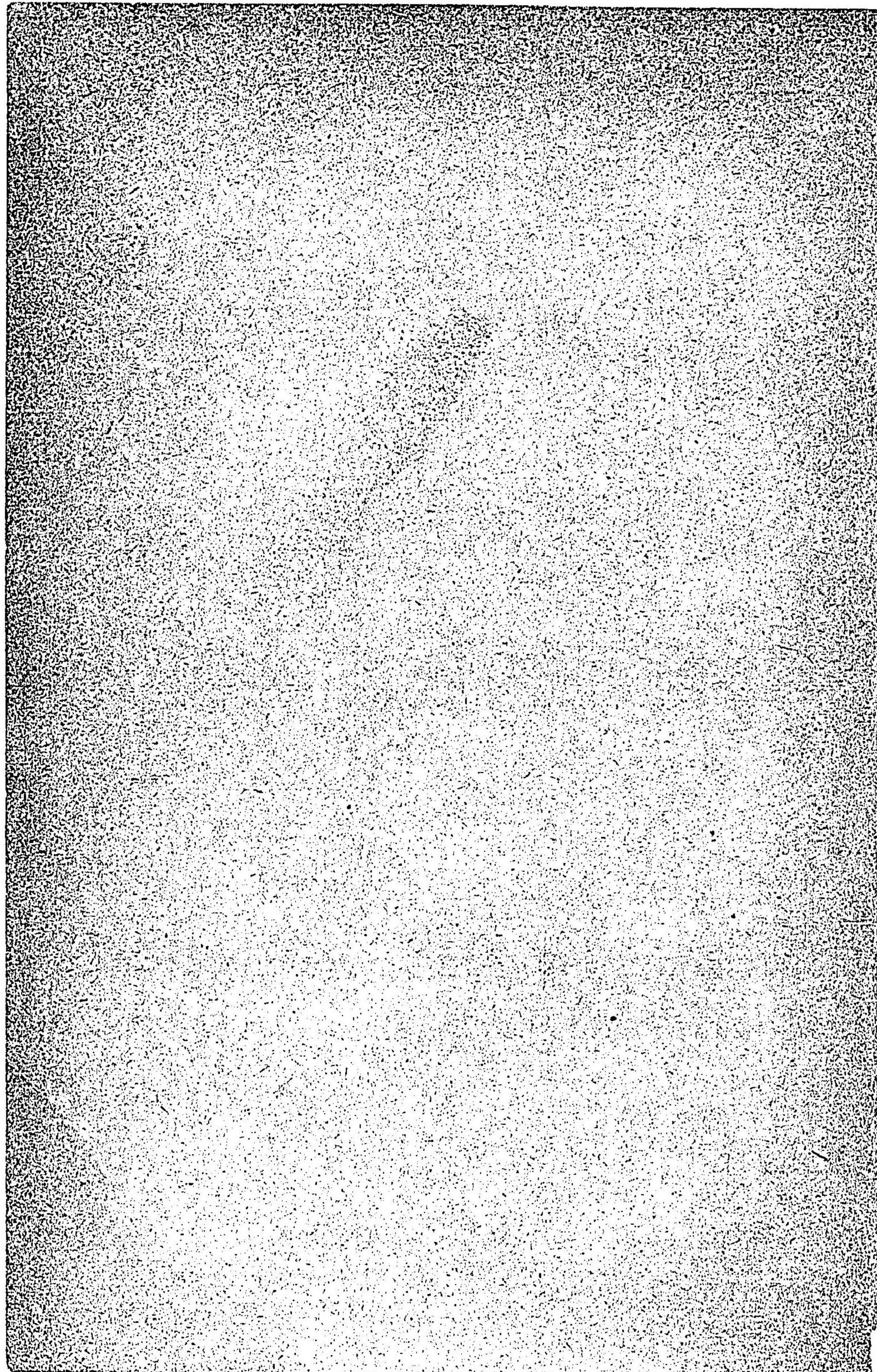
## Selbststudium

Band 1.

1909

Verlag von Yuhodo, Tokyo

181
2
518



181-518

# Deutsche Grammatik

zum Selbststudium

Band I.

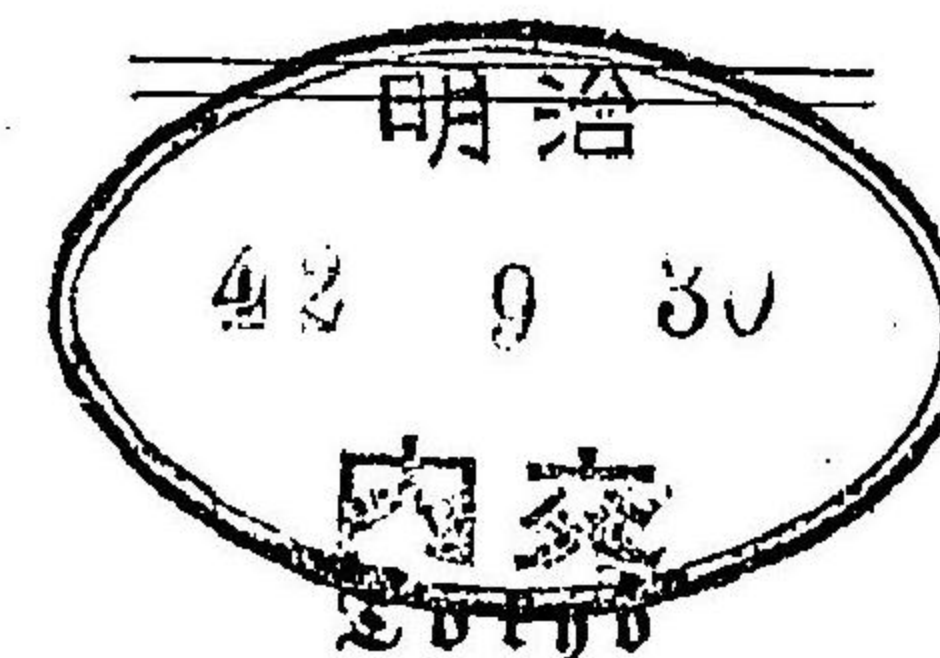
bearbeitet

von

S. Midjuno

Professor am Seminar für fremde Sprachen

„ohne Fleiß kein Preis“



Verlag von Yuhodo.

1909

東京外國語學校教授 水野繁太郎著

## 獨逸文法自修書 前編

東京 有朋堂書店發行

## 緒 言

本叢書は、著者が一面自家研究の爲め、且つ一面には一般學習者の伴侶たらしめんが爲めに、多年各方面に於ける獨逸語研究の結果を、順次世に發表せんとするものにして、曩に其の發端として「獨逸語自修書」前後兩編を刊行し、今又茲に第三卷として本書を公にせんとす、獨逸語學習者之に由りて幾分其の研究に資する所あらば、著者の望足れり矣。

明治四十二年新秋九月

三浦半島の一角にて

著者識す

## 注 意

- (一) 本書は一般獨逸語研究者の自修用を主眼として著せしものなれば、其の講述説明も可成的詳細周到ならんことを勉めたり。
- (二) 本書は曩に公にしたる「獨逸語自修書」とは少しく趣を異にし、文法を系統的に講述するの傍、其の豊富なる單語と實際的にして趣味多き文例とによりて、一種の讀みものたらしめんことを期せり、
- (三) 本書中、「獨逸語自修書」を参照をしたる個所は學習上極めて必要なるものなれば、讀者は必ず之が參考を怠るべからず、但し後編の参照數字は全然第一版に依りたるが該書は第三版に際して第四課を削除したれば第五課以下はその課數より一を減じたるものを以て標準となすべし
- (四) 本書中にて、前後相對照せしめたる個所尠なからず、これ一つは同一の説明を繰返へすの煩を避くると同時に同一規則を種々の場合に活用せしめんが爲めなり。
- (五) 本書中、往々英佛語の外に希臘、羅甸語等をも引照したるは、一に讀者をして近世歐洲の言語が如何に此の二國語と深き關係を有するかを知らしむると

同時に獨逸文法の蘊奥を極めしめんが爲めの微衷に外ならず。

- (六) 後編の卷末には、本書所用の文法上の術語及び文法研究に必要な單語、成句の索引を附したり。
- (七) 本書編纂に際し参考せる書次の如し

Willmanns, Bauer=duden, Buschmann, Lyon=Heyse, Blas, Engelen, Sütterlin, Wegel.—Paul, Heyne, Heyse, Sanders, Kluge, Duden.—Matthias: „Sprachleben und Sprachschäden“ Vietor: „Phonetik,“ Wustmann: „Sprachdummheiten,“ Sanders: „Hauptschwierigkeiten“ Paul Geyer: „der deutsche Aufsatz.“

# Deutsche Grammatik.

## Erstes Buch.

### Einleitung 總論.

§ 1. 文法 *die Grammatik*<sup>(1)</sup> は或る國語を正確に話し、草し又は解するに必要な法則を教ゆる學問である。

§ 2. 國語 *die Sprache* は人の思想 *Gedanken* を言ひ表はすものであつて、此の國語に依つて言ひ表はされたる思想を稱して文章と云ふ。

文章 *der Satz* は語 *das Wort* より成り、語はまた綴音 *die Silbe* より成る、更らに此の綴音は音 *der Laut* より成るのである、然るに音なるものは耳もて聽くこと

(1) グラムマ／＼ティカ (希臘語の γράμμα, グラムマ「文字」より來りし語なり (拙著羅甸文法階梯 § 15))

を得るのみであるから、これを眼もて見得る様に爲さん爲めには、此の音を寫せる記標 (sichtbares Zeichen) 即ち所謂寫音文字 Buchstabe を用ゐねばならぬ。獨逸語の Abc (ア、ベ、ツエー), 英語の Abc (エ、ビ、スイー), の如き即ち此の寫音文字 Buchstaben である普通は單に文字と名づけてある。今

Japan ist ein Inselreich.

なる文章を見るに、此れは Japan, ist, ein, Inselreich といふ四個の語より成立し、而して Japan なる語は Ja と pan との二個の綴音より成り、Ja なる綴は J と a との二個の文字より成つてゐる。

§ 3. 以上説べたる所よりして、文法なるものは此れを三部に分類することが適當である、即ち第一は文字とその聲音及びそれより成る綴音のことを論ずる聲音論、第二は綴音によつて成れる語に就て論ずる詞論、第三は語よりして成れる文章を論ずる文章論の三である。

1. 聲音論 Lautlehre——文字、聲音及び綴音等に就きて、
2. 詞論 Wortlehre——語の用法に就きて、
3. 文章論 Satzlehre——文章に就きて、

## Inhaltsangabe



### Erstes Buch

	Seite
Einleitung § 1-3 .....	i-iii
<b>Erster Teil: die Wortlehre.</b>	
§	
<b>Kap. I.</b> 4 die Buchstaben .....	1-3
5-6 die Laute .....	3-8
7-10 die Silben .....	8-12
11-17 die Silbenquantität und Betonung .....	13-21
<b>Kap. II.</b> 18 die Wörter; Wortarten; Nomina u. Partikeln. ....	22-24
<b>Kap. III. Das Substantiv:</b>	
19-22 Definition, Konkrete, Abstrakte.	25-33
23-24 Substantivierte Wörter.....	33-35
25-29 Genus.....	35-60
30-35 Numerus, Kasus, Artikel, Deklination des Artikels...	60-66
<b>Kap. IV. Deklination der Substantiva.</b>	
36 Arten der Deklination: Schwache u. starke: .....	66-67



37	Schwache Deklination .....	68- 74
38	Starke Deklination .....	75- 77
39	Plural gleichlautend mit dem Singular .....	78- 79
40	Plural ohne Endung, doch mit Umlaut .....	80
41	Plural auf =e .....	81- 86
42	„ „ =e, mit Umlaut.	87- 89
43	„ „ =er, mit u. ohne Umlaut .....	89- 93
44	„ „ =s. ....	93- 94
45	<b>Gemischte Deklination...</b>	94- 96
46	Synkope u. Apokope des e...	96-102
47- 51	<b>Deklination der Fremdwörter .....</b>	103-114
52	<b>Deklination der Eigennamen .....</b>	114-117
53- 61	Singularia tantum, Pluralia tantum, Plural der Maßbestimmungen, Gebrauch des Artikels .....	117-137
<b>Kap. V.</b>	<b>Das Pronomen = Fürwort.</b>	
62- 63	Definition, Arten der Pronomina : .....	137-138
64- 71	Personalpronomen.....	139-155
72- 79	Possessivpronomen .....	155-166
80	Demonstrativpronomen, Determinativa.....	166-177
81- 83	Relativpronomen .....	177-187

84	Interrogativpronomen .....	187-192
85- 86	Pronomina indefinita .....	192-197
<b>Kap. VI.</b>	<b>Das Adjektiv = Eigenschaftswort.</b>	
87	Definition, Gebrauch.....	198-199
88- 93	Deklination des Adjektivs ...	199-209
94	Bildung der Adjektiva .....	209-216
95-115	Komparation .....	216-230
116-120	Adjektiva mit Objekten u. Präpositionen.....	230-238
<b>Kap. VII.</b>	<b>Das Numerales = Zahlwort.</b>	
121-145	Kardinalia; Ordinalia; zusammengesetzte Zahlwörter; Zahlsubstantiva; Zeitbestimmungen .....	238-261
<b>Kap. VIII.</b>	<b>Das Verbum = Zeitwort.</b>	
146-147	Definition, Formen des Verbums .....	262
148-149	Arten des Verbums.....	263-264
150	Infinitiv, Konjugation, Partizipium, Subjektiv, Konjunktiv .....	264-266
151-153	Konjugation der Hilfsverba der Zeit .....	266-279
154-160	Konjugation der Hilfsverba des Modus.....	280-287
161	Gebrauch der Hilfsverba des Modus .....	287-291

162-163	Die selbständigen Verba. Ein- teilung .....	291-294
164	Gebrauch der temporalen Hilfs- verba: haben, sein, werden.	294-297
165	Formen des Verbums: Aktiv, Passiv; Modi, Tempora, ruhende Formen, Numerus, Person .....	297-300
166	Arten der Konjugation.....	300
167-169	Bildung der Tempora.....	300-307
170-172	Konjugation der schwachen Verba .....	307-310
173-182	Gebrauch der Tempora.....	310-316
183-188	„ „ Infinitive .....	316-322
189-192	„ „ Partizipien.....	323-328
193-199	„ „ Modi: Indi- kativ, Konjunktiv, Imperativ.	328-340
200-204	Aktiv u. Passiv .....	340-347
205-211	Abweichende Konjugationsen- dungen .....	347-354

# Deutsche Grammatik.

## Einleitung. 總 論

§ 1. 文法 *die Grammatik*<sup>(1)</sup> は或る國語を正確に話し、または書く法則を教ゆる學問である。

§ 2. 國語 *die Sprache*<sup>(2)</sup> は人の思想 *Gedanken* を言ひ表はすものであつて、此の國語に依つて言ひ表はされたる思想を稱して文章と云ふ。

文章 *der Satz* は語 *das Wort* より成り、語はまた綴音 *die Silbe* より成る、更らに此の綴音は聽音 *der hörbare Laut* より成るのである、然るに聽音なるものは耳もて聽くことを得るのみであるから、これを眼もて見得る様に爲さん爲めには、此の聽音を寫せる有形の文

(1) *γραμματική* (希臘語の  $\gamma\rho\alpha\mu\mu\alpha$ , *γραμμα* 「文字」より來りし語なり(拙著羅甸文法階梯 § 15))

(2) *Σύλλαβος*。

字、即ち寫音文字 Buchstabe を用ゐねばならぬ。獨逸語の abc (ア, ベー, ツエー), 英語の abc (エ, ビー, スィー), の如き即ち此の寫音文字 Buchstaben である普通は單に文字と名づけておく。今

Japan ist ein Inselreich.

なる文章を見るに、此れは Japan, ist, ein, Inselreich といふ四個の語より成立し、而して Japan なる語は Ja と pan との二個の綴音より成り、Ja なる綴音は s と a との二個の文字より成つてゐる。

§ 3. 以上説べたる所よりして、文法なるものは此れを三部に分類することが適當である、即ち第一は文字とその聲音及びそれより成る綴音のことを論ずる聲音論、第二は綴音によつて成れる語に就て論ずる詞論、第三は語よりして成れる文章を論ずる文章論の三である。

1. 聲音論 Lautlehre——文字、聲音及び綴音等に就きて、
2. 詞論 Wortlehre——語の用法に就きて、
3. 文章論 Satzlehre ——文章に就きて、

注意 此の如くに三部に分類すとは云へ普通文法と稱せらるゝものは第二の詞論に限られてゐるが如き觀がある、其れにも一理がある何となれば文章を書き又は話すに方つて第二の詞論が最も重要な地位を占めて居るからである、故に本書に於ても聲音論に就いては唯其の概念を示すに止めて置いた、之れを詳細に論ずることは別に聲音學 (Phonetik) なる一科學の範圍にも屬するし、なほ此れに就いては時期を見て發表せんとする著者の抱負もあるのであるから、本書には詞論の一部として論ずるに止めた、文章論に於ても同じく實用に遠い迂曲な文體を取つてこれを論じ分析することは本書の主意ではない、故に普通最もよく用ひらるゝ文章について論ずることにしたのである。尚ほ文章論を詳細に研究せんとする篤學者には本書及び自修書前後兩編を完了したる後拙著「獨逸文章學」(丸善出版)を一讀せんとを勧めたい。

# Erster Teil

## Wortlehre 詞 論

### Kapitel I. 第一章

#### Von den Lauten 聲音に就いて

#### I. Die Buchstaben. 文字

§ 4. 日本の「いろは」は四十八文字あるが、獨逸の「いろは」には二十六文字がある、即ち

Aa Bb Cc Dd Ee Ff Gg Hh Ii Jj  
Kk Ll Mm Nn Oo Pp Qq Rr Ss  
Tt Uu Vv Ww Xx Yy Zz

であつて、これを *das Alphabet*<sup>(1)</sup> 或は *ABC* と稱す、而して此の各文字には花 (或は大) 文字 *der Majuskel*

(1) アルファベット (希臘語の「いろは」の初めの二字  $\alpha$  アルファと  $\beta$  ベータより名けたものである故に之れをアルファベットと發音してはならぬ、アルファベードである。

(großer Buchstabe) と小文字 der Minuskel (kleiner Buchstabe) との二種がある、

注意 獨逸語に於て花文字を用ふる場合は概ね下の如くである、

1. 花文字は語の頭首の文字にのみ用ひらる、

例 Mann, Ich, Wo, Ist, Ein, 等。

2. 獨立せる文章の冒頭の語の頭文字は花文字なり、

例 Das ist schön. Ich bin ein Mann. 等。

3. 總ての名詞の頭文字は花文字なり、

例 der Mann, das Haus, die Blume, der Tisch, 等。

4. 名詞以外の語にても名詞として用ひられし場合、亦同じ、

例 gehen より來りし das Gehen, sehen より來りし das Sehen, das Wenn und Aber, das Deutsche, der Alte, 等。

5. 固有名詞並びに稱號の一部分たる形容詞の頭文字も花文字なり、

例 Karl der Große; Heinrich der Vierte; Seine Kaiserliche Hoheit. 等。

6. 總て尊稱の代名詞の頭文字、亦然り、

例 Sie, Ihr, Ihnen, der Ihrige, das Ihre, 等。

7. 手紙に於ては受信者の代名詞の頭文字は花文字なり、

例 Du, Dich, Dein, Euch, Euer, 等。

## II. Die Laute. 聲音

聲音 Laute には母音 Vokale と子音(或は父音と云ふ) Konsonanten との二種がある、

§ 5. A. 母音 Vokale には單母音 einfache Vokale と二重母音 Doppelvokale (Diphthonge) との別があり、その發音には長短の二種がある、

- 1) 單母音 einfache Vokale は次の如し、

a, e, i, o, u, 希臘字の y (i または ü と發音す) 及び ä, ö, ü.

注意 a, e, o, は時としては重なることがあるが之れは其の音の長きことを示す爲めである、(例、Haar ハール, Meer メール, Boot ボード) u と i とに於ては此の如く重なることは決してない、i を長く發音せんが爲め

に *ie* が用ゐられてゐる(例、Liebe リーベ、Dienst デイ-  
ンズト)

此の外に母音の伸長を表はすには *ri* を用ゆ、殊に  
l, r, m, n の前には *ri* を入れて *ri* の前の母音を伸長する  
のである(例、Ruhm ルーム、Kahl カール、Ohr オール、  
Wahl ヴァール、Rohr ロール)。

2) 二重母音 Diphthonge には、

ai, au, ei, ey, eu, äu,

の六つがあつて、其れ等は常に長い發音を有して居るの  
である。

3) 母音變換 Vokalwandlungen には次の二種があ  
る、

a. 曲音 der Umlaut (とは母音 *a* を *ä* に、*o* を  
*ö* に、*u* を *ü* に、*au* を *äu* に變換すること  
を云ふ)。

例 Hand—Hände (手), Wolf—Wölfe (狼), Kuh  
—Kühe (牝牛), Haus—Häuser (家);

b. 動詞幹母音變換 der Ablaut (とは動詞の時を表し  
若しくは他の語を作るため動詞の幹母音の變換  
するを云ふ)

例 trinke, trank, getrunken; Trank (飲料), Trunk  
(一杯, 酒); spreche, sprach, gesprochen; Sprich-  
wort (諺), Sprache (言語), Spruch (箴言)。

注意 trinke は現在 trank は過去 getrunken は過去分詞で動詞の時を表  
はすこれは即ち trinke の幹母音 *i* が *a u* に變換した例、sprechen も其れ  
と同じく *e* が *a o* に變じたのである。この trinke から Trank と Trunk  
と sprechen から Sprichwort, Sprache, Spruch と云ふ名詞が作られたので  
ある。

§ 6. B. 子音 Konsonanten には單子音 einfache  
Konsonanten と二重子音 Doppelkonsonanten と組  
立子音 zusammengesetzte Konsonanten との三種が  
ある、

1) 單子音 einfache Konsonanten は母音を除きたる殘  
りのものであつて、即ち

b, c, d, f, g, h, j, k, l, m, n, p, q,  
r, s, t, v, w, x, z.

であるが、其れは主なる發音機管及び發音の方法と程度  
とに従つて種々に分類さる、

例へば、p (ペー), b (ベー), f (エフ), m (エム), の  
如きものはこれを發音するに當つて、主として唇 Lippe  
を要するに依り唇音 Lippenlaute と呼ばれ、t (テー),  
d (デー), s (エス), r (エール), l (エール), の如きはその主

なる發音機官として齒 Zahn を要するが故に齒音 Zahnlaute と稱せられ、(然し舌を使用する點よりして舌音 Zungenlaute とも云ふ) f (ガ'ー), g (ゲ'ー), h (ハ'ー) などは喉 Gaume を要する爲めこれを喉音 Gaumenlaute と云ふ、(この内 h は主として息を用ふるが故これだけを別にし息音 Sauchlaute とも稱ふ) 而して同じ唇音にあつても p, b 等は唇を密閉して出すが故にこれを密閉音 Verschlusslaute と名づけ、f, w, 等はその發音さるゝや物の摩擦するが如き故に摩擦音 Reibelaute と云はれ、m の如きは鼻によつて發音せらるゝが故にこれを鼻音 Nasellaute と云ふ。齒音中の r, l, は其の音が流るゝが如く響くものなるが故に流音 Liquida (fließende Laute) 若しくは、其の響が母音に近い爲めに半母音 Halbvokale と稱せられてゐる、今茲に説べた事を更らに明らかにせんが爲め、一括しこれを表として掲る、

	1. Verschlusslaute.		2. Reibelaute.		3. Nasellaute.	4. Halbvokale. (Liquida)
	hart 強	weich 弱	hart 強	weich 弱		
a) Lippenlaute.	p	b	f, v, ph	w	m	
b) Zahnlaute.	t (th)	d	f, ß, fch	ſ, j	n	r, l
c) Gaumenlaute.	k, c, q	g	h, ch	h	n, ng	

注意 唇音、齒音、喉音のことを羅句語では Labiales, Dentales, Gutturales. と云ふのであるが、これは英、佛等に共通に用ひられて居るのであるから記憶し置く必要がある、——Verschlusslaute と Reibelaute との下に(強), (弱)としてあるのは、(強)の方は強く發音し、(p, t の如く), (弱)の方は弱く發音することを示したものである、(b, d の如く)。——子音の個々の發音に就いては獨逸語自修書前編に詳しく述べて置いた、就いて見んことを勧める。

2) 二重子音 Doppelfonanten とは同一の子音が重れるものを云ひ、それには

bb, dd, ff, gg, ff, ð, ll, mm, nn, pp, rr, ff, tt.

がある、而して此等は決して語の冒頭に置かるゝことはない、又此れ等二重子音の前にある母音は促まつて發音するものである、(例、Ebbe エ'ッペ, Nisse ア'ッフェ, Nisse ビ'ッルシ, Stuttgart シ'ュ'ッ'ト'ッ'ガ'ルト).

3) 組立子音 zusammengefegte Konsonanten とは二個以上の異なる子音の集まつて成れるものにして、それには、

th, ph, ch, fch, pf, fp, ft, qu, ch, ng, nf, gu, gl.

がある、

注意 qu は鳥渡見ると q と u とであるから組立子音とは思はれないけれどもこれは元來 q+w の音を表はしたるものであるから、同じく組

立子音の部に入らるべきものである、尙ほ此の外に *t, s* も組立子音の内に數ふることが出来る何となれば *t=ʃ+s; s=ʃ+s* の音を表はすが故なり、

尙ほ母、子音の發音に関しては獨逸語自修書前編の §1 から §72 に至るまでを参考して貰ひ度い

### III. Die Silbe. 綴音

§ 7. 綴音 Silbe とは一度口を開いて發する、聲音の結合を云ふものにして、例へば *ja, de, do, ma, mi, mu, me, mo* の如きものである。

一綴音 Silbe には必ず一母音が無くてはならない、一綴音は母音のみで出来ることもあり、(例、*o, ei*, 等) また一母音と一個若しくは數個の子音とで成立することもある、(例、*zu, blei, Leid, Frucht, stumpf, Strumpf* 等)、

故に綴音の成立には母音は缺く可からざるものであつて、換言すれば一語には母音の數だけ綴音があると云ふべきである、(例、*Der Richter ver=ur=teilt er=bar=mungs=los ver=bre=che=ri=sche, un=ver=bes=ser=li=che Ge=set=zes=ü=ber=tre=ter.*)

§ 8. 數個の綴音から成つて居る語 *mehrsilbiges Wort* には、其の綴音の中の一つに必ず其の語の意味を含んで居るものがあるが此の如き綴音を幹綴 *Stammsilbe* と稱し、その幹綴中の母音を幹母音 *Stammvokale* と云ふ、幹綴のその語に對するは恰かも幹の樹木に於けるが如きものであつて、幹よりして枝や葉の生ずが如くに此の幹綴から其の語全體の意味が生じ來るものである。

注意 一綴音の語は之れを單綴音語 *einsilbiges Wort*, 數綴音より成れる語は之れを數綴音語 *mehrsilbiges Wort* と云ふ。

幹綴の前にある綴音はこれを前綴 *Vorsilbe* といひ、後にあるものはこれを後綴 *Nachsilbe* 或は語尾 *Endung* と呼ぶ、(羅句語にては *Vorsilbe* を *Prefix*; *Nachsilbe* を *Suffix*; *Endung* を *Terminus* といふ、これをも併せて記憶し置かんことを薦めたい) 次ぎに數例を擧げん。

前綴の例: *Ge=ses, be=setzen, ent=setzen, er=setzen, ver=setzen, Ur=teil, Ant=wort* 等。

後綴の例: *Geb=el, Dien=er, gold=en, Barb=ier, mut=ig, König=in, kind=isch, Bäum=chen, furcht=sam, lieb=lich, Jüng=ling* 等。



§ 9. 數個の綴音から成る語を正確に發音せんが爲めには其の語を個々の綴音に分解しなくてはならぬ、そして其の内の何れの綴音に語勢 *Akzent* (*Betonung*) があるかを知らねばならぬのである、此の如くに語を其の個々の綴音に分解するといふことは其の語を正確に書かんとする上に於ても亦缺く可からざることである、即ち或る語を書くに當つて紙の右端に挟まつてその全體を到底一行に記することを得ずして其の殘餘を次の行にも書かねばならぬ場合には吾人はその語を隨意氣儘な個所で分けて行を更へることは出来ぬ、必ず綴音の分け目に従つて分離せしめなくてはならぬ、此の様な綴音分解 *Silbentrennung* に就いては次の法則がある。

1. 組立語 *zusammengesetztes Wort* 或は *Kompositum*\* (とは二個若しくは二個以上の語が結合して一語に成れるもの)はその個々の語に分離さる。

例 *ton=los, Wirts=haus, Haupt=wort.*

2. 前綴を有する語にてはその前綴が分離さる。

例 *Ver=ein, Ge=spräch, Vor=ur=teil.*

\* *Kompositum* の複数は *Komposita*.

3. 後綴 (或は語尾) を有する語にありては、その後綴が子音を以て始まる時にのみ、その後綴 (或は語尾) が分離さる。

例 *Gleich=nis, folg=jam, drück=te.*

然るに語尾が母音にて始まる時には次ぎの諸規定に従ふべきものである:

4. 一個の子音が二個の母音の間に存する時には、其の子音は次ぎの綴音に屬す、 (§ 6, 1. の單子音の外、 § 6, 3. の組立子音も綴音分解に際しては凡て一個の子音と數へらるるものであるから、 *th*, *ph*, *ch*, *sch*, *ß*, *dt*, 併びに *o*, *ö* なども皆各々一個の子音として數へらるゝのである)。

例 *a=ber, Ei=sen, Ho=nig, Phi=lo=so=phie, Apo=the=ke, Stä=dtte, Ge=ge, rei=zend.*

5. 二個の子音が母音の間に在る時には前者は前の綴音に屬し、後者は後の綴音に附く。

例 *Pup=pe, En=te, neu=nen, tap=fer, fin=ken.*

注意 組立文字 *d* 及び *ch* は分解に際しては *d* は *t*, *ch* は *tʃ* に分離するものである、例へば *Mil=ken, fet=zen* 等の如し、これに反して *ft* は分離せられずして次の綴音に屬するを通

例とす、其の前に長母音のある時は殊に然りとする、例へば  
Wit-te の如し、

6. 二個以上の子音が母音と母音との間にある時には、綴音の分解點は此れ等子音の最後のもの、前にある、然かし此の場合には dt, th, ph, ch, fch, ß の外に ft, pf, も皆一個の子音として數へらるべきものである。

例 Ern-te, Kürsch-ner, dürf-tig, ern-ster, käm-pfen.

§ 10. ある語が行の右端と次の行の初めに跨る場合には初めの行の終りに接續線 Bindestrich (=) を附す、此の記號は亦、組立語 (§ 9, 法則 1.) の意味を一層明瞭にせんが爲めに、行を換ふる場合でなく、同一の行の中にも用ふることもあり。

例 Schluß=s, Steinkohlen=Bergwerk, Österreich=Ungarn,  
Tier= und Pflanzenwelt.

注意 此の接續線は獨逸語では常に二重線 (=) で書く。

#### IV. Die Silbenquantität und Betonung.

##### 綴音の長短と語勢

§ 11. 獨逸語にては如何なる語の中にてても他の音よりも調子が高い音がある、又數個の綴音から成つてゐる語では其の語を組み立てゝゐる綴音の中にて他の綴音よりも調子の高い綴音がある、此の如き音又は綴音には語勢 Betonung (Akzent) があると云ふのである。著者が曾て獨逸語自修書にも述べて置いた通りに、此の語勢なるものはアングロサクソン系統の言語の特色であつて、若しこれを正確に用ゐた時にはアングロサクソン語は一種の音樂であるとも言へるのであるが、其れと同時に此の正確なる用法は決して容易なる問題なりと言ふことは出來ないのである、

綴音の長短 die Silbenquantität は綴音の語勢 die Silbenbetonung と密接なる關係があるものである、即ち軽く口早に聲を低めて發音する無調綴音は短かくして(其の記號は -)、重々しく緩やかに聲を高めて發音する高調綴音は長く、(其の記號には - を用ふ)そして無調と

高調との間に位するものは其の綴音の長短は同じく前二者の間にあるのである、(其の記號としては  $\acute{}$  又は  $\grave{}$  が用ゐられるのであるが、其の中  $\acute{}$  は寧ろ長音に近いものであることを表はし  $\grave{}$  は短音に傾いてゐることを示す)、斯の如く  $\text{---}$  の記號で綴音の長短或は高低を表はすことを *Silbenquantität* と云ふ。

§ 12. 綴音をその發音さるゝ調子の強さによつて分類したならば三つとなる、即ち:

- 1) 高調綴音 *hochtonige Silben*,
- 2) 低調綴音 *tieftonige Silben*,
- 3) 無調綴音 *tonlose Silben*.

§ 13. 數綴音より成つてゐる語にあつても已に § 11. の初めに述べた如く、獨逸語にては如何なる語にも *Akzent* があるものなるが故に、其の語を組み立てゝ居る個々の綴音の間の音調の關係に差別の存するは當然の數である。初めて讀むことを學んだ許りで、まだ言葉を連結して解することの出來ない兒童は、文章を音讀する際必ずどの綴音もどの綴音も同じ強さの調子で發音するものであるが。斯かる發音は心して避けねばならぬ、即ち此の數綴音より成つてゐる語にあつて其の中の最も主要なる

一綴音は他の綴音よりは強く高い聲で發音し、其れに反して他の綴音は其の主要なる綴音に比較すれば多少弱く低い聲で發音せねばならぬのである。

§ 14. 上に述べた此の高音と低音との關係を綴音の頭に語勢標 *Tonzeichen* (*Akzent*, *Akzentzeichen*) を附して明かにすることが出来る、其の場合には普通高音の記號として ( $\acute{}$ ) [*accentus acutus*. 又は略して *Akutus* 或は *Akut\** ともいふ] を附し、低音の記號としては高音の記號とは反對の方向に向へる ( $\grave{}$ ) [*accentus gravis*. 又は略して *Gravis\** ともいふ] を用ゆるのである、而して其の記號は本書にては語勢を有する綴音の後に附してある(拙著自修書前編語勢の處を見よ)。

例 *An'fang'* (元始), *Him'mel'* (天), *Er'de'* (地).

§ 15. 吾人は更に進んで音の強さの階段を分けなくてはならぬ、今、上の例に擧げた *Anfang*, *Himmel*, *Erde* に就いて云へば *Anfang'* の *fang* といふ低音の一綴音は、他の *Himmel'* 及び *Erde'* に於ける *mel*, *de* の二個の低い綴音程には弱く發言されないのである、然

\*ギリシヤ文法の *Akut*, *Gravis* 佛文法の *accent aigu*, *accent grave* を参考せよ

かも此の差別は此れ等三個の語と同じ綴音を有してゐる三綴音の anfangen (始める), Thronhimmel (龍蓋), Tonerde (粘土) を見たならば一層明確に知ることが出来る、即ち此れ等三個の語にあつては、何れも其の第一の綴音は主要なるものとして高く發音される、然るに其れに續く第二第三の綴音は低音である、けれどもそれ等第二綴と第三綴とはその間に何等の音調の階級も無く皆同じき低音で發音されるかといふに然らず、第三の綴音が全然低音で無調なるに引き代へて第二の綴音は第三のよりは調子が高く發音されるのである、故にこれは次の如くに解釋することが出来る、即ち fangen, Himmel, Erde といふ二綴音の語にては初めの綴音に語勢があつたのであるけれども、それよりも更に強い即ち程度の高い an, Thron, Ton などいふ前綴と結合した爲めに其れに一步を譲つたのである、然かし其れが爲め fan, him, er はその始めの高音を全然失つて仕舞はずして第一綴よりも低いが然かし第三綴よりは高い音を有してゐるのである。

§ 16. 故に此の三個の語に就いてこれを精密に區別したならば、第一の綴音は高音であつて即ち高調綴音

hochtonige Silbe である、第二の綴音は第一のに比すれば低音であるけれども第三のに較べたならば高音であつて即ち低調綴音 tieftonige Silbe であり、第三の綴音は全然低音であつて即ち無調綴音 tonlose Silbe である。而して此の無調綴音を記號で表はす時には  $\sim$  を、無調綴音よりも高い綴音は  $\acute{}$  を、又此綴音より更に高い綴音は  $\u{}$  を以て表はす以下之れに準じて更により高い綴音を表はすことが出来るのである、故に anfangen, Thronhimmel, Tonerde を表はす爲めには  $\u{ \acute{ } \sim$  を以てする、これは第一綴音が高調で、第二綴音が低調で、第三綴音が無調であるといふことを意味して居る、然るに今 Sammtthronhimmel (金龍蓋) といふ様な結合があつたならば高調は第一綴音の Sammt に歸し第二の Thron はこれに次く高調となり、第三の him は低調となり、第四の mel は無調となる、故に其の語を記號で表はしたならば、mel は  $\sim$  で、him は  $\acute{}$  で、Thron は  $\u{}$  で表はすことが出来る、そして Sammt は  $\sim$  の上に三個の Akut ( $\acute{}$ ) を附して表はせばよいのであるけれども此の如き活字が目下無い、故に止むを得ず此の Sammtthronhimmel は  $\u{ \acute{ } \sim \sim \sim$  なる記號で表はすことにした。

例 Hausvater ˈ ˌ ˌ -, Vaterhaus ˈ ˌ ˌ -, hausväterlich ˈ ˌ ˌ ˌ -, angefangen ˈ ˌ ˌ ˌ - 等。

§ 17. 既に説いた通り語勢は到底容易な問題ではないけれども、其の間には或る一定の法則がある、今 § 15. に述べて置いた一般的の法則を敷衍して茲には少しく精密に説かんと欲する。

A. 單獨語に於ては幹綴 Stammsilbe (§ 8.) に語勢がある。

1. 一綴音より成れる語にあつては幹母音に語勢がある、

例 Schlaf シュラフ (眠), Hand ハンド (手),  
ich イ'ヒ (私), nach ナ'ハ (方へ)。

2. 後綴は獨逸本來の語にては語勢がない。

例 lebendig ˌ ˌ ˌ - (生々としてゐる), sorgsam ˌ ˌ - (心配して), Zeitung ˌ ˌ - (新聞), japanisch ˌ ˌ - (日本の)。

之れに反し外來語及び獨逸語に外國の語尾(即ち ie ei on 等) が附いた語にあつては其の語尾に語勢のあること多し、

例 General ˌ ˌ ˌ - (將軍), Genie ジェニ ˌ ˌ ˌ - (天才), Philosophie ˌ ˌ ˌ ˌ - (哲學), Nation ˌ ˌ ˌ - (國民); Brauerei ˌ ˌ ˌ - (醸造所), Kammergasse ˌ ˌ ˌ ˌ - (政治的駭法螺)。

3. 前綴にして語勢を有するものは ant, ur (ursprünglich ˌ ˌ -, urplötzlich ˌ ˌ - を除く), 及び erz である。

例 Antwort ˌ ˌ - (答), Antlitz ˌ ˌ - (顔); Ursache ˌ ˌ ˌ - (原因), Urheber ˌ ˌ ˌ - (發起人); Erzbischof ˌ ˌ ˌ ˌ - (大僧正), Erzherzog ˌ ˌ ˌ ˌ - (大公爵)。

前綴 un は不定であるが語勢を有するもの、方が多い、

例 ungläubig ˌ ˌ ˌ - (不信仰の), ungläublich ˌ ˌ ˌ - (信すべからざる), undankbar ˌ ˌ ˌ - (恩を知らざる), undenkbar ˌ ˌ ˌ - (考ふ可からざる), unhaltbar ˌ ˌ ˌ - (保持すべからざる), unbegreiflich ˌ ˌ ˌ ˌ - (解し難き)。

- B. 組立語にあつては前の方の語の語幹に語勢あるを普通とす、然かしそれには次の如き例外あることを知らねばならない：

1. **durch, hinter, über, um, unter, wider** 等の前置詞と結合して非分離となつた働詞(働詞の章を見よ)にあつては後の方の語に語勢がある、

例 durchstreifen - ˘ - (歴遊する), hintergehen - ˘ - ˘ - (欺く), übersetzen - ˘ - ˘ - (翻譯する), umgehen - ˘ - (交際する), unterhalten - ˘ - ˘ - (待遇する), widersprechen - ˘ - ˘ - (抗論する).

此れ等の語に語尾を附して名詞的になりたる語又然り、

例 Übersetzung - ˘ - ˘ - (翻譯), Umgebung - ˘ - (交際).

2. **hin, her, da, zu** なる副詞が副詞又は前置詞を後に續かしむる時には第二綴に語勢がある、

例 hinaus - ˘ (こちらから外へ), heraus - ˘ (むかうから外へ), daraus - ˘ (その中から), zurück - ˘ (後の方に).

3. **all** が第一綴となつてゐる語にては語勢が **all** にある時もあり、無い時があつて不定である、

例 Allmacht ˘ - (全能), Allwissenheit - ˘ - ˘ - (全

智), allmächtig - ˘ - (全能の), alltäglich - ˘ - (日々の).

4. **voll, miß** は働詞と結合する場合には語勢は働詞の幹母音にある、

例 vollenden - ˘ - (成就する), vollbringen - ˘ - (成就する); mißhandeln - ˘ - (虐待する), mißraten - ˘ - (失策する).

此れ等に語尾を附して名詞的にした語も亦然り、

例 Vollendung - ˘ - (成就), Mißhandlung - ˘ - (虐待).

然れども上のを除いて他のものにあつては **voll, miß** に語勢がある、

例 Vollmacht ˘ - (全權), Vollgewalt ˘ - ˘ - (全力), vollsaftig ˘ - ˘ - (多汁の); Mißklang ˘ - (惡調子), mißfällig ˘ - ˘ - (不興なる)

## Kapitel II. 第二章

### Die Wörter. 語

§ 18. 語 Wörter を大別すれば次の如し、

a) 其の構造 **Bildung** よりすれば

1. 幹語 Stammwörter, 例. Haus (家), blau (青い), helfen (助ける);
2. 轉化語 abgeleitete Wörter, 例. Häuschen (小家), bläulich (淡青の), Hilfe (援助);
3. 組立語 zusammengesetzte Wörter (Komposita § 9. 1), 例. Haustür (家の戸), Himmelblau (空色の), hilflos (助け無き).

註 Häuschen は Haus から轉化したもので、bläulich は blau より、Hilfe は helfen より來たものである、Haustür は Haus (家)なる語と Tür (戸)なる語とが組み立つて出來、Himmelblau は Himmel (天)と blau (青い)といふ二語より、又 hilflos は Hilfe (援助)と los (無し)といふ二語より組み立てられてゐるのである、而して Haus, blau の如き轉化もせず組立てられもせざる元の儘の語が即ち幹語である之れには一綴音の語が多い。

b) 其の意義 **Bedeutung** よりすれば次ぎの九種に分かるゝのである、即ち：

1. 名詞 Das Substantiv 或は das Hauptwort,
2. 形容詞 Das Adjektiv 或は das Eigenschaftswort'
3. 代名詞 Das Pronomen 或は das Fürwort,
4. 數詞 Das Numera'le 或は das Zahlwort,
5. 働詞 Das Verbum 或は das Zeitwort,
6. 副詞 Das Adverbium 或は das Umstandswort'
7. 前置詞 Die Präposition' 或は das Verhältniswort'
8. 接續詞 Die Konjunktion' 或は das Bindewort'
9. 間投詞 Die Interjektion' 或は das Empfindungswort.

注意一 世間にはなほ以上の九種の外に冠詞 der Artikel (Geschlechtswort) なるものを加へて十種となして居る、けれども此の冠詞の中、定冠詞 bestimmter Artikel なる der, die, das は名詞の前に置かれて、此の名詞を限定する語であるから畢竟するに意味の弱い指示代名詞 (其の章を見よ)と云ふことが出来る、そして不定冠詞 unbestimmter Artikel なる ein, eine, ein は意味の弱い數詞 (該章を見よ)と云ふ可きである、此の如くに冠詞なるものは常に名詞に結合して名詞の意味を限定するもので

あるから、一個獨立の品詞として論ずるの必要はない、故に名詞の部に於て述ぶることにしたのである。

**注意二** 名詞より動詞に至るまでの五詞は變化をなす (flektierbar) 品詞である故に働詞を除いた他の四種はこれを總稱して變化詞 *Nomina* といふ、此の *Nomina* の變化を名けて *Declination* (その働詞なる「變化する」は *deklिनieren*) といひ、動詞の變化を *Konjugation* (その動詞「動詞を變化する」は *konjugieren*) と稱す。残りの四品詞は變化せざる (unflektierbar) 詞であつて總稱して不變詞 *Partikeln* といふ。形容詞は普通の *Declination* の外に尙ほ比較變化 *Komparation* (*Steigerung*) (その動詞は *komparieren*, *steigern* といふ) をなし、副詞は單に此の比較變化のみをなすのである。

*Declination*, *Konjugation*, *Komparation* と區別をせずして一般に語の變化といふ時には *Flexion* (*Beugung* 或は *Biegung*) なる語を用ふる。

### Kapitel III. 第三章

#### Das Substantiv<sup>(1)</sup> oder Hauptwort.

#### 名 詞

§ 19. 名詞の定義 *Definition der Substantiva.*  
名詞 *Substantiva*<sup>(2)</sup> (或は *Hauptwörter*) は事物 *Gegenstände* の名稱である、而して此の事物なるものはその生物 *lebende Wesen* なる無生物 *Sachen* なるを問はないのである。

例 *Mensch* (人間), *Tier* (動物), *Pflanze* (植物), *Stein* (石), *Buch* (本), *Stadt* (都市), *Sand* (砂) 等。

§ 20. 名詞は意義 *Bedeutung* に依り次の二種に分類せらる、

(1) *Substantiv* は羅句語の *substantivum* (主要物) を獨逸化した語であつて、原語の儘 *Substantivum* と云ふても差支ない、

(2) *Substantiva* は *Substantivum* の複數であるが、一般に名詞といふ時には此の複數の形を用ふる、



a. 具體名詞 die Konkrete,<sup>(3)</sup>b. 抽象名詞 die Abstrakta.<sup>(4)</sup>

- a. 具體名詞 die Konkrete とは五官により認識せらるべき具體物の名稱であつて、Kind, (小兒), Freund (友人), Haus (家), Berg (山) 等の如き即ち之れである。
- b. 抽象名詞 die Abstrakta とは具體物を俟て初めて認識せられ得るもの、名稱であつて、主として性質 **Eigenschaft**, 動作 **Handlung**, 状態 **Zustand** を示すものである。抑も Abstrakta とは抽き離されたるものといふ義であつて、物體からして其の性質、動作、状態等を抽き離して、其れを一個獨立せるもの、如くに考へたものをいふのである、例へば緑 (das Grün) といふものは、天とか、草

(3)(4) Konkrete, Abstrakta は共に羅句語であつて、其の單数は Konkretum, Abstraktum であるそして全體を指して言ふ時には矢張り複數の形を用ゆる、これを das konkrete Substantiv とか das abstrakte Substantiv などいふ者もあるがそんな必要はない、單に Konkrete Abstrakta で充分である、一體獨逸文法を研究する人が一通り羅句文法を知つて置くことは多大の利益があると思ふ、(拙著羅句文法階梯)。

とか木の葉とか、紙とかいふ具體物に附屬してゐる一種の性質であるから、元來は其の附屬せる物體なくしては考へ得られぬものである、然るに吾人は此の綠なる性質を其の屬する物體より抽き離して恰かも獨立して存在せる如くに見做して名づけたのである、尙ほ例を擧ぐれば、美 (die Schönheit) の如き又然りである、それ美とは果して何であるか、見るを得ず、聞くを得ず、觸るゝを得ず、歎ぐを得ず、又味ふことも得ざるものではあるまいか、人間、山、海、花などの物を觀て初めて吾人に美てふ觀念が起るのである、而して此の人間、山、海、花等より美といふ性質を抽き取つて單に美といふ獨立した物を考へるのである、此の如き理由からして die Abstrakta なる語が出来るに至つたのである。

§ 21. 具體名詞 die Konkrete を更に分ちて、次の四種と成す、

- a) 種屬名詞 Gattungsnamen (no'mina appellati'va),  
 b) 固有名詞 Eigennamen (no'mina pro'pria),  
 c) 集合名詞 Sammelnamen (no'mina collecti'va),

- b) 物質名詞 Stoffnamen (no'mina materia'lia).
- a) 今、Mensch (人間), Kind (小兒), Pferd (馬), Tisch (机), Blume (花)等の語を見れば、それ等は各、人間とか、小兒とか、馬とか、机とか、花とかいふものの同種類の物の全種属に属してゐる一個體であるといふことを表はして居るのである、成る程、世の中には澤山の人間が居る、けれど Mensch (人間) と云へば此の人間の種属の中の何れにも適用されるのである、Pferd (馬)といふとも亦然りで、世の中にある多くの馬の種属の中の何れにも當て嵌めることが出来るのである。此の如くその同種属のもの、何れにも適用されるものであるから、従つて此の如き語はその種属全體を指すのである、かゝる名詞を種属名詞(或は普通名詞) Gattungsnamen と稱す、

例 Der Hund ist treuer als die Katze 「犬は猫よりも忠實なり」(種属全體を指す)、Ich habe einen Hut und eine Feder 「私は一個の帽子と一個のペンとを持つ」(種属の中の一を指す)。

- b) 世の中には多くの犬が居る、であるから單に Hund

(犬)と呼んだならば犬の種属全體に共通であつて一を他と區別することは決して出来ない、然るにこれを區別すべき必要がある場合、丁度、飼主が自分の犬を他の犬から區別して呼ぶ様な時には自分の犬を「熊」とか、「赤」とか、「ボチ」とか呼ぶのである、此の如くに同種属の他のものから或る一個體を區別せんが爲めに名付けられた名詞を固有名詞 Eigennamen といふ、

例 Japan (日本), Tokyo (東京), Sidexoshi (秀吉), Yoshitune (義経), Tonegawa (利根川), Biwako (琵琶湖), Okubo (大久保)等。

注意 die Sonne (太陽), der Mond (月), die Erde (地球), der Gott (神)の如きも或る種属中の一であるから(即ち數多の恒星、遊星中の一であり、諸神中の一である)固有名詞と名付けてもよい様に思はれるが併し獨逸文法では其れ等は皆、種属名詞に編入されてある。

- c) 同種類のものでも、異種類のものでも、互に獨立してゐる個々のものが相集まつて一體となつて居るものに附した名を稱して集合名詞 Sammelnamen といふ此の一體となつてゐるものを箇々に分離すれば又元の個體に復することが出来る、

例 das Heer (軍隊), das Regiment (聯隊), die Flotte

(艦隊), die Familie (家族), die Herde (畜群), das Volk (人民), die Nation (國民).

- b) 今、茲に一個の木製の箱があるとする、所で一度これを破壊したならば最早それが箱であるとは云へない、けれどもその箱を組織してある Holz (木) は如何に破壊に破壊しても更らに Holz (木) たることを失はない、此處に箱なるものと木なるものとの間に差があるのである、故に箱は a) で述べた種屬名詞であるけれども、木は少しく趣を異にしてゐる、此の如き名詞を物質名詞 *Stoffnamen* といふ。大海の水も Wasser であると同時に一滴の水も同じく Wasser である、故に Wasser は物質名詞である。此の如く物質名詞は物の質に附した名であつて其の物の形の如何と分量の多寡に關しないのであるから、其の物の質さへ變化しなければ形や量に如何程の變動があつてもその名稱を變化することはない、此れが物質名詞の種屬名詞と異なる點である、

例 Gold (金), Silber (銀), Eisen (鐵), Marmor (大理石), Land (土地), Wein (葡萄酒), Zucker (砂

糖), Butter (牛酪), Brot (麵包), Salz (鹽), Fleisch (肉), Wolle (羊毛), Glas (硝子)等。

§ 22. I. Abstrakta と Konkrete との間には劃然たる境界を立てることの出來難い場合が往々ある、次の文章を見よ、

Eine gute Handlung trägt ihren Lohn in sich. 善行は其の間に報いあり、(abstrakt).

Er ist der Vorsteher einer guten Handlung. 彼は善き商館の監督者なり、(konkret).

Die Menschen haben verschiedene Größe. 人は異なる大きさ(體格の大小)を有す、(abstrakt).

Er gehört zu den Großen seines Volkes. 彼はその人民の偉人に屬す、(konkret).

Er ist geschickt im Schreiben. 彼れは書に堪能なり、(abstrakt).

Er überbrachte mir ein Schreiben. 彼れは余に書面を届けたり、(konkret).

II. 次の如きも其の意義の差により、或は Abstrakta となり或は Konkrete となる、

Abstrakta: Herrschaft 主 權,

Konkreta:	"	主	人.
Abstrakta:	Freundschaft	友	誼.
Konkreta:	"	朋	友.
Abstrakta:	Tugend	徳,	
Konkreta:	"	徳望	ある人.
Abstrakta:	Schönheit	美,	
Konkreta:	"	美	人.
Abstrakta:	Arbeit	仕事	すること,
Konkreta:	"	仕	事.
Abstrakta:	Essen	食事	すること,
Konkreta:	"	食	物.
Abstrakta:	Besuch	訪	問,
Konkreta:	"	來	客.
Abstrakta:	Jugend	青年	時代,
Konkreta:	"	青	年.

III. 獨逸語では又、或る Abstrakta を Konkreta の様に解釋することがある、

例へば、der Tod schreckt ihn (死は彼を驚かす), er fürchtet den Tod nicht (彼は死を怖れぬ), er ringt mit dem Tode (彼は死と戦ふ), er ist dem Tode entgangen (彼は死

を逃れた)等の文章にあつては der Tod (死)は具體物の如く、否、生物の様に見做されてゐる。

§ 23. 何れの品詞に屬する語でも名詞にすることが出来る、而已ならず數語より成る句を合して一名詞の如く見做すことも出来る、

例 Was hilft uns unser Weh und Ach? 悲しんだり歎いたりした處で何になろうぞ、(weh といふ字は間投詞で「痛い、々、々」いといふこと、ach も同じく間投詞で「あああー」など、溜息をすること、此の二つの間投詞が名詞として用ゐられて「悲しむこと歎くこと」となつたのである)。

Das Wenn und Aber. 人の言ふことを疑つたり非難したりすること、(wenn は「もしも……ならば」といつて、人の言を疑ふ時に發する接續詞であり、aber は「然かし」といふ接續詞で反對、非難の時に發する語である、此の二個の接續詞が名詞として用ゐられたのである)。

Das Lebewohl. 告別(人の別れる時に lebe wohl 「健在なれ」と言ふのである、それを名詞として「告別」といふ意味に用ひたのである)。

Das Vergißmeinnicht. 忘れな草 (vergiss mein nicht 「私を忘れるな」といふ句が一つになつたもの)。

Das Kräutchen Rührmichnichtan. 鳳仙花(鳳仙花は觸ればその實が撥ちけるが故に、rühre mich nicht an 「私に觸れるな」といふ句が一つになつて花の名となつた)。

§ 24. 殊に名詞として多く用ゐらるゝは次のものである、

- a. 不定法 *Infinitiv* (動詞の變化しない、字書に出てゐる形である、動詞の章にて見よ)、の前に冠詞または形容詞の存する時、もしくは „zu“ 以外の前置詞と結合したる時、((3)の場合には動詞は「かくかくすること」といふ名詞となる)、

- 例 (1) Das Laufen erhitzt. 走驅は身を温む、  
 (2) Lautes Sprechen. 聲高く話すこと、  
 (3) Wir unterhielten uns mit Singen und Spielen.  
 吾等は唱歌と遊戯とで楽しんだ。

- b. 形容詞、分詞、及び物主代名詞も、其の前もしくは後にある名詞に關係を有せず、此れ等に附隨せ

ず獨立して居る時には其れ等は名詞の取扱ひを受けけるのである、

- 例 Der Alte spielte und der Junge sang. 老人は奏樂し若者は歌つた、  
 Er ist der Glücklichsste unter der Sonne. 彼は世の中にて最も幸福なる人である、  
 Der Sterbende machte sein Testament. 死せんとする人は遺言狀を作つた、  
 Ich habe das Meinige getan, tun Sie das Ihre.  
 私は吾が分限をなした貴君は貴君の分限をなせよ、

説明: Alte は形容詞 alt より、Junge は形容詞 jung より、Glücklichsste は形容詞 glücklich の最上級なる glücklichst より來たもので——Sterbende は動詞 sterben の分詞なる sterbend から來——das Meinige, Ihre は物主代名詞の mein, dein より來たものである。

§ 25. 性 Genus に就きて 獨逸の名詞には邦語に於て見ることの出來ぬ性といふものがある、即ち有らゆる名詞は男性、女性、中性の何れかに屬して居る、而して其の名詞が何性に屬して居るかを明かにせん爲めに

は冠詞 *der* (Artikel (該章を見よ)) を用ゆ、男性の冠詞は即ち *der*, 女性のは *die*, 中性のは *das* である。

扱て性を獨逸語では *das Geschlecht*, 羅匈語では *Genus* と稱す。文法上の術語 *die grammatische Terminologie* には主に羅匈語を用ふる許りでなく、羅匈の術語 (*terminus technicus*) は歐洲各國の語に殆んど共通であるから之れを知つて置くことは、他日他の國語を學ぶに際して大なる便益となるものである、

男女中、三性の名稱は次の如し:

- 1) 男性は *Genus masculinum* 或は *das männliche Geschlecht*,
- 2) 女性は *Genus femininum* 或は *das weibliche Geschlecht*,
- 3) 中性は *Genus neutrum* 或は *das sächliche Geschlecht*.

注意一 男性、女性、中性とこれを普通には省略して *Genus* なる語を用ひず唯だ單に *Masculinum*, *Femininum*, *Neutrum* と云ふのであるが、其の方が却つて簡明でよい、*Masculinum*, *Femininum*, *Neutrum* と云ふだけで男性名詞、女性名詞、中性名詞といふ意味になる、また男性名詞の全體もしくは其の數個を云ふ時には複數形なる *Masculina* を用ゐ、女性名詞の全體もしくは其の數個を指す場合には *Feminina* を、中性名詞にては *Neutra* を用ふ。

「何は何性である」といふ場合には男性であれば *männlich*, 女性なれば *weiblich*, 中性なれば *sächlich* といふことも出来る、例へば:

「机といふ語は男性なり」といふには次の言ひ方がある、

Das Wort „Tisch“ ist ein Maskulinum.

„ „ „Tisch“ ist männlich.

„ „ „Tisch“ ist männlichen Geschlechts.

「花と云ふ語は女性です」は次の如くに言ふ、

Das Wort „Blume“ ist ein Femininum.

„ „ „Blume“ ist weiblich.

„ „ „Blume“ ist weiblichen Geschlechts.

「本と云ふ語は中性である」とは、

Das Wort „Buch“ ist ein Neutrum.

„ „ „Buch“ ist sächlich.

„ „ „Buch“ ist sächlichen Geschlechts.

文法書、辭書等には *Masculinum* を *m.* 或は *maskf.*, *Femininum* を *f.* 或は *fem.*, *Neutrum* を *n.* 或は *neutr.* と略して書いてある。

注意二 世界の國語中、性を有して居るものは極めて僅少である、エスキモ及び他の北亞米利加系統の國語にあつては名詞を生物と無生物とに分かつてゐる、中央亞弗利加のブル語などは理性的 (*vernünftige*) と無理性的 (*unvernünftige*) とに分ち、北亞弗利加のセミチック及びハミチック語には男女性の區別はないが、動詞の第三人稱に於て其の區別があるのである、此の如くに名詞の性の區別は兎角に困難であり、繁雜であるから、近世語にあつては成るべくこれを脱せんと試みて居る、故に英語、近世波斯語の如きは此の點に於ては進歩して居ると云へやう。

注意三 一體此の性なるものは本來、生物 *belebte Wesen* (或は *lebende Wesen*) の自然性 *natürliches Geschlecht* に適合すべきものである、例へば「父」は *der Vater*, 「母」は *die Mutter*, 「牡牛」は *der Ochse*, 「牝牛」は *die Kuh* と云ふが如きである。

然るに此の自然性なるもの外に、文法上より生ずる文法性 *grammatisches Geschlecht* (名詞の語尾、形態等によつて定められた性であつて、例へば *Fräulein* 「令嬢」 *Mädchen* 「少女」などは自然性から言へば

女性であるべき筈であるのに、*chen, lein* などいふ語尾がある爲めに中性となつてゐるのである、又 *Weib* 「婦人」も自然性よりすれば女性なるにも拘らず中性となつてゐるのである。)と云ふものがあるのであるが、今例に擧げた名詞にあつては、その自然性は文性法と全然一致して居る。然るに獨逸文法では月を男性にして *der Mond* と云ひ、太陽を女性として *die Sonne* と云ふ(他の國語では大概は此の逆である)、此の譯は想像力の未だ幼稚なる古代獨逸人は月を實際、男性の生物と見、太陽を女性の生物と見做して居たからなのである、星を *der Stern*, 地球を *die Erde* としたのも同じき理由からである。

所が文法性の所に説明した通りに *Mädchen* 「少女」*Fräulein* 「令嬢」などは自然性よりせば女性であるべきに *chen, lein* なる語尾のある爲めに中性になつてゐるものであるが、文章の續きでそれを代名詞を以て言ひ表はす場合には嚴格に文法的に云へば中性の代名詞を用ゆるのである、即ち *Das Mädchen, das nach dir fragte, wollte seinen Namen nicht sagen.* (汝のことを尋れたあの少女は自分の名を言ふことを欲しなかつた)の如くであるが、會話の時とか、餘り堅くししくない言ひ方の時には女性の代名詞を用ゆるのであつて其の方が却つて自然的に聞えていゝのである、即ち *Es hat ein Mädchen nach dir gefragt; ihren Namen wollte sie nicht sagen.* (汝のことを尋れた少女があつた、彼の女は自分の名を言ふことを欲しなかつた)、此れを以て見ても自然性と文法性との間に存する關係の如何なるべきかを少しは窺ふことが出来るであらう。

以上に述べて居た通り、男性にも非ず女性にも非ざる性がある、これを名付けて中性名詞 *Neutrum* といふ、*Neutrum* とは羅句語で「兩者の中何れにも非ず」といふことで男女性の中何れでもないとの義である。中性名詞のことを無性名詞 *geschlechtsloses Wort.* と稱ふ人もある。

§ 26. 以上述べた如くであるから性 *Genus* なるものは獨逸文法中の一難點なるは論を俟たない、殊に邦人の如き名詞の性に對する觀念の皆無な者に取つては一層難事であると言はなくてはならぬ、況んや上に講じたる

自然性を除くの外、性に關して文法は到底満足な規則を與ふるとは出来ぬといふに至つてはその困難や察すべきである、かるが故に初學者にあつては、拙著自修書前編第二課に於て懇々と勸めて置いた通りに、名詞を覺ゆる時には必ず冠詞と共に記憶するといふ習慣をつくること得策である、かくして多く讀み多く書く間には自然無意識の間に何語は何性に屬するかといふことが頭に入るに至るのである。

今此の如くに言ふたならば自然性の外には、名詞の性を識別する方法は全然無いのであるかと問ふ人もあらんが、必ずしもそうでない、假令不完全とは云へ多少識別の支點ともなるべき規則があるから次に之を紹介しやう。

#### I. A. 人格名及び動物名 *Personen- und Tiernamen*

は概して自然の性によつて定められる、即ち男女(雌雄)の區別をなすことが出来る、次の語を對照せよ、

*der Mann, die Frau* (男女); *der Vater, die Mutter* (父母); *der Sohn, die Tochter* (息子, 息女); *der Enkel, die Enkelin* (男孫, 女孫); *der Oheim, die Tante* (叔父, 叔母); *der Neffe, die Nichte* (甥, 姪); *der Vetter, die Base* (從兄弟, 從姊妹); *der Kaiser, die Kaiserin* (皇帝, 皇后);

der Schneider, die Schneiderin (男裁縫師, 女裁縫師); der Amerikaner, die Amerikanerin (亞米利加の男, 亞米利加の女); der Ochse, die Kuh (牡牛, 牝牛); der Hengst, die Stute (牡馬, 牝馬); der Bock, die Ziege (牡羊, 牝羊), 等。

但し次のものは例外である、

- a) der Mensch 人間.
- der Zeuge 證人.
- der Kunde 顧客. (トクイ).
- die Person 人.
- die Waise 孤兒.
- das Wesen 生物.
- das Kind 小兒.

等。

- b) die Schildwache 哨兵、
- c) das Weib (婦人), das Mädchen (少女), das Fräulein (令嬢).

注意 Schildwache (哨兵) は必ず男なるにも拘らず女性である、——語尾に -chen, -lein を附したる名詞(例へば Mädchen, Fräulein,) は其の生物たると無生物たると將た其の自然性の如何とに關せず總べて中性であることを知らねばならぬ。此の chen, lein のことを Verkleinerungswort 或は羅甸の術語で Diminutiv (縮少詞と譯す)と名づける、こは此れ等が名詞の後へ附いた時には「小さい、可愛らしい、優しい」などの意味

之れ等の語は男女に共通である。  
例へば、das Kind と云へば男兒も女子も含んである。  
(genus epicœnum 項中の[注意]を見よ、41. 頁)

が添ふからなのである。而して此れ等が附く名詞の幹母音に a, o, u, の内何れかがあつたならば、Umlaut を冠するのが規則である。

例: der Mann, das Männlein (男, 小男); die Tochter, das Töchterchen (娘, 小娘); der Tisch, das Tischchen, das Tischlein (机, 小机); die Mutter, das Mütterchen, das Mütterlein (母, かーちゃん「親愛の意を含む」).

B. 人類でも禽獸でも男女の區別を立てざる幼なきもの、若しくは男女(雌雄)の兩性を包括してあるもの、名は中性のものが多い、例へば「息子」は der Sohn で「娘」は die Tochter であるけれども兩者を包括して單に「小兒」と云へば: **das Kind** である。禽獸にあつては人間の das Kind に當るものが **das Junge** で、動物全體を包括して **das Tier** と云ふのである、そして個個の動物の幼なきものの例を擧ぐれば **das Kalb** (犢), **das Lamm** (羊仔), **das Füllen** (馬仔), **das Ferkel** (豚の子), **das Zicklein** (山羊の仔), **das Küchlein** (雛), 等である。

注意 男女(雌雄)に共通なる名詞を Genus epicœnum 或るは單に Epicœnon と名付く、そは希臘語の ἐπιϰοῖνα (epikoina と讀む)「共通、共同」から來た語である。

C. 男性の人格名及び動物名は其語尾に **in** を附すれば女性となる、(然かし既に女性に對して特別なる語を有するものは此の限りではない、例へば der Vater, die



Mutter (父, 母); der Mann, die Frau (男, 女); der Ochse, die Kuh (牡牛, 牝牛)の如し、

而して其場合に名詞の幹母音が a, o, u, au の何れかである時には之れに Umlaut を冠す、

例 der Lehrer, die Lehrerin (教師, 女教師); der Schneider, die Schneiderin (裁縫師, 女裁縫師); der Bauer, die Bäuerin (百姓, 女百姓); der Graf, die Gräfin (伯爵, 伯爵夫人); der Wolf, die Wölfin (牡狼, 牝狼)等。

注意一 Lehrerin, Schneiderin と云ふ様な語は之れを「女教師」「女裁縫師」と譯するの外に尙ほ「教師の妻」「裁縫師の妻」と誤つて譯されることがあるけれども、後の如く云ふ場合には Frau des Schneiders とか Schneiders Frau といふのである。尤も「裁縫師の妻」であつて自分も同じく裁縫をして居るのであれば Schneiderin と云ふことが出来る、Lehrerin も同じく、もし「女教師」であつて「教師の妻」である時には斯く言ふことが出来るのである、けれども「女の獵師」とか「女の靴工」などは實際に於て考ふことが出来ぬものであるから、「獵師の妻」「靴工の妻」といふことを Jägerin, Schusterin などいふことは出来ない、或る Titel (官名, 官職, 稱號)を有する人の妻君に向ひ、又は妻君のことを云ふ場合には Frau を前に置いて例せば Frau Lehrer とする方がよい、若し Lehrerin, Schneiderin の筆法でやつたならば、「教授の妻君」のことを Professorin, 「校長の妻君」のことを Direktorin と云はればならぬ、然し實際にはその様に云はずして Frau Professor, Frau Direktor と云ふ。——der Pate (名付親), der Kunde (花主), der Gast (客), der Beamte (役人)の如き語にあつては決して in を附して女性を作ることを許さない、此等は皆既に B. に於て説いた Epicoenen であるからである、然れども強ひて男女の區別をせればならぬといふ場合

には、餘り勧め度くはないが der Pate を die Pate とし、der Kunde を die Kunde (die Kunde には「報知」と云ふ意味もある) と云ふ言ひ方がないではない、der Gast, der Beamte は der weibliche Gast, der weibliche Beamte とすればよい、(Gastin とか Beamtin とか云ふは極めて拙な獨逸語である)、——尙ほ男性名詞よりして女性名詞を作る例を擧げて見やう、

der Gatte, die Gattin (夫, 妻); der Nachbar, die Nachbarin (隣人「男, 女」); der Erbe, die Erbin (嗣子, 嗣女); der Fürst, die Fürstin (侯爵, 侯爵夫人); der Japaner, die Japanerin (日本人, 日本婦人); der Engländer, die Engländerin (英國人, 英國婦人); der Franzose, die Französin (佛國人, 佛國婦人); der Russe, die Russin (露國人, 露國婦人); der Spanier, die Spanierin (西班牙人, 西班牙婦人); der Italiener, die Italienerin (伊太利人, 伊太利婦人); der Europäer, die Europäerin (歐洲人, 歐洲婦人) usw.

國民の名でも大概は上の通りに in を附して女性となすことが出来るのであるが、肝心の「獨逸の婦人」と云ふ語は此の規則に適合しない、即ち「獨逸人」は der Deutsche, 「獨逸婦人」は die Deutsche (die Deutschin とは決して言はぬ)。

注意二 語尾に ling を有する名詞は元來の文法性は男性であるが、概して男女兩性に適用することが出来る、即ち、

例 Seine Tochter ist ein Bögling dieser Anstalt. (彼の娘は此の學校の生徒である)、Sie ist der Liebling aller. (彼の女は凡ての人の愛人である)、Sie ist sein Schützling. (彼の女は彼の被護者である)。

注意三 Mann と組立てて出來た語の中の或るものは矢張 Epicoenen となることがある、

例 Sie ist mein Gewährsmann. (彼の女はわが保證人なり)、Sie ist mein Schiedsmann. (彼の女はわが審判者なり)。

D. 動物の名の中でも in を附して其の雌であることを示すことが出来るといふことは C. で述べて置いた、然し此の外に雌雄に對してそれぞれ特別の語を作るものがある、(この例も C. に掲げて置いた)

両性を兼ねたる名	雄	雌
das Pferd (馬),	der Hengst,	die Stute.
das Rindvieh (牛),	{ der Stier, der Ochs,	die Kuh.
das Schwein (豕),	der Eber,	die Sau.
das Schaf (羊),	{ der Widder, der Hammel,	das Mutter-schaf.
das Reh (鹿),	der (Reh)bock,	die Geiß.
das Huhn (鶏),	der Hahn,	die Henne.

次の語には雌雄共通の名なし、

雄	雌
der Kater (牡猫),	die Kätze (牝猫).
der Tauber (雄鳩),	die Taube (雌鳩).
der Entenich (雄鴨),	die Ente (雌鴨).
der Gänserich (雄鵞),	die Gans (雌鵞).

E. C. と D. との場合に適合せざるもの、即ち、in を附する事も出来ず、さりとして又、雌雄に對しそれぞれ特別の名の無きものに於ては、männlich (男性の)及び weiblich (女性の)といふ語を動物名の前に置くか、或は

Männchen (雄), Weibchen (雌)を動物名と結合するかしてその別を表はすのである、

例 Das männliche und weibliche Kamel (Krokodil, Reemtier). = 雄雌の駱駝 (鱷、馴鹿)。

Fünf Kamele, zwei Männchen und drei Weibchen = 五匹の駱駝、二匹の牡と三匹の牝。

Das Männchen des Kamels, das Weibchen des Kamels = 駱駝の牡、駱駝の牝。

Das Kamelmännchen, das Kamelweibchen. 同上。

Der männliche (weibliche) Schwan, das Schwanmännchen, das Schwanweibchen = 雄(雌)の鶴。

Die männliche (weibliche) Giraffe, das Giraffemännchen, das Giraffenweibchen = 牡(牝)の麒麟。

Der männliche (weibliche) Affe = 牡(牝)の猿。

Das Affenmännchen, das Affenweibchen = 牡猿、牝猿。

II. 人格名と動物名との性に就いては今までに略ぼ説き盡した、故に餘す所は無生物の名と抽象名とである。

無生物名及び抽象名詞 Sachnamen und Abstrakta に

男女の自然性 *das natürliche Geschlecht* を附することの出来ざるは、これ理の當然である、故に自然性を附することが出来ぬ以上は其れ等の名詞は皆な悉く中性(或は無性 *geschlechtslos*) であるべき筈である、理屈はそれに違ひないが、實際に於ては之れに反して獨逸文法にあつては無生物名及び抽象名にも矢張り男、女、中の性を附して居る、故に此の如き性を自然性と對して **文法性** *das grammatische Geschlecht* (§ 25. 注三) と名付けるのである、而して此の文法性なるものが例へば「机」を *der Tisch* と云ひて男性とし、「材木」を *das Holz* と稱して中性とし、「徳」を *die Tugend*、「罪」を *die Sünde* として女性となしてゐるが、其の間、一體何の據る所あり、また何等の標準の存するあつて夫々の語に此の如き性を附するに至つたのであらうか、否、其の間には何の根據も標準もない、只だ約束の存するばかりである。例へば月(何月といふ)の名は悉く男性となし、*ei* の語尾を有するものは女性となすと云ふ如きは畢竟約束に外ならぬ、何も月の名は必ず男性ならざる可からずとか、*ei* の語尾を有する語は女性に限れりとかいふ理由は秋毫もない、理屈から云つたならば中性となしても良い譯であるが、

中性となさずして男性となし女性となす處が即ち所謂約束なのである。然かし此の約束とても十が十まで行はれるとは云へない、中には除外例のあるものもあれば、又除外例なくして嚴密に行はれて居るものもある、次ぎに其の一般を説いて學習者の便に供しやう、

約束に二種類ある(一)は如何なる種類のものを表はす名詞は何性なりといふ様に其の表示するものによつて其性を定めるものと、(二)は如何なる形態を有するものは何性と定め、其の名詞の語幹、前綴、語尾等によつて定むるものである。文法上にては(一)の如きものを**意義 Bedeutung** (二)を**形態 Form** に依つて定むると稱す。

#### A. 意義 *Bedeutung* に依つて定むれば:

##### I. 男性となる可きものは:

- (1) 方位、<sup>(1)</sup> 四季、<sup>(2)</sup> 十二月、<sup>(3)</sup> 曜日、<sup>(4)</sup> 及び風<sup>(5)</sup> の名、

例 *der Ost,\* Osten* (東); *der West,\* Westen* (西);

(1) *Himmelsrichtungen*, (2) *vier Jahreszeiten*, (3) *Monate*, (4) *Wochentage*, (5) *Wind*. (3) に就きては拙著自修書後編九課 § 23 の 5 及び十課 § 24 の脚註を見よ、(4) 及び (5) に就ては同編九課 § 21—22 に詳細の説明と會話とを掲げたり。

der Süd,\* Süden (南); der Nord,\* Norden (北);  
 der Frühling (春), der Sommer (夏), der Herbst  
 (秋), der Winter (冬); der Januar (一月), der Feb-  
 ruar (二月), der März (三月), der April (四月),  
 der Mai (五月), der Juni (六月), der Juli (七  
 月), der August (八月), der September (九月),  
 der Oktober (十月), der November (十一月), der  
 Dezember (十二月); der Sonntag (日曜), der  
 Montag (月曜), der Dienstag (火曜), der Mittwoch  
 (水曜), der Donnerstag (木曜), der Freitag (金  
 曜), der Sonnabend (土曜).

(2) 石 der Stein の名、

例 der Diamant (金剛石), der Rubin (紅玉), der  
 Kiesel (珪石, 礫), der Stein (石)等.

II. 女性のもものは河の名の大部分、

例 die Donau (ドナウ川), die Elbe (エルベ川), die  
 Weser (ヴェゼル川)等.

\*der Ost, West, Süd, Nord なる形は東、西、南、北風の意味にも用ゐ  
 られ、其れに en の附せる der Osten, Westen 等の方は方位のみに用ゆ。

[例外] der Rhein (ライン川), der Neckar (ネッカー  
 川), der Nil (ナイル川).

III. 中性のものは:

(1) Alphabet の文字

例 das A, das B, das C. 等、

(2) 物質名詞の大部分、殊に 金属の名、

例 das Brot (麵包), das Fleisch (肉), das Gold (金),  
 das Silber (銀), das Eisen (鐵), das Blei (鉛),  
 das Kupfer (銅), das Zink (亜鉛).

[例外] der Honig (蜂蜜), die Butter (バター), die  
 Tinte (インキ), der Wein (葡萄酒), der Stahl  
 (鋼鐵).

(3) 國、都會、村落、州、嶋嶼等にして場所を示す  
 もの、名、

例 Deutschland (獨逸), Berlin (伯林), Tokyo (東京)  
 ——等の名詞の前に形容詞を附する時には das  
 を置く、das schöne Spanien (美はしき西班牙),  
 das volkreiche New York (人口稠密なる紐育)等、

(4) 不定法及び他の品詞が名詞となりしもの、

例 das Essen (食事), das Lesen (讀書), das Rauchen

(喫煙), das Gehen (行くこと), das Blaue (青)  
das Gute (善)等.

**B. 形態 Form に依り定むれば:**

**I. 男性のものは:**

- (1) Diminutiv の chen 及び名詞となれる不定法を除く他の語にて語尾に =en を有するもの、

例 der Boden (床), der Garten (園), der Regen (雨),  
der Hafen (港), der Rücken (背), der Faden (糸).  
等.

[例外] das Kissen (枕), das Becken (盤), das Wappen  
(紋章).

- (2) 語尾に =ee を有する五語、即ち、der Schnee (雪),  
der See (湖), der Kaffee (珈琲), der Tee (茶).

- (3) =ich, =ig, =ing, =ling の語尾を有するもの、

例 der Bottich (桶), der König (王), der Hering (鱈),  
der Flüchtling (落人), der Jögling (弟子).

- (4) =m 及び =ff の語尾を有するもの、

例 Der Helm (兜), der Baum (樹木), der Qualm  
(濃煙), der Turm (塔), der Schwarm (群); der

Stumpf (胴), der Sumpf (沼), der Strumpf (靴  
下), der Kopf (頭首)等.

**II. 女性に屬するものは:**

- (1) =ei, =heit, =feit, =schaft, =ung, =in\* の語尾を有するもの、及び外來語にして =ie,<sup>(1)</sup> =ion,<sup>(2)</sup> =if,<sup>(3)</sup> =tät<sup>(4)</sup> (§ 48 の 2) に終るものの全部、

例 Die Fischerei (漁業), die Arznei (藥劑), die  
Schmeichelei (諂諛), die Sklaverei (屈從); die  
Freiheit (自由), die Krankheit (病氣), die Ge-  
fundheit (健康), die Schönheit (美); die Freund-  
lichkeit (親密), die Tätigkeit (動作), die Dankbar-  
keit (感謝); die Hoffnung (希望), die Achtung  
(尊敬), die Zeitung (新聞), die Übersetzung (翻  
譯); die Poesie' (詩歌), die Theorie' (理論); die  
Nation' (國民), die Deklination' (變化), die  
Mission' (傳道); die Musik' (音樂), die Logik

(1) ie の語尾は羅甸の ia (theoria—Theorie)

(2) ion " " io (natio—Nation)

(3) if " 希臘の ιη 羅甸の ca (logica—Logik)

(4) tät " 羅甸の tas (majestas—Majestät)

(論理), die Mathematik' (數學); die Majestät' (尊嚴), die Universität' (大學), die Kalamität' (禍殃)、等.

注意 \*in に就ては § 26, I. C. にて説けり就きて見よ。

- (2) 動詞幹より作られたる名詞にして **-b** と **-t** の語尾を有するもの、

例 Die Bucht (入江)[buchen よ b], die Fahrt (通行)[fahren よ b], die Geduld (耐忍)[gedulden よ b], die Jagd (狩)[jagen よ b], die Schlacht (戦争)[schlachten よ b], die Schuld (負債)[schulden よ b]等.

- (3) **-e** (ee に非ず)に終る數綴音名詞<sup>(5)</sup> 及び其の Komposita<sup>(6)</sup> にして無生物の名、もしくは抽象名詞、

例 Die Birne (梨), die Blume (花), die Ehre (名譽), die Eiche (榿), die Erde (地球), die Hilfe (援助), die Kirsche (櫻の實), die Liebe (愛), die Schule (學校), die Stunde (時間), die Straße (道路), die Tanne (樅).

[例外] das Auge (眼), das Ende (終)[§ 45. 2], das Erbe (遺産), der Käse (乾酪)[§ 39, 2 及び § 37,

注 3] der Buchstabe (文字), der Gedanke (思想)  
[§ 39, 注脚].

### III. 中性に屬するものは:

- (1) Diminutiv の **-chen** と **-lein** (§ 26 I. A. の注意を見よ).

- (2) **-sel**, **-sal**,<sup>(7)</sup> **-nis**,<sup>(8)</sup> **-tum**<sup>(9)</sup> の語尾を有するもの、

例一 Das Rätsel (謎), das Überbleibsel (殘物)等.

[例外] der Topfel (栓), der Wechsel (爲替).

例二 Das Schicksal (運命), das Labial (爽心劑), das Scheusal (案山子)等.

但し Drangsal (壓制), Mühsal (辛酸), Trübsal (苦勞)は女性の方を良しとす、

例三 Das Gefängnis (禁錮), das Hindernis (障礙), das Gedächtnis (記憶), das Zeugnis (證據), das Bedürfnis (需要)等、

[例外] die Finsternis (闇黒), die Fäulnis (朽敗), die Verdammnis (永遠の墮落), die Besorgnis (心勞), die Erlaubnis (許容)等.

(5) § 8 を見よ、(6) § 9 の 1. を見よ、(7) § 41. 6 の注意 (8) § 41. 6 の注意 (9) § 43 の 3)

同じく *nis* に終るものでも中性になる時と女性になる時とがある、例へば *Ersparnis* (das 貯蓄物; die 節儉), *Erkenntnis* (das 判決; die 知識), *Verderbnis* (das 頹廢物; die 腐敗), *Verfäumnis* (das 怠慢より生ず損失; die 怠慢), *Ärgernis* (das 忿怒の動機となるもの; die 忿怒), *Erfordernis* (das 必要物; die 必要)等、即ち之れであつて、此れ等の語が具體的意味の時には中性、抽象的の意味には女性を用ゆる方がよい、

**例四** *Das Kaisertum* (帝國), *das Altertum* (古代), *das Christentum* (基督教), *das Eigentum* (所有物)等.

[例外] *der Irrtum* (迷誤), *der Reichtum* (富).

**注意** 文法書にては随分以上述べし所の外に尙ほ一層、詳細なる區別をつけてあるのがある、其れは殆んど例外と相半ばして居る故に、規則と例外とな差し引く時には寧ろ規則なるものを律せざるの勝れるに如かざるを覺ゆる程である。

§ 27. 次ぎには以上の諸規則に適合せぬ語を擧げて見やう。

1. *der, die Pate* (名付親), *der (das) Bauer* (百姓), *die, das Geschwulst* (腫物), *das (der, die) Klasten* (一尋の繩), *der, die Hirse* (黍), *die, der Behe* (趾)[二個

の冠詞の中先にあるものが後にあるものよりも普通に多く用ゐらるゝもので、括弧中にあるものは用ゐること稀なるを示す]

*Teil* (部分)といふ語は普通には男性である、然るに一容積の部分を獨立せるものと認むる場合には男性と同時に中性にも用ゐらるゝのである、例へば *Er hat sein Teil erhalten* (彼は己が割け前を受取つた)とか *für mein Teil* (わが分に對しては=余に在つては)、等である——然るに *Komposita*<sup>(1)</sup>にあつては、もしその *Teil* がその本來の意味を明らかに表はしてゐる時には一般に中性である[例: *das Erbteil* (遺産の股分), *das Pflichtteil* (義務の割け前), *das Altenteil* (老人の割け前), *das Vordertheil* (前部), *das Hinterteil* (後部), *das Gegenteil* (反對).] 然しその本來の意味が分明に感せられぬ時には男性なるを法則とする[例: *der Vorteil* (利益), *der Nachteil* (損失), *der Anteil* (=Teilnahme 同情).]

(1) § 9 の 1 を見よ、

2. 次の語は下の如く用ゐらるゝのが普通である、

**男性:** Bach (小河), Bracke (獵犬), Docht (燭心), Chor (合奏), Estrich (舗石), Floh (蚤), Honig (蜂蜜), Käfig (鳥籠), Koffer (箱), Lack (漆), Ort (場所), Rabe (鴉), Sarg (棺), Schauer (驟雨), Scheitel (顛頂), Schirm (傘), Regenschirm (雨傘), Schrauf (戸棚), Schrein (神社), Speck (ラカン), Spieß (鎗), Stahl (鋼鐵), Teller (皿), Ziemer (獸腸).

**女性:** Butter (バター), Pflugchar (犁嘴), Semmel (小麦の麵麩), Waife (孤兒).

**中性:** Barometer (晴雨計), Thermometer (寒暖計), Bündel (束), Floß (筏), Heft (手帳), Mündel (未丁年者), Münster (本寺), Öl (油), Pult (書机), Szepter (王杖), Sofa (安樂椅子), Tuch (布), Wams (短袍), Zeug (器具).—及び、語尾に at<sup>(1)</sup> を有する外來語で、tum といふ語尾を有せる獨逸固有の語と同じく位階、官職、地位を表はせる語: Pastorat (牧師の職), Rektorat (校長の職), Konsulat (領事の職), Kanonikat (牧師の職), Majorat

(嫡子權), Episkopat (監督の職)等、(此れ等は又、屢々男性にも用ゐらるゝことがある)。

**注意** 中性の外來語: Meter (米突), Gasometer (瓦斯メートル), Kilometer (キロメートル), Lifer (立突), Atom (原子), Meteor (氣象). 等を男性として用ゐても差し聞へがない、Goethe (世界の最大詩人の一)は自分のことを einen Barometer (晴雨計)と稱し Seine はロートシルト男爵の事を einen politischen Thermometer (政治的寒暖計)だと呼んでゐるが兩人とも einen と男性に用ゐて居る——Rhone (ローネ), Tiber (ティバー)の川名は語尾に e, er を有する獨逸の川名とその性を同じうし、女性に用ゐらるゝ。又 der Peloponnes (希臘の地名), der Chersones (希臘の地名), das Parthenon (雅典城内の神社の名)等も女性たることを得、—at の語尾を有する外來語の中で (at は羅甸の男性の語尾 atus に當る) 上に述べた位階、官職、地位等を表はす場合を除いて、必ず男性に用ゐらるべきものは der Senat (元老院), der Magistrat (市廳), der Ornat (禮服) である。

**紛らはしき性のもの:** das (der, die) Katheder (講壇), der, das Euter (乳頭), der, die Angel (蜂の針), der, die Zierat (飾), das, der Elfaß (エルサス州), das, der Rhein-, All-, Singgau (ライン地方, アル地方, ビンツ地方).

§ 28. 同音であつて、然かも意義と性とを異にしてゐる語(如斯を lautverwandte Wörter 或は *Synonyma* と云ふ之に對して音を異にすれとも意味に於て類似のものを sinnverwandte Wörter 或は *Synonyma* と云ふ)が澤山にある次ぎにこれを掲ぐ、

(1) at は羅甸語の語尾 atus (男性)。



1. 語源を同じうするもの: der Band (本の表紙), das Band (帶紐); der (das) Bauer (鳥籠), der Bauer (百姓); der Bund (同盟), das Bund (束); der Erbe (相續人), das Erbe (遺産); die Erkenntnis (知識), das Erkenntnis (判決); die Flur (野), der, die Flur (舗石); der Gehalt (在中物, 價), das (der) Gehalt (給料); der Schwallt (誇張), die Schwallt (腫物); der Haft (釘), die Haft (禁錮); der Heide (偶像信者), die Heide (荒地); der Hut (帽子), die Hut (用心, 牧場); der Kunde (花主), die Kunde (報知); (§ 26. I. C. 注-) der Lohn (報酬), der, das Lohn (給料); der Schenke 或は Schenk (酌人), die Schenke (酒屋); der Schild (楯), das Schild (看板); der See (湖), die See (海); der Sproß (嫩芽), die Sprosse (梯子の段); die Steuer (租税), das Steuer (舵); der Stift (釘, 鉛筆), das Stift (建立); der Verdienst (利得), das Verdienst (功績); die Wehr (防禦), das Wehr (堰).
2. 語源を異にするもの: der Alp (夢魘), die Alp(e) (アルプス山); der Buckel (僂僂), die Buckel (金釘);

der Geißel (人質), die Geißel (鞭); der Kiefer (顎骨), die Kiefer (松); der Koller (馬の瘋癲病), das Koller (胴衣); der Leiter (指揮者), die Leiter (梯子); der Mangel (缺乏), die Mangel (夾袂); die Mark (マルク, 貨幣の名), die Mark (境界), das Mark (髓); der Mast (橋), die Mast (飼料); der Messer (測量者), das Messer (小刀); der Mohr (黒坊), das Moor (沼澤); der Ohm (叔父), die, das Ohm (液量); der Reis (米), das Reis (幼枝); der Tau (露), das Tau (綱); der Tor (馬鹿者), das Tor (門); der (die) Weihe (鳶), die Weihe (祭祀).

§ 29. 組立名詞 *zusammengesetzte Hauptwörter* (或は *Komposita*) とは前綴 *Vorsilbe* 若しくは他の獨立したる名詞を前に有してゐる名詞をいふ。他の獨立したる名詞と結合したるものに有つては前に位するものを **定語 das Bestimmungswort**, 終りのものを **基語 das Grundwort** と稱す、

定語+基語なる名詞の文法性は必ず基語の性に依つて定むるものである、

例 Die Kirsche+der Baum で der Kirschbaum (櫻樹);

die Frau + das Zimmer = das Frauenzimmer (婦人); das Haus + die Tür = die Haustür (家の戸); das Feld + die Blume = die Feldblume (野の花); der Garten + das Haus = das Gartenhaus (園亭); der Tag + das Buch = das Tagebuch (日記帳); die Ordnung + die Liebe = die Ordnungsliebe (締り好き); die Glocke + die Blume = die Glockenblume (釣鐘草)等.

注意一 der Mut (意)なる語を基語とせる組立名詞には此の規則が適用されぬものがある、例: die Großmut (大量), die Sanftmut (温順), die Demut (謙讓), die Humut (適意).

注意二 die Wurst (腸詰)なる語を基語とせる der Hanswurst (諧謔者); die Schen (恐懼)を基語とせる der Abschen (憎悪); die Woche (週間)を基語とせる der Mittwoch (水曜日)も同じく例外である。

注意三 組立名詞の變化に就きては猶ほ名詞變化の章を参照すべし。

注意四 名詞が結合して組立名詞を作る際には、其の定語は往々、語尾に e, s, es, n, en を附するか若しくは複数の語尾を附して、本來の形を變ずることがある、即ち上例に掲げた、Frauenzimmer, Tagebuch, Ordnungsliebe, Glockenblume 等の如きものである。

§ 30. 名詞の數と格 Zahl und Kasus des Substantivs, 及び冠詞 Artikel, 名詞の變化を講せんとするに先だちて、是非知り置かざる可からざるものが三つある、即ち名詞の:

1. 數 Numerus (Zahl),
2. 格 Kasus (Verhältnisfall),

### 3. 冠詞 Artikel (Geschlechtswort).

である。

§ 31. 數 Zahl: 唯だ一個の物のみを指す名詞の形を單數 **Singulär** 或は **Singular** ひと云ひ [例. Vater (父)—Kind (小兒)]. 一個以上の物を示す名詞の形を複數 **Plural** 或は **Plural** と稱す [例. Väter (父等)—Kinder (小兒等)]. 辭書、文法書等にては **Singular**, **Plural** を略して **S. Pl.**, または **Sg. Pl.** または **Sing. Plur.** と書く。

注意 單數、複數に就きては後に於て詳述する場合あるべし。

§ 32. 格 Kasus: 例へば日本語でも「父の家」と云ふ可きを「父、家」と云ひ、「小兒は父に手紙を興ふ」と云ふことを「小兒、父、手紙、興ふ」と言ふたなら少しも意味が解らぬと同じく、獨逸語でも „Vater Haus“ とか „Das Kind Vater Brief geben“ などとしては薩張り文章には成つて居ない、故に今此れを正確に文章となすには „Das Haus des Vaters“—„Das Kind gibt dem Vater den Brief“ とせねばならない、此の一例によつて察し得らるゝ通りに獨逸語にも矢張り日本語の「てにをは」に相當するものがある、上例の「小供が」のが、「父の家」の、「父に」のに、「手紙を」のをの如きは文章中に於ける

名詞の關係を表はしてゐる、此日本の「てにをは」に當る關係形を名詞の格 *Kasus* 或は *Verhältnisfall* と名づける、而して此の *Kasus* は單數にても複數にあつても明亮に表はれてゐるのであるから、文章中にある名詞相互間の關係は日本語に於けるよりも一層精密なるは論を俟たぬ。

§ 33. 冠詞 *Artikel*: 扱て上に述べた格は「かのにを」といふ四つの「てにをは」に應じて四つの形を有して居る、而して此の格を示す爲めには、前章に鳥渡述べて置いた冠詞 *Artikel* なる詞を用ゆ、然るに此の冠詞は此の如く名詞の格を示すのみならず、其の性をも示す務を有して居るが故に男、女、中の三性に對して夫々其の形を異にしてゐる。冠詞は名詞の性を示すと云ふ處から獨逸語では *Geschlechtswort* 性詞とも云ふ。

日本語で「之れは鉛筆といふものなり」「之れはペンといふものである」「之れは小刀といふものなり」と云ふことを獨逸語にては

Das ist **der** Bleistift.

Das ist **die** Feder.

Das ist **das** Messer.

といふのであるが、*Bleistift* (鉛筆)の前にある **der** は男

性の冠詞、*Feder* (ペン)の前の **die** は女性の冠詞、*Messer* (小刀)の前なる **das** は中性の冠詞であるので、此れに因つて *Bleistift*, *Feder*, *Messer* の性が自ら明瞭になる譯である、

扱て *der*, *die*, *das* の何れかを名詞の前に置く場合は、或る定まつた或は既知のものを指す時、若しくは或る一個の名詞を其の種屬全體の代表と見做す時である(冠詞の用法に就きては後に詳説すべし)、故に、かの „Das ist *der* *Bleistift*“ は之れを譯せば「之れはあの、例の、前に話した、今話題に登つてゐる、約束した鉛筆です」とか「之れが鉛筆といふものです」とか言ふべきである。

所が「之れは鉛筆です」「之れはペンです」「之れは小刀です」と云ふのに最一つ言ひ方がある

Das ist **ein** *Bleistift*,

Das ist **eine** *Feder*,

Das ist **ein** *Messer*.

が即ち之れであつて *Bleistift* と *Messer* との前にある **ein** は男性と中性とに通ずる冠詞で、*Feder* の前にある **eine** は女性の冠詞である、

扱て *ein*, *eine*, *ein* の何れかを名詞が戴く場合は *der*,

die, das の時の如く確定せるものとか、既知のものとか、種屬全體の代表物とかを表はすと異なり、唯だ何でもよい一個の物を言ひ表はすのである、

叙べ來つて冠詞には二種類あることが解かる、即ち der, die, das の部と ein, eine, ein の部とである、前者を名づけて定冠詞 *der bestimmte Artikel*, 後者を不定冠詞 *der unbestimmte Artikel* といふ。

§ 34. 此の der, die, das; ein, eine, ein は四つの格の中の一つであつて第一の「が」「……と云ふもの」等に相當する格を表はして居る、此の「が」の格が「の」「に」「を」の格に變化するのであつて此れ等四つの格 *Kasus* の名稱は次の如し:

- [父] が, は, で...第一格或は獨立格 *der Nominativ*.  
 „ の .....第二格 „ 所有格 *der Genitiv*.  
 „ に .....第三格 „ 靜止格 *der Dativ*.  
 „ を .....第四格 „ 運動格 *der Accusativ*.

第一格 *der Nominativ* は「が」「は」「で」「...と云ふもの」等の外に文章中に於ける他の語との關係なく、單に「何々」と云ふ風に例へば辭書に出してあると同じく、其れのみ單獨に用ゐられ得るが故に獨立格 *der*

*gerade oder unabhängige Kasus* 羅甸の術語で *casus rectus* と名付けられてゐる、然るに殘餘の三格は例へば「父の何々」「父に何々」「父を何々」といふ風に必ず他の語に依從せねばならぬが故に之を依從格 *der abhängige Kasus* 或は羅甸の術語で *casus obliqui* と呼ぶ、

注意 文法書辭書等に於ては *Nominativ*, *Genitiv* などと書く代りに普通は之れを略して *Nominativ* を *N.* 或は *Nom.*, *Genitiv* を *G.* 或は *Gen.*, *Dativ* を *D.* 或は *Dat.*, *Accusativ* を *A.* 或は *Acc.* として用ゐてある。

§ 35. 冠詞の變化 *Declination des Artikels*: 定冠詞、不定冠詞が四つの格に變化する時には單數と複數とに於て其の形を異にし(但し不定冠詞には複數がない)單數に於ては男、女、中の三性によつて各々其形を異にしてゐる、即ち下の如し:

#### 定冠詞變化 *Declination des bestimmten Artikels*.

Sing. (單數)			Plur. (複數)	
m. (男)	f. (女)	n. (中)	m. f. n.	
<i>N. der</i>	<i>die</i>	<i>das</i>		<i>die</i>
<i>G. des</i>	<i>der</i>	<i>des</i>		<i>der</i>
<i>D. dem</i>	<i>der</i>	<i>dem</i>		<i>den</i>
<i>A. den</i>	<i>die</i>	<i>das</i>		<i>die</i>

複数に於ては男、女、中の三性に對して定冠詞は共通である、

不定冠詞變化 Declination des unbestimmten  
Artikels.

Sing. (單數)			Plur. (複数)
m. (男)	f. (女)	n. (中)	不定冠詞には複 數の形なし(但し 此のことに就きては 後に詳述する所ある べし)
N. ein	eine	ein	
G. eines	einer	eines	
D. einem	einer	einem	
A. einen	eine	ein	

Kapitel IV. 第四章

名詞の變化 Declination der Substantiva.

§ 36. 名詞の Declination とは其の名詞の單複兩數に於ける格を明かにする方法を云ふ、而してこの格を示すには主として冠詞及び名詞の末尾に附する語尾 Endung 若しくは Umlaut に依る、併し何れの格に於ても名詞その物が必ず其の形を變ずるといふ譯ではないの

で、女性名詞の如きに至つては單數に在つて少しも形を變じない。

名詞には四つの格を通じて僅少の(或は弱き)變化をなすものと多様の(或は強き)變化をなすものとの二種がある、即ち名詞の變化には

I. 弱變化 Schwache Declination

II. 強變化 Starke Declination

の二種がある、而して前者の一部と後者の一部とが合して所謂混合變化 gemischte Declination なるものが出る、之れは單數に於ては強變化の語尾を取り、複數に於ては弱變化の語尾を附するのであつて、何れも強弱兩變化と全然別箇の特別な變化をなすものではないから、名詞變化の種類には強弱の二種あるのみである。

然らば弱と強との差は如何なるものであるかと云ふに、弱變化では Nom. Sg. (單數一格)を除くの外、單複兩數を通じて (e)n の語尾を附し、強變化では Gen. Sg. (單數二格)に (e)s, Dat. Sg. (單數三格)に (e) を附し複數に於ては名詞によつて種々に語尾が違ふ。

注意 (e)n, (e)s, (e) として e を括弧の中に入れたるは其の (e) を省く場合もあるといふことを示す、之れに就きては猶ほ後に説明せん。(§ 46)

§ 37. 弱變化 Schwache Declination.

範例 Musterbeispiele.

(1)

Sing.	
N. der Knabe	} Knaben
G. des	
D. dem	
A. den	
Plur.	
N. die	} Knaben
G. der	
D. den	
A. die	

(2)

Sing.	
N. der Mensch	} Menschen
G. des	
D. dem	
A. den	
Plur.	
N. die	} Menschen
G. der	
D. den	
A. die	

(3)

(α)	(β)	(γ)
Sing.		
N. die	die	die
G. der	der	der
D. der	der	der
A. die	die	die
Plur.		
N. die	die	die
G. der	der	der
D. den	den	den
A. die	die	die

1) 此の變化に屬する名詞は男性及び女性のものであつて中性名詞で此の變化をなすものは一つもない、

而して此の變化に屬するものは、(1) Nom. Sing. (單數一格) にて e の語尾を有する男性名詞、これは單數一格以外では n の語尾を附す [範例 (1) の der Knabe の如し]、(2) 時代の變遷と共に Nom. Sing. (單數一格) の e を失ひたる少數の男性名詞、これ等には單數一格を除いては皆 en の語尾を附す [範例 (2) の der Mensch の變化の如し]、(3) 女性名詞の大部分、これには其の語の形により複數にて語尾に n を附するもの [範例 (3) (α) の die Feder の變化の如し] と en を附するもの [範例 (3) (β) の die Frau の變化の如し] との二種がある、また單數にて語尾 in を有するものは複數に於ては nen を附す [範例 (3) (γ) の die Gräfin の變化を見よ]、

2) 此の變化に屬するものは複數にて Umlaut を附することは決してない、

3) 女性名詞は其の弱變化なると強變化なるとを問はず單數に於ては決して變化しない。

問題 1. 次の語を範例 (1) (2) に倣ひ變化せよ

(1) の der Knabe と同變化をなす語の例: der Affe

(猿), der Bote (使者), der Löwe (獅子), der Keffe (甥), der Bayer (巴威人), der Ungar, (匈牙利人), der Schwede (瑞典人), der Gefährte, (伴侶), der Genosse (仲間), der Rabe (烏), der Rappe (黒馬), der Falke (鷹), der Sachse (撒遜人), der Grieche (希臘人), der Franzose (佛蘭西人), der Russe (露西亞人), der Franke (フランク人), der Türke (土耳其人), der Erbe (相續人), der Göze (偶像), der Heide (偶像信者), der Hirte (牧人) [斯 § 4 注八], der Burche (若者), der Geselle (仲間), der Knappe (徒弟), [斯 § 4 注八], der Junge (若輩), der Drache (大蛇), der Hase (兎), der Ochse (牡牛), der Bauer (農夫).

- (2) の der **Mensch** と同變化をなす語の例: der Fürst (侯), der Geck (花々公子), der Graf (伯爵), der Narr (愚人), der Prinz (皇子), der Hagestolz (獨身者), der Held (勇士), der Insaß (同居人), der Mohr (黒奴), der Pfau (孔雀), der Spah (雀), der Sproß (嫩芽), der Tor (愚者), der Vorfahr (祖先), der Falk (鷹) usw.

問題 2. 次の名詞を範例 (a) (β) (γ) に倣ひ變化せよ

- (3) と同變化をなすものゝ例: (a) die Ziege (山羊), die Fliege (蠅), die Dirne (賤婦), die Rahe (猫), die Ratte (鼠), die Eule (梟), die Säule (柱), die Pflanze (植物), die Blume (花), die Flinte (小銃), die Freude (喜), die Begierde (慾), die Geschichte (歴史), die Drossel (鶉ツグミ), die Muschel (貝殻), die Nudel (素麵), die Amsel (白頭翁), die Gabel (肉刺), die Wachtel (鶉), die Fabel (寓話), die Nadel (針), die Schüssel (大盤), die Schaufel (シャプロ), die Orgel (大オルガン), die Schaukel (二兒其の兩端に跨りて相上下する板, 韻韻板, 英の see-saw), die Trommel (太鼓), die Schwester (姊妹), die Ader (脈管), die Mauer (垣), die Feder (ペン), die Ziffer (數字), usw. — (β) die Bahn (軌道), die Frau (女), die Sau (牝豚), die Au (草野), die Art (種類), die Form (形), die Zahl (數), die Flut (洪水), die Glut (炎熱), die Schuld (債務, 咎), die Tür (戸), die Jagd (獵), die Last (重荷), die Pflicht (義務), die Gegend (地方), die Jugend (青年), die

Tugend (徳), die Schönheit (美), die Arznei (薬),  
die Gesundheit (健康), die Grafschaft (伯爵領地),  
die Leidenschaft (熱情), die Beleidigung (侮辱), die  
Täuschung (失望, 迷想), die Natur' (自然), die  
Nation' (國民), die Million' (萬), die Person' (人  
格), die Korrektur' (校正), die Harmonie' (調和),  
die Melodie' (曲節), die Universität' (大學校), die  
Majestät' (陛下), —(r) die Lehrerin (女教員), die  
Schneiderin (女仕立屋), die Königin (皇后), die  
Kaiserin (皇后), die Sklavin (女奴隸), usw.

問題 3. 次の男性名詞に語尾 **in** を附し單複とも變化  
せよ

(範例 3 r に倣ひ) Fürst (侯爵), Kaiser (皇帝),  
Herzog (公爵), Bauer\* (農夫), Schneider (仕立屋),  
Weber (織布者), Koch\* (料理人), Hirte (牧者),  
Lehrer (教師), Schüler (生徒), Freund (友人),  
Gefährte (伴侶), Nachbar (隣人), Dieb (盜賊),  
Narr (愚物), Tor (同上), Herr (君), Gott\* (神),  
Jude\* (猶太人), Mohamedaner (モハメット教徒),  
Türke (土耳其人), Franzose\* (佛蘭西人), Spanier

(西班牙人), Portugiese (葡萄牙人), Schwede  
(瑞典人), Pole (波蘭人), Europäer (歐羅巴人),  
Amerikaner (亞米利加人), Asiate (亞爾亞人), Neger  
(黑人), Mohr (同上), Indianer (亞米利加 印度人),  
Indier (印度人); —Löwe (獅子), Tiger (虎), Wolf\*  
(狼), Fuchs\* (狐), Esel (驢), Bär (熊), Affe\* (猿),  
Hase (兔).

注意 \* の附しある語は語尾 **in** を附すると同時に幹母音に Umlaut  
を冠す、例せば **Röchin** の如し、

4) 以上問題 1. 2 とに掲げた外に、**or** に終る男性  
名詞で概して羅匈語から來たものが(混合變化を見よ)單  
數では強き變化をなし複數では弱く變化して **en** の語  
尾を附するものがある、而して **or** の **o** は **o'** と伸し  
且つ力を入れて發音す(自修書後編六頁の脚註、本書 §  
50, 2, § 45, 2)

問題 1. 次の名詞の複數を作り且つ其れを讀め其の際  
**or** の **o** を長く強く讀むことを忘れてはならぬ、  
**Doktor** (博士, 醫師), **Direktor** (校長), **Rek-  
tor** (總長), **Professor** (教授), **Korrektor** (訂正  
者), **Debitor** (債務者), **Kreditor** (債權者).



**注意一** der Herr (君)の單數に於ける casus obliqui (依從格)は n, 複數にては四格とも皆 en を附す: der Herr, des Herrn, dem Herrn, den Herrn; die, der, den, die Herren.

**注意二** der Käse (乾酪)は e に終る男性名詞なれども弱變化に屬せず、これ唯一の例外なり、(§ 39, 2)

**注意三** 女性名詞にして語尾が nis, sal のもの、少數の單綴語及び die Mutter (母), die Tochter (娘), die Ausflucht (逃走)を除くの外は皆な弱變化に屬す、尙ほ女性名詞にして強變化に屬するものに就きては其の部を見よ、

**注意四** el, er に終る女性名詞は複數にて概して語尾に n を附す、男姓名詞に在つては然らず(強變化の部を見よ)、

**注意五** 女性名詞は以前は單數に於ても語尾を附したので今に其の形が残つて居る例へば: im Himmel und auf Erden, Liebfrauenkirche, Liebfrauenmilch. — Fest gemauert in der Erden steht die Form aus Lehm gebrannt. — Es ist nicht so fein gesponnen, alles kommt aus Licht der Sonnen.

**注意六** 若干の名詞で弱くも強くも變化出来るものがある、Bauer が(農夫)の意味の時は弱變化に従ふが其の他の意義(烏籠)の時は強く變化す(強變化を見よ)。— Gevatter (洗禮立合人), Better (従兄弟), Nachbar (隣人), Untertan (臣)は複數に於ては弱く變化す、Nachbar と Untertan は單數にても強く變化して居る場合がある、

**注意七** Mond, Sau, Dorn の複數にも意味に依つて弱くも強くも變化される Monden は十二月の月 Monde は天の月, Sauen は牝豚(此の? 問題 2 を見よ), Säue は野猪, Dornen 或は Dorne は刺或は荊ある植物の總稱 Dörner は個々の刺を云ふ、

**注意八** 次の語の單數一格には二様の形がある、der Bursch od. Bursche, der Hirt od. Hirte, der Knapp od. Knappe, Gefell od. Gefelle, der Schüb od. Schübe, der Dohs od. Dohse, der Falk od. Falke usw. e のある方は範例 (1) der Knabe の如く、他は (2) der Mensch の如く變化す、

## § 38. 強變化 Starke Declination.

### 1) 單數 Singular.

單數に於ける強變化の特色 das Charakteristikum は男性及び中性名詞の第二格に es 或は s (§ 46 を見よ)、第三格に (e) (§ 46 を見よ)の語尾を附することである、(弱變化の時は如何?) 而して第四格は第一格と同形なり、但し女性名詞が單數に於て變化せざることは既に前に述べたるが如し、(§ 37, 3)

**男性名詞の例:** der Mann (男), des Mannes, dem Manne, den Mann; der Kaiser (皇帝), des Kaisers, dem Kaiser, den Kaiser. 等

**中性名詞の例:** das Buch (本), des Buches, dem Buche, das Buch; das Lamm (小羊), des Lammes, dem Lamme, das Lamm; das Rätsel (謎), des Rätsels, dem Rätsel, das Rätsel; das Mädchen (少女), des Mädchens, dem Mädchen, das Mädchen; das Gitter (格子), des Gitters, dem Gitter, das Gitter. 等

單數に於ける語尾 Endungen は次の如し

男. 中.	女
Nom. —	—
Gen. —es, —s	—
Dat. —(e)	—
Aff. —	—

此れ等上に揚げたる例及び語尾の表のみを見ても明らかなるが如く、單數に於ける變化は極めて簡單である、即ち二格は (e)s, 三格は (e), 四格は一格と同形なので、問題は唯だ二格と三格とに e が附くか附かぬかといふことに歸する、(§ 46 を見よ)

2) 複數 Plural.

強變化の複數は第一格と第二格と第四格とは常に同形である、而して第三格には必ず n の語尾を附するのが特色である(但し s の語尾を有するものの第三格は第一格と同形、即ち四個の格皆な同一形なり[§ 44. 1 を見よ])。而して第三格の n は第一格の末尾に附すべきものであるが若し第一格が n で終つてゐる場合には n を附してはならぬ。

男性名詞の例: die Männer, der Männer, den Männern, die Männer; die Kaiser, der Kaiser, den Kaisern, die Kaiser. 等

女性名詞の例: die Hände (手), der Hände, den Händen, die Hände; die Mütter (母), der Mütter, den Müttern, die Mütter; die Brüste (胸), der Brüste, den Brüsten, die Brüste. 等

中性名詞の例: die Bücher (本), der Bücher, den Büchern, die Bücher; die Lämmer (小羊), der Lämmer, den Lämmern, die Lämmer; die Rätjel, der Rätjel, den Rätjeln, die Rätjel. 等

此の如く第一格、第二格、第四格は同一形で第三格のみ n を附すればよいのであるから複數第一格の形を知りさへすれば他の格は難なく知ることが出来る、即ち複數第一格は複數形の標準である。單數第二格は單數の變化の標準であり、複數第一格は複數の變化の標準であるから辭書には必ず名詞の傍らに單數二格と複數一格の語尾が示してある。

強變化の六式

強變化は複數の形に依り次の六式に分たる、

## § 39. 複数が単数と同形のもの、

## 第一式範例 Musterbeispiel.

Sing.	Plur.
N. der Löffel	die Löffel
G. des Löffels	der Löffel
D. dem Löffel	den Löffeln
A. den Löffel	die Löffel.

1) 即ち冠詞は變化してゐるが名詞其物は單數一格も複數一格も同形である、

2) 此の式に屬するものは男性で、主として =el, =er, =en に終るものと、中性で主として =el, =er, =en の語尾また數綴語で e に終るものと Diminutiv (§ 26. I. A. 注意)の =chen, =lein を有するものとで、女性名詞にはこれに屬するものはない、

問題 範例に倣ひ次の名詞を變化すべし、

der Stengel (莖), der Flügel (翼), der Himmel (天),  
 der Schlüssel (鍵), der Spiegel (鏡), der Metallspiegel (金屬鏡), der Esel (驢), der Maulesel (騾),  
 der Stubenschlüssel (部屋の鍵), der Lehrer (教師),  
 der Schullehrer (學校教員), der Schneider (仕立屋),  
 der Flickschneider (繕仕立屋), der Schüler

(生徒), der Mitschüler (同窓), der Schreiber (書記);  
 — der Käse\* (乾酪), der Schaffkäse (羊乳製乾酪);  
 — das Mittel (手段), das Heilmittel (藥劑), das Fenster (窓), das Gassenfenster (隅の窓), das Gebirge (山嶽), das Schneegebirge (雪山), das Mädchen (少女), das Dienstmädchen (下女), das Weilchen (堇), das Alpenweilchen (アルペン山の堇); das Blümlein (小さな花), das Frühlingsblümlein (春の小花).

注意 =en, =chen, =lein に終つてゐるものは複數三格で更に n の語尾を附せざることに注意せよ (§ 46, 1)

單數一格にて =en に終る語の中の少數のものは其の en の e を省くものがある、即ち:—

der Name=der Namen (名), der Gedanke(n) (思想), der Haufe(n) (累積), der Glaube(n) (信仰), der Wille(n) (意志), der Schade(n) (損害), der Same(n) (種子), der Friede(n) (平和), der Buchstabe(n) (寫音文字), der Funke(n) (火花), である、此の外に der Fels=der Felsen (岩), der Brunnen (井戸), der Schred(en) (恐怖)を注意すべし。此の如く en と e との兩形を作るとは云へそれは只だ單數一格のみで二格以下は en の方によつて變化されねばならぬ、例: der Name(n), des Namens, dem Namen, den Namen; Pl. die Namen, der Namen, den Namen, die Namenであつて之れを der Name(n), des Name, dem Name, den Name などとしてはならぬ。

\* Käse は e に終る男性名詞で形より言へば弱變化に屬すべきものなれど唯一の例外とし此の變化に加へらる der Käse, des Käses, dem Käse, den Käse: die Käse, der Käse, den Käsen, die Käse (§ 37. 注意 二).

§ 40. 複數にて語尾を附せずして Umlaut を冠するもの、

第二式範例 Musterbeispiele.

Eq.	Pl.	Eq.	Pl.
N. der Vater	die <b>Väter</b>	der Bruder	die <b>Brüder</b>
G. des Vaters	der <b>Väter</b>	des Bruders	der <b>Brüder</b>
D. dem Vater	den <b>Vätern</b>	dem Bruder	den <b>Brüdern</b>
A. den Vater	die <b>Väter</b>	den Bruder	die <b>Brüder</b> .

1) 此の式にては單數と複數との差は只だ Umlaut (§ 5. 3, a) である、但し此の變化に屬する名詞では二重音 Diphthong au を äu に變換するものは無い、

2) 此の變化に屬するものは主として男姓名詞である、女性名詞では只だ die Mutter (母), die Tochter (娘), 中性名詞では das Kloster (寺院), das Wasser (水) das Lager (位置)とがあるのみ、但し Wasser と Lager の複數は Umlaut を附せぬ方が普通でまた正確である: die **Wasser**, die **Lager** (die Wässer, die Läger とは殆んど云はぬ).

問題 範例に倣ひ次の名詞を變化すべし、

der Apfel (林檎), der Mangel (缺乏), der Mantel (外套), der Nagel (爪), der Sattel (鞍), der Schna-

bel (嘴), der Vogel (鳥), der Acker (田圃), der Hammer (鐵槌), der Garten (園), der Blumengarten (花園), der Schwager (義兄弟), der Faden (絲), der Ofen\* (暖爐), der Boden\* (床).

\*注意 der Ofen, der Boden は複數にて Umlaut を戴かぬことも出来る。

§ 41. 複數にて e に終るもの、

第三式範例 Musterbeispiele.

Eq.	Pl.	Eq.	Pl.
N. der Berg	die <b>Berge</b>	das Jahr	die <b>Jahre</b>
G. des Berges	der <b>Berge</b>	des Jahres	der <b>Jahre</b>
D. dem Berge	den <b>Bergen</b>	dem Jahre	den <b>Jahren</b>
A. den Berg	die <b>Berge</b>	das Jahr	die <b>Jahre</b>

1) 茲では複數の形は單數一格に e を附して作られたのである、

問題 1. 範例に倣ひ次の名詞を變化せよ:

der Berg (山), der Eisberg (氷山); der Wein (葡萄酒), der Brauntwein (燒酎); der Hund (犬), der Haushund (家犬); der König (王), der Zaunkönig (鶯鶯); der Fähnrich (旗手), der Portepfefährich (見習士官); der Jüngling (青年); der Heldenjüng-

ling (英雄的青年); der Schmetterling, (蝴蝶); der Entenich (雄鴨), der Zeißig (蠟嘴); der Hirsch (牡鹿), der Damhirsch (斑文ある牡鹿); der Aal (鰻), der Fisch (魚); der Arm (腕); der Schuh (靴), der Handschuh (手袋), der Nicht (奴); der Abend (晩); der Monat (月); das Schaltjahr (閏年); das Reh (鹿); das Pferd (馬), das Schaf (羊); das Geschenk (贈物); das Gebüsch (藪), das Gefäß (容器); das Scheusal (案山子); das (die) Mühsal (辛苦), die Drangsal (窘迫). [§ 41, 6] 注]

2) 末尾 *-s* (Schluß-*s* 或は rundes-*s*) に終る名詞にして其の *s* の次に母音にて始まる語尾の附せらるる場合には *s* は *r* に變はる、此の規則は單數二格の時のみならず他の類似の場合にも適用される 例: das Moos (苔), des Mooses; der Greis (老翁), des Greises, dem Greise; das Los (籤), dem Lose 動詞になりても: losen (籤引く), sich bemoosen (苔蒸す); ergreifen (老いる)等.

3) *-is* で終る名詞の正字法 *Orthographie* に関しては注意すべき點が二つある

a) *-is* の前に在る母音の長き時

*-is* は變ることなく語尾を其の儘附す、此の式では即ち *e* を附せばよい、

例: das Maß (尺度), die Maße; das Bließ (毛房), die Bliese; der Schweiß (汗), die Schweiß; 二格なれば: des Maßes, des Bließes, des Schweißes 等.

問題 2. *s* に終る次の名詞の複數形を問ふ:

das Los (籤), das Gleis (軌道), der Greis (老翁);

b) *-is* に先き立つ母音が短き時

*-is* の後に母音で始まる綴音の次ぐ場合は *-is* は *-iss* に改む、

例: das Roß (駿馬), die Rösser; der Sproß (嫩芽), die Sprosse; der Ablass (贖罪), die Ablasse, 二格なれば: des Rösses, des Sprosses, des Ablasses; 此の外、若干の外來語にして其の *-is* にて終る語尾が Hochton (§ 12.-16. を見よ)でなく Tiefton, (§ 12.-16. を見よ)を有するもの

例: der Kompaß (羅針盤), die Kompasser; der Küraß (鎧), die Küraße.

4) 女性及び男性名詞にして *-nis* に終るものも複數にては *e* を附すが、其の場合には *-nis* の *s* が *-iss* に變はるのである、例: das Ereignis (事變), die Ereignisse

(二格; des Ereignisses, 三格: dem Ereignisse); die Kenntnis (智識), die Kenntnisse.

問題 3. 次の =nis に終る名詞の前に定冠詞を置き其の複數を作れ

das Bildnis (像); die Wildnis (荒地); das Gefängnis (牢獄), das Geheimnis (秘密), das Verfümmnis (怠慢); das Hindernis (障害); das Fördernis (進捗); das Bündnis (同盟); das Vermächtnis (遺産), das Verhältnis (不幸), das Geständnis (懺悔), die Kenntnis (智識); die (das) Erkenntnis (認識), das Zeugnis (證據), das Verzeichnis (記録).

5) 4 と同規則に従ふ次の語を注意すべし: der **Altis** (鮑), **Kürbis** (南瓜), **Firn** (ワニス). 二格: des **Altisses**, des **Kürbisses**, des **Firnisses**; 複數: die **Altisse**, die **Kürbisse**, die **Firnisse**. この外猶若干の外來語も同規則に加へらる: 例. das **As** (古羅馬の銅貨), 複數: die **Asse** (die **As** とも云ふ), 二格: des **Asses** (des **As** は良くない); die **Ananas** (鳳梨), 複數: die **Ananasse** (或は **Ananas**); der **Atlas** (地圖), 二格: des **Atlases**, 複數: die **Atlasse** od. **Atlanten**.—

der **Globus** (球), der **Erdglobus** (地球儀), der **Himmelsglobus** (天體儀). 二格: des **Globusses** (或は **Globus**), 複數: die **Globusse** (或は **Globen**);—das **Rhinozeros** (犀), 二格: des **Rhinozesses** (或は **Rhinozeros**), 複數: die **Rhinozesse** (或は **Rhinozeros**).

6) 此の式に屬するものは =fal\* と =nis とに終る若干の女性名詞(1. と 4. を見よ)[及び **Ananas** の如き外來語]の外は悉く只だ男性名詞である。

注意 =fal に終る語には中性のもの[例: das **Himmfal** (流水), das **Schenfal** (案山子), das **Sabfal** (爽心劑), das **Schickfal** (運命)等]と男女兩性何れにもなり得るものがある[例: das, die **Drangfal** (窘迫), **Mühsfal** (辛苦), **Trübsfal** (悲哀)等].

=nis に終る名詞には女性のものの中性のものと又た男女兩性の何れにも成り得るものがある、次に例を擧げて見やう

die Kenntnis (智識), das Bekenntnis (自白); die Erkenntnis (知識), das Erfenntnis (認識), die Ärgernis (憤怒), das Ärgernis (侮辱), die Ersparnis (貯蓄物), das Erspar-

nis (貯蓄), die od. das Säumnis, (怠慢), die od. das Verjüumnis (等閑).

以上の語では性によつて多少意味を異にして居るが次に挙げるものは意味の差なく單に習慣上、性が一定せぬのである、併し括弧内に記してある性は稀に用ゐらるゝ方のである

(die) **das** Drängnis (壓迫), Befugnis (能力), Begabnis (天與), Begegnis (事變), Bewandnis (形勢), Fahrnis (動産), Fordernis (進捗), Schrecknis (恐怖), Verdammnis<sup>(1)</sup> (永遠の墮落), Verderbnis<sup>(2)</sup> (墮落), Verlöbnis (婚約).

**die** Kimmernis (悲哀), Besorgnis<sup>(3)</sup> (心勞), Trübnis, (憂愁), Betrübnis (苦惱), Empfängnis (稀れに **das**) (受胎), Erlaubnis<sup>(4)</sup> (許容), Finsternis<sup>(5)</sup> (闇黒), Trocknis (乾燥), Wildnis (荒地).

**das** Bedürfnis<sup>(6)</sup> (需要), Begräbnis (墓), Bildnis (像), Bündnis (同盟), Einverständnis (會得), Ereignis (事變), Erfordernis (必要), Erzeugnis (産物), Gedächtnis<sup>(7)</sup> (記憶), Gefängnis<sup>(8)</sup> (禁錮), Geheimnis (秘密), Verzeichnis (報免), Zeugnis<sup>(9)</sup> (證據)

(1) —(9) s. § 27, II, B. (2)

§ 42. 複數にて e に終り且つ Umlaut を附するもの、

第四式範例 Musterbeispiele.

	Eq.	Pl.		Eq.	Pl.
N.	der Arzt	<b>die Ärzte</b>	die	Kunst	<b>die Künfte</b>
G.	des Arztes	der Ärzte	der		der Künfte
D.	dem Arzte	den Ärzten	der		den Künften
A.	den Arzt	die Ärzte	die		die Künfte

1) この式にては單數一格に e の語尾と Umlaut を附して複數を作る、

問題: 次の名詞を變化せよ、

Der Papst (法王), der Kardinal (最高僧[天主教の])(下の 3 を見よ); der Bischof (僧正)(下の 3 を見よ); der Fuchs (狐); der Hahn (雄鶏); der Auerhahn (野鶏); der Bock (牡鹿); der Ziegenbock (牡山羊); der Block (石塊); der Marmorblock (大理石塊); der Klotz (木株); der Stamm (幹); der Kopf (頭), der Dummkopf (馬鹿); der Krug (壺); der Tonkrug (土瓶); der Zahn (齒); der Backzahn (奥齒); der Saal (廣間); der Tanzsaal (舞踏室);

注意 Kardinal は天主教會の最高僧にして其の數七十ありその内より法王を選出す、

der Strom (大河); der Bach (小河); — die Magd (下女); die Braut (花嫁); die Haut (皮膚); die Hand (手); die Wand (壁); die Axt (斧); die Faust (拳); die Maus (鼠), die Gans (鵞), der Hals (首)[これ等の語の s に就きては § 41, 2 を見よ]; der Fuß (足), der Gruß (挨拶); der Spaß (笑談)[ß に就ては § 41, 3. a を見よ]; der Bass (低音); der Pfad (隘路); die Nuß (堅果)[ß に就きては § 41, 3. b. を見よ]; das Rohr (筒), das Schilfrohr (葦), das Flintenrohr (銃身), das Fernrohr (望遠鏡), das Sprachrohr (傳話筒); der (das) Chor (合奏); Musikchor (合奏), Gesangchor (合誦), Männerchor (男子合誦), Frauenchor (婦人合誦), Kirchenchor (會堂合誦); das (der) Floss (符).

2) 此の式に屬するものは多数の男性名詞、若干の女性名詞及び、上の問題の末尾に掲げたる三個の中性名詞と其の Komposita (§ 9, 1; § 29)のみである、Chor と Floss とは上に記した通り男性でもよい、das Rohr が植物即ち葦の意味に用ゐらるゝ時は其の複数は die Röhreの方がよい、併し Flintenrohr (銃身), Kanonenrohr (砲身), Hörrohr (聽筒), Sprachrohr (傳話筒)等の複数は — röhre

と — röhre と兩方用ゐられて居る、—— 女性なる die Röhre (筒)の複数は必ず die Röhren とすべし。

3) 此の式に屬する男性名詞の中には次の様な外來語 Fremdwörter がある: der **Bischof** (僧正), 複數: die **Bischöfe**. — der **Admiral** (海軍大將), der **General** (陸軍大將), der **Kardinal** (高僧), 複數: **Admirale, Generale, Kardinale**; (Admiräle, Generäle, Kardinäle と Umlaut を附した形もあるが Umlaut のない形の方がよい) — das **Pokal** (杯), 複數: die **Pokale**; — das **Skandal**, (騷擾), 複數: die **Skandale**. — der **Plan** (計畫), 複數: die **Pläne**.

§ 43. に複數於て —er に終り、Umlaut を附すものと附せぬものとある、

#### 第五式範例 Musterbeispiele.

Sp.	(a)	Pl.
N. der Mann		die <b>Männer</b>
G. des Mannes		der Männer
D. dem Manne		den Männern
N. den Mann		die Männer
	(b)	
N. der Geist		die <b>Geister</b>
G. des Geistes		der Geister
D. dem Geiste		den Geistern
N. den Geist		die Geister



1) 此の式にては複数は語尾に **er** を附す、而して幹母音が **a o u au** の何れかなれば其れには必ず Umlaut が附せられる (a) の如し、

2) この變化に屬するものは若干の男性名詞と多数の中性名詞で女性名詞は一つもない而してこれに屬する中性名詞は **-tum** に終るもの、前綴 **ge-** を有するもの及び外來語を除くの外は概ね單綴音語である、

3) **-tum** の語尾を有する語は **der Reichtum** と **der Irrtum** 等の若干の男性名詞を除く外は中性名詞と覺へて差支なし、

**問題** 範例に倣ひ次の名詞を變化せよ(先づ最初單數二格と複数一格とを作り而して後全部を)、其の際 Umlaut を附せらるゝものと然らざるものとを次表の如くに區別して見よ

(a.)	(b.)
Gott	Geist
Mann usw.	Leib usw.

**Der** Gott (神), **der** Mann (男), **der** Geist (精神), **der** Qualgeist (人を苦惱せしむる人), **der** Leib (人體), **der** Wurm (蛆蟲), **der** Wald (森林), **der** Tannenwald (樅林);

**der** Rand (端); **der** Ort (場所); **der** Böfewicht (悪人), **der** Erzböfewicht (大悪人); **der** Vormund (後見人), **der** Reichtum (富貴), **der** Irrtum (迷誤); — **das** Weib (妻女); **das** Kind (小兒); **das** Gespenst (幽霊); **das** Ei (玉子), **das** Hühnerei (鶏卵); **das** Kleid (衣服); **das** Alltagskleid (平常服); **das** Bild (畫); **das** Ebenbild (肖像); **das** Feld (原野); **das** Schwert (劍); **das** Nest (巢); **das** Glied (關節); **das** Mitglied (同僚); **das** Lied (歌); **das** Lamm (小羊), **das** Altertum (古代), **das** Kaisertum (帝國), **das** Blatt (葉), **das** Gesicht (顔), **das** Glas (硝子), **das** Gras (草), **das** Geschlecht (性), **das** Geld (貨幣), **das** Volk (人民); **das** Fach (専門), **das** Kalb (犢), **das** Huhn (雌鶏); **das** Dach (屋根); **das** Gemach (室); **das** Gewand (衣服); **das** Land (陸地), **das** Horn (角); **das** Korn (粒); **das** Loch (穴); **das** Dorf (村), **das** Fischerdorf (漁村), **das** Buch (書物); **das** Tuch (布織物); **das** Schmutztuch (拭巾); **das** Gut (財産, 地所), **das** Haupt (頭); **das** Familienhaupt (家長); **das** Kraut (野菜), **das** Regiment\* (聯隊); **das** Hospital\* (病院); **das** Kamisol\* (胴衣); **das** Wams (短袍); **das** Mas (腐肉)(語尾の **s** に就きては § 41,

2 を見よ); das Faß (桶), das Weinfäß (葡萄酒樽); das Schloß (城); (語尾の ß に就ては § 41, 3, b を見よ)

注意一 \* Regiment, Hospital, Kamisol 等に就きては § 49 註を見よ、

注意二 次の語の複数形は其の意義の差に依つて —er となり或は —e となる:

Wort, Land, Holz, Horn, Tuch, Band. **Worte** (語と語との間に連絡の存する場合、殆んど Satz「文章」と等し)、**Wörter** (互ひに連絡なき個々の言葉の部分、「辭書」を Wörterbuch と云ふのにも分かる) 文例: Ich habe Ihnen einige Worte (殆んど Sätze と同意味) aufgesetzt, die Sie ins Japanische übersetzen sollen; die Ihnen dabei fehlenden Wörter können Sie im Wörterbuch nachschlagen. 「私は君に日本語に翻譯すべき二三の文章を課した、其の際君に解らない語は辭書で調べて宜らしい」— **Land** (政治的境界に關せずして唯だ地域といふ時)、**Länder** (領域) 文例: Japan umfaßt verschiedene Länder. 「日本は相異なる領土を有す」、In allen deutschen Lande (殆んど in ganz Deutschland と同意味) 「全獨逸國に於て」— **Hörner, Holze, Tuche** (物質名詞として用ひらる)、**Hörner, Hölzer**, (種屬名詞として用ひらる) 文例: Der Drechsler verarbeitet verschiedene Holze und Hörner. 「櫛輪工は各種の木材と角とを工作す」、Das Fensterkreuz besteht aus zwei Hölzern 「窓の十文字は二本の樺より成る」; Der Kaufmann legte mir zur Auswahl für meinen Rock verschiedene Tuche vor und fragte mich, ob ich nicht auch seidene Hals- und Taschentücher kaufen wollte. 「商人は私の上衣を作るのに、選ひ給へるとして各種の布を私の前に列べて、私が又、絹の襟巻とハンケチとを買ひたく無いかと尋ねた」、— **Wande** (= Fesseln 鎖), **Wänder** (結ぶ物). 文例: die heiligen Wande der Natur 「聖なる自然の鎖」=「血縁」、Seidene Wänder zum Damenputz 「婦人の飾に用ふる絹のリボン」。

此等と同じく Gastmahl (饗宴), Denkmal (紀念碑), Grabmal (墓標), Geschlecht (性), Gewand (衣裳), Tal (谷) は Gastmähler, Denkmäler, Grabmäler, Geschlechter, Gewänder, Täler が普通に用ゐらるるが、少しく高雅な文章では Gastmahle, Denkmale, Grabmale 等として用ふることがあ

る。— Ding (物)の複数にも Dinge と Dinger とがある、Dinge は普通の形であつて、Dinger は多くは、人が其の名を知らなかつたり、其の名を言ふことの欲しない具體物のことを表はす、— das Gehalt (容量、給料)の複数 は Gehälter の方が良い、(Gehalte といふことは殆んどない)、

Mann (人、男) が他の語と結合して其の人の地位を表はす時に其の複数には Leute を用ゆる、例: Geschäftsleute (商人)。

#### § 44. 複数にて =s に終るもの、

##### 第六式範例 Musterbeispiel.

Eg.	Pl.
N. das Sofa	die Sofas
G. des Sofas	der Sofas
D. dem Sofa	den Sofas
A. das Sofa	die Sofas

1) 強變化の複数第三格には n を附するのが規則であるが此の第六式即ち複数にて總ての格を通じて s を附するもののみは例外で n を附せぬ、[§ 38, 2]

2) 純粹の獨逸名詞で複数に s の語尾を附するものは極めて僅少である、俗語に於ては往々 die Mädchen, die Fräuleins, die Kerls, die Jungen, die Bräutigams と云ふ様な複数形を作ることがある併し正確に言へば矢張り; die Mädchen, die Fräulein, die Kerle, die Jungen, die Bräutigame とせねばならぬ、こ

れに反して外國語(殊に近世語)より來たる名詞には複數で **s** を附するのが規則となつてゐるものがある、

例せば單數 *der Kolibri* (蜂雀), *der Kakadu* (鸚鵡の一種), *der Mufti* (アラビヤの大僧), *das Sofa* (眠椅子), *der Divan* (眠椅子), *das Motto* (箴言), *der Albino* (白色に近き黒奴) *der Kaiserlat* (同上), *der Kaiman* (亞米利加の鱷); *der Lord* (英國貴族の稱號) *der Chef* (長主)[schäff と發音す § 50. 9]の複數は *die Kolibris*, *die Kakadus*, *die Muftis*, *die Sofas*, *die Divans*, *die Mottos*, *die Albinos*, *die Kaiserlats*, *die Kaimans*, *die Lords*, *die Chefs* usw.

獨逸語では名詞でない他の何れの語でも名詞にすることが獨出來るといふことは既に述べた通りである、而してこれ等の名詞化したる語の複數形も往々 **s** を附して作ることがある、例せば *das Ach* und *O* (嗚呼とオー)の複數は *die Ach* und *O* 或は *die Achs* und *Os*.—*Die Aber* 或は *die Abers*; *die Wenn* 或は *die Wens*; *die Ja* 或は *die Jas*; *die Nein* 或は *die Neins*; *die Ubec* 或は *die Ubecs* の如きである (§ 23. を見よ)

#### § 45. 混合變化 Gemischte Declination.

1) 讀んで字の如く強變化と弱變化とが混合して (gemischt) 出來た變化である即ち單數にては強變化の、複數にて弱變化の語尾を附するのである、

2) 此の變化には中性名詞と男性名詞とのみが屬して居る、**中性名詞**は: *Auge* (眼), *Bett* (床), *Ende* (終), *Gemde* (襖), *Ohr* (耳), *Weh* (苦痛), *Leid* (憂愁)及び若干の外來語 *Insekt* (昆蟲), *Statut* (成文律)等. **男性名詞**は: *Dorn* (荊), *Forst* (山林), *Gevatter* (洗禮立合ひ人), *Lorbeer* (月桂), *Maft* (檣), *Muskel* (筋肉), *Nerv* (神經), *Pantoffel* (上靴), *Pfau* (孔雀), *Schmerz* (痛), *See* (湖), *Staat* (國家), *Stachel* (刺), *Stiefel* (長靴), *Strahl* (光線), *Untertan* (臣), [§ 37 注 8] *Better* (從弟), [同上]

a) 次の語は其の複數を二様に作る、括弧内にあるは稀に用ゐる方である *der*, *die Forst*; pl. *die Forsten*, *Forste* (山林),—*der Maft*; pl.: *die Masten* (*die Maste*) (檣);—*der Salm*, pl. *Salmen* (Salme) (莖);—*der Gau*; pl.: *Gauen* (Gauc) (田舎).—*das Kleinod*; pl. *Kleinode* oder *Kleinodien* (寶物)(之れは語尾が *ien* となり不規則である § 50, 3 を見よ).

b) 次の語では其の複數の形に依り意味が違ふ

*der Bau*; pl.: *die Baue*, (建築工事) *die Bauten* (建物, 家屋),—*der Dorn*; pl. *die Dorne*, *Dornen* (§ 37. 注意 8.), *Dörner* (同上)—*Der Mond*; pl. *Monde* (同上), *Monden* (同上);—*der Sporn*; pl. *Sporne*, *ren* (激勵) *Sporen* (柏車).

c) *Herz* は單數に於て不規則の變化をなす: *das Herz*, *des Herzens*, *dem Herzen*, *das Herz*; pl. *die*, *der*, *den*, *die Herzen*.

der Nachbar (隣人)[同上], Bierat (裝飾物), Zins (利子), Konful (羅馬大憲), Tribun (羅馬保民官)この外、語勢なき =or を語尾に有する外來語(複数は ...oren, o は長く強く發音す § 50, 2. 自修書後編六頁の脚注を見よ)

之れに反し語勢のある or の語尾を有するものは強變化第三式に屬す例へば Elektrophor' (電源), der Humör' (諧謔), der Korridor' (廊下), der Matador' (牡牛殺), der Kantor' (歌人), der Meteor' (氣象)等.

語勢なき =or に終る語の變化の例

Eg.		Pl.
der Dok'tor	die	} Dok'toren
des Dok'tors	der	
dem Dok'tor	den	
den Dok'tor	die	

§ 46. Synkope und Apokope des e. (單數第二、第三格に於ける =es, =e) に就いて、

1) 一語中の母音の省かるることを Synkope と云ひ一語の末尾の母音の省かるるを Apokope と稱ふ(其の動詞は synkopieren, apokopieren).

2) 強變化に屬する名詞にして Nom. Sing. が語勢なき =e のみか (例 der Käse) 若しくは語勢のなき =el, =em, =en, =er のあるもの及び =chen, =lein に終る中性名詞は (例. der Himmel, der Wagen, der Becker; das Häuschen, das Kindlein) 第二格に於て語尾に =es でなく =s のみを附す、尙ほ語勢なき母音 +l, m, n, r に終る外來語も此の規則に準ず(例. der Konful, das Publikum, das Kolon, der Doktor [混合變化を見よ]). 一如斯單數第二格にて語尾に e を省き s のみを附するものは第三格に於ても e を附することは決してない即ち第一格と同形である次の變化の例を見よ

Sing.	Sing.	Sing.	Sing.
der Himmel	der Wagen	das Kindlein	der Konful
des Himmels	des Wagens	des Kindleins	des Konfuls
dem Himmel	dem Wagen	dem Kindlein	dem Konful
den Himmel	den Wagen	das Kindlein	den Konful
Plur.	Plur.	Plur.	Plur.
die Himmel	die	die	die
der Himmel	der	der	der
den Himmeln	den	den	den
die Himmel	die	die	die

} Wagen } Kindlein } Konfuln

即ち二格では des Himmeles, Wagens, Kindleines, Konsules, 三格で dem Himmele, Wagene, Kindleine, Konsule とは決して言ふてはならぬ、これ等は少しく讀書し初めた者には自から口調で分る、

3) 獨逸語で =em に終る語は der Atem (呼吸)、der Odem (呼吸)、der Brodem (蒸發氣)とがあるのみである、また強變化に屬する名詞にして =e に終るものは der Käse (乾酪) [§ 37. 4 註三]のみである、

問題 1. 次の語の單數二格と三格とを作れ

der Käse (乾酪); das Ende (終結); das Gemälde (繪畫); der Stiefel (長靴); das Rätsel (謎); der Atem (呼吸); der Magen (胃); das Leben (生命); das Mädchen (處女); das Häuslein (小さき家); der Fischer (漁夫); das Wasser (水); der Konsul (羅馬保民官); der Lauten (樂器の名).

das Publikum (公衆); das Kollegium (大學講義、教授總體); der Koran (回々教經典); der Dämon (惡魔)[§ 50, 2]; der Doktor (§ 45, 2. § 50, 2).

4) 上に述べた場合の外は獨逸名詞にして強變化に屬

るもの、單數第二格は es と知るべし、併し es の e は省くことも出来る es の直接前に在る綴音が高調音(少くとも低調音)を有せぬ場合は es の e は寧ろ省略するのが普通となつて居る例: der Baum, des Baumes 或は Baums; der Apfelbaum, des Apfelbaumes od. Apfelbaums; das Altertum では高調音は Alt に低調音は tum にあるのであるが此の二格は Altertumes と云ふよりは Altertums と云ふ方がよい; der Bräutigam も其の二格は des Bräutigams の方が確かに口調が良い Bräutigames と言はれ耳障りになる、—— des Abends, Königs, Herrings, Dichters, Enters, Monats, Schicksals が普通で des Abendes, Königes Herringes 等の形は用ゐること極めて稀れである、

5) 單數一格が =s, =ß, =z, =sch 及び =it に終つて居る名詞では e を省くことは發音上出来ぬ、故に Hals, Gras, Fluß, Fuß, Salz, Meiz, Wit, Stieglitz の二格は des Halses, Grases, Flusses, Fußes, Salzes, Meizes, Wites, Stieglitzes である若し之れを Halsis, Grasis, Salzs 等としたらば二格の語尾は之れを耳に聞き分けることが出来ぬ、

6) *ch* が語の末尾にある時は *ts*, *x* と同音であることは既に § 6 の 3) 注意及び自修書前編 § 38 で示して置いた(例. *der Dachs* タ'グズ狸, *der Fuchs* フ'グズ狐)併し此の *s* は語尾として *ch* で終る語に附けたのではなく元來 *ch* で終て居る語である、然るに *ch* で終る語に *s* 若しくは *es* の文法上の語尾または *s* で初まる他の語が附せられた場合には決して *ts=x* の音にはならぬ矢張り *ch* 固有の音を保持して居る(自修前編 § 38. 17 頁): *des Dachs* (タ'ハス), *des Daches* (タ'ヘズ); *des Buchs* (ブ'chズ), *des Buches* (ブ'ヘズ); *der Geruch*, *des Geruchs*, (ゲ'ル'chズ), *des Geruches*, (ゲ'ル'ヘズ). 次の語の末尾の *=es* 若しくは *s* は語尾であるから其心して正しく發音すべし *des Stichs*, *Mauchs*, *Reichs*, *Wolchs*, *Mönchs*, *Drillichs*, *Zwillichs*, *Gänserichs*; *Friedrichs*, *Heinrichs* usw. (語の末尾にある *ch* の發音に就いては自修書前、§ 38, 17. 頁を見よ)

7) 語勢のある母音で終る名詞に於ても *=es* の *e* を省くことが出来る例へば *das Ei* (卵)の二格は *des Eies* 或は *des Eis* (後者は *das Eis* [氷]と同音となる)、次の語に於ても括弧中の (e) は之を省くも省かざるも同

じことである: *Das Tau*, *des Tau(e)s*; *der Klee*, *des Klee(e)s*; *der Schnee*, *des Schnee(e)s*; *der Tee*, *des Tee(e)s*; *das Knie*, *des Knie(e)s*.

茲に注意すべきは *Knie* (クニ'ー)は單綴なれど *Kniee* とすれば二綴音になるから従つて讀方も クニ'ーエである、*die Seen* (ゼ'ー'ン)は單綴で *Seen* (ゼ'ー'エン)は二綴、次の語にありても同様である: *die Feen* (フェ'ー'ン)と *Feen* (フェ'ー'エン), *Alleen* (アル'ジ'ー'ン)と *Alleen* (アル'ジ'ー'エン), *Armeen* (アル'メ'ー'ン)と *Armeen* (アル'メ'ー'エン)等、之等は單綴音でも二綴音でも同じ事であるが唯其の發音と書き方の相違せぬ様注意せねばならぬ(例せばフェ'ー'エンと發音し *Feen* と書き或はアル'メ'ー'ンと發音し *Armeen* と書くが如し)。

8) 以上總ての場合に於て其の第三格の *e* は省くことが出来る即ち *dem Baume* od. *Baum*, *dem Salze* od. *Salz*; *dem Grafe* od. *Gras*; *dem Flusse* od. *Fluss*; *dem Fuße*(e), *Salz*(e), *Reiz*(e), *Witz*(e), 括弧内の *e* は省くも省かざるも異なる處なし、*dem Bräutigame* (新郎), *Abende* (晩), *Stieglitz*: (うそ鳥)よりも *dem Bräutigam*, *Abend*, *Stieglitz* と云ふ方が口調よし

## 問題 2. 定冠詞と共に次の語の二格と三格とを作れ:

König(m) 王, Kaiser(m) 帝, Pflaster(n) 硬膏, Gemälde(n) 繪畫, Gebüsch(n.) 叢林, Gehölz(n.) 森, Busch(m.) 藪, Holz(n) 材木, Stolz(m.) 高慢, Hals(m.) 頸, Schnalz(n) 鼓舌, Gewächs(n) 植物, Tisch(m.) 机, Fleisch(n.) 肉, Blitz(m.) 電光, Gast(m) 客, Rad(n.) 輪, Rat(m) 策, Fuchs(m.) 狐, Spruch(m.) 箴言, Fluch(m.) 呪詛, Tuch(n) 布, Bach(m) 小川, Dach(n) 屋根, Fach(n) 専門, Gemach(n) 室, Loch(n) 穴, Koch(m) 料理人, Soch(n) 軛, Zwillich(m) 綾織物, Fähnrich(m) 旗手, Mönch(m) 僧, Dolch(m) 短劍, Reich(n) 國, Streich(m) 打撃, Bauch(m) 腹.

## 問題 3. 次の語を變化せよ

der Tau (綱), das Tau (露), das Ei (玉子), der See (湖水), die Fee (妖精), die Idee (考), die Moschee (回々教の寺), die Chaussee (舗石路), das Reh (鹿), das Knie (膝), die Melodie (音律), die Harmonie (調和); 次の語の單數のみを變化せよ (複數はなき故): der Blei (鉛), der Klee (三葉草), der Schnee (雪), der Tee (茶), das Vieh (家畜),

## § 47. 外來語變化 Declination der Fremdwörter.

1) 時代の推移と共に獨逸語領に侵入し來たり遂に獨逸化し了りたる外國語の數は決して少くない其れ等は全く獨逸に同化して今は殆んど外國語とは思へぬ程である否其の内のあるものは只だ歴史に徴し其の語源に溯り初めて外來語たることを發見し得る位である如斯き語は外來語には相違なきも極めて廣義の外來語 Fremdwörter im weiteren Sinne にして通常外國語の内には算入しない例せば Abenteuer (aventure) Brief (breve), Kaninchen (cuniculus), Pflanze (plante), Tisch (discus), Körper (corpus) 等に至つては斯道に精通せる學者は兎に角普通一般の獨逸人は決して外國語とは思惟して居らぬ、

吾人の所謂外來語 Fremdwörter 即ち狹義の外來語 Fremdwörter im engeren Sinne てふものは未だ全く獨逸に同化せず言はゞ多少生國の風俗を保持して居るものを云ふ、其れは獨逸固有の語と語勢を異にして居る、而して語勢は主として語尾若しくは最後の綴音にあるを常とす(獨逸固有の語の語勢は幹綴にあることは自修書前編及び本書の語勢の部に明示したり)例 Litteratur Grammatik, Ballade, Romanze, Telegraph, Astronom.

**注意** 外來語には羅匈、希臘語から來たものが大多數を占め佛語より來たりたるもの其の次に位し若干の英語より來たりたるものとあるが此れ以外の國語より轉化したる語は極めて僅少である。此の如き事情であるから趣味を以て獨逸文法を研究せんとする人々には羅匈語と希臘語とは缺く可からざる要諦である(拙著羅匈文法階梯と近日上梓せんとする初等ギリシヤ文法を一讀せんことを薦む)

§ 48. 弱變化に従ふ外來語は、

1) =p, =t, =g, =ñ, =f, =e, に終り人格を表はす男性名詞の大部分、例: (語勢の付け方は自修書に用ひたるものに據る即ち語勢を有する綴音の右肩に(')の記標を附す) Der Satrap' (波斯國の大守), der Legat' (羅馬法王の使節), der Prophet' (預言者), der Despot' (獨裁君主), der Chirurg' (外科醫), der Rhinoplast' (造鼻者), der Gymnasiast' (高等學校生徒), der Advokat' (辯護士), der Kandidat' (候補者), der Litterat' (文士), der Soldat' (兵士), der Adjutant' (副官), der Dilettant' (好學者), der Musikant' (音樂者), Abiturient' (専門學校卒業生), der Dozent' (大學講師), der Präsident' (大統領), der Poët' (詩人), der Patriöt' (愛國者), der Komödiant' (喜劇家), der Agent' (代理人), der Architekt' (建築師), der Phantast' (妄想者), der Starost' (地方長官), der Belletrist' (美文學者), der Jurist' (法學者), der Kasuist' (解疑者), der Linguist'

(語學者), der Pietist' (偽信者), der Katholik' (天主教徒), der Bosniak' (ボスニア人), der Novi'ze (新信者, 見習僧或は尼), der Ele've (弟子), der Antipo'de (敵) usw.

2) =arch, =graph, =krat, =log, =nom, =phag, =gog, =man, =phil, =phob 及び soph なる希臘的の後綴を有するもの、例: der Patriarch' (族長), der Monarch' (國君), der Geograph' (地理學者), der Lithograph' (石版), Biograph' (傳記作者), der Aristokrat' (貴族), Autokrat' (專制君主), der Demokrat' (共和黨員), der Philolog' (博言學者, 言語學者), der Pädagog' (教育學者), der Demagog' (人民煽動者), der Astronom' (天文學者), der Ökonom' (經濟學者), der Angloman' (極端なる英國崇拜者), der Grätophil' (希臘最良の人), der Gallophob' (佛國嫌ひの人), der Pantophag' (大食家), der Philosoph' (哲學者), Pantosoph' (全知を衒ふ人), der Polyp' (水螅), der Elefant' (象), der Konsonant' (子音), der Diamant' (ダイヤモンド), der Brillant' (平面金剛石), der Summand' (總計すべき數), der Addend' (加べき數), der Minuend' (減すべき數), der Komet' (彗星), der Planet' (遊星) der Telegraph' (電信), der Student' (學生)。—以上の語は弱變化



をなすのであるから *=e* に終るものを除く他の語では単数二格以下の總ての格に *en* を附して變化す

注意 次の語は例外にして強變化第三式に屬す(其處を見よ), *der Abt*, *der Papst*, *der Propst*, *der Vogt*, *der Bischof*.

3) *=e*, *=el*, *=er*, *=ie*, *=on*, *=ion*, *=enz*, *=iz*, *=if*, *=ur*, *=tät* に終る女性名詞全體(女性名詞は外國語でも單數に於ては變化せぬ):

*Kousi'ne* (従姉妹), *Zister'ne* (水溜), *Re'gel* (規則), *Para'bel* (比喩譚), *Fa'bel* (譚), *O'per* (歌劇), *Mythologie'* (神話), *Phy'iologie'* (生理學), *Pharmakologie'* (藥物學), *Anthropologie'* (人類學), *Person'* (人格)(人稱), *Religion'* (宗教), *Nation'* (國民), *Korrespondenz'* (通信), *Exzellenz'* (閣下), *Notiz'* (注意), *Gramma'tik* (文法), *Republik'* (共和政府), *Zensur'* (檢閲、試験の點數), *Majestät'* (陛下), *Autorität'* (オーソリテ<sup>イ</sup>ー), (大家) usw.

§ 49. 強變化に屬し第一式に従ふ外來語は語勢のなき *=el*, *=er*, *=en* に終る總ての男性中性名詞、例: *das Exem'pl* (例) *der Apost'el* (使徒), *das Dra'kel* (神託), *der Phy'siker* (物理學者), *der Mu'siker* (音學家), *der Mathe'matiker* (數學家), *der Dezem'ber* (十二月)等.

第三式に従ふものは *=l*, *=n*, *=r* に終り後綴に語勢を有する男性名詞及び中性名詞の大部分、例: *der Admiral'* (海軍大將), *der General'* (陸軍大將), *der Patron'* (保護者), *der Kapitän'* (海軍大尉), *der Major'* (大佐), *der Sekretär'* (書記), *der Offizier'* (士官), *der Friseur'* (理髮師), *der Pelikan'* (塘鶉), *der Termin'* (期節), *Skorpion'* (蠍), *der Pur'pur* (紫紅色), *der Salat'* (生菜類, サラダ), *der Granit'* (花崗石), *der Horizont'* (水平線), *der Sarkophag'* (石棺), *der Al'mosen* (施物), *das Metall'* (金屬), *das Diadem'* (冠冕), *das Magazin'* (雜誌), *das Konjulat'* (領事館), *das Dekret'* (決議書), *das Motiv'* (動機), *das Hospiz'* (旅宿用寺院), *das Element'* (元素).

注意一 此の變化に屬する名詞の中あるものは後綴に Umlaut を冠す: *der Altar*, *die Altäre* (神壇); *der Chor*, *die Chöre* (合唱); *der Choral*, *die Choräle* (讚美歌); *der Kanal*, *die Kanäle* (水道); *der Palast*, *die Paläste* (宮殿); *der Kaplan*, *die Kapläne* (軍需僧); *der Propst*, *die Propste* (管理者); *der Abt*, *die Äbte* (住持); *der Bischof*, *die Bischöfe* (僧正) (§ 42 の 3); *der Kardinal*, *die Kardinäle* (大僧正)同上; *der Papst*, *die Päpste* (羅馬法王); *der General*, *die Generale* (陸軍大將); *der Admiral*, *die Admiräle* (42 の 3) *der Vogt*, *die Vögte* (城代).

注意二 *=s* に終り其の後綴母音の短かき名詞例せば *der Bramarbas* (大言家), *der Messias* (救世主), *der Kürbis* (葫蘆の類), *der Zibibus* (吸煙用紙、紙燃コヨリ)の如きは格を示す語尾の附せらるゝ場合其の *s* を *ff* に變ず (§ 41, 4 を見よ)。

注意三 das Hospital' (病院), das Kamisol' (短衣), das Regiment' (聯隊) の複数に第五式に従ひ語尾に *-er* を附す (43 を見よ): die **Hospitäler, Kamisöler, Regimente**.

注意四 der Insekt' (昆蟲), das Interesse' (趣味, 利害), das Juwel' (寶玉) das Statut' (規則)は複数に於ては弱變化に従ふ (§ 37 を見よ): die **Insekten, Interessen, Juwelen, Statuten**.

### § 50. 混合變化に従ふ外來語は

1) 獨逸語化し了りたる der Staat (國家), der Thron<sup>(1)</sup> (玉座), der Zins (利子), der Nerv (神經), der Psalm (詩編), der Magnet (磁石), der Kapaun (閩鷄), der Rubin (紅寶石)及び der Tribun (古羅馬保民官).

2) 低音の語尾 *or, on* を有する男性名詞 (§ 37, 4. § 45, 2. 自修書後編六頁の脚注を見よ): der **Assessor** (判事補), der **Kantor** (唱歌者), der **Konditor** (糖菓製造又は販買人), der **Doktor** (博士, 醫師), der **Inspektor** (監督), der **Pastor** (牧師), der **Professor** (教授), der **Rektor** (學長), der **Direktor** (校長), der **Imperator** (古羅馬の

(1) 獨逸固有の語 *thronos* はそれと見做すものでは現今 *th* で書くもの一つもない、希臘語より侵入して同語で *θ* を用ゐてゐるのは獨逸でも *th* と書く *θρόνος* の如く (*Thronos* と讀む)即ち希臘の *θ* は獨逸の *th* に當る。

帝), der **Dämon** (妖精), der **Agathodämon<sup>(2)</sup>** (善妖精), **Kakodämon<sup>(3)</sup>** (惡妖精)等.

der Dämon	die	} Dämonen
des Dämons	der	
dem Dämon	den	
den Dämon	die	

*-or* に終る語の變化は § 45, 2 der **Doktor** の範例に倣ひて作る、

3) *-um, (=ium, -eum, -äum, -uum)* *-e, -al, -el; -ma, -mus, -us* に終るもの、

以上の内 *um (ium, eum, äum, uum)* に終るものは羅匈より來た語にて(希臘の *ov* に當る)悉く中性である、而して其の複数の語尾は羅匈では *a* であるが獨逸では其の代りに *en* を附す、

das Gymnäsium	die	} Gymnäsien
des Gymnäsiums	der	
dem Gymnäsium	den	
das Gymnäsium	die	

(2) **Agathodaimon** は希臘の *ἀγαθος* (*gut*) と *δαίμων* (妖精), **Kakodaimon** は *κακος* (*schlecht*) と *δαίμων* とで出來た語なり希臘の *αι* は獨逸の *ä* に當る。

das Jubiläum	die	} Jubiläen
des Jubiläums	der	
dem Jubiläum	den	
das Jubiläum	die	

## 問題 次の名詞を變化せよ

Verbum\* (動詞), Adverbium\* (副詞), Amphibium (希 Amphibion)[水陸兩棲動物], Auditorium (聴衆, 満堂), Delirium (精神錯亂), Capitolium (古羅馬の大廟, 議會), Medium (方法, 手段), Colloquium (對談, 口頭試験), Evangelium (福音書), Ministerium (官省), Privilegium (特權), Konservatorium (高等音楽學校), Seminarium\* (師範學校), Studium (研究), Partizipium\* (分詞), Prinzipium\* (主義)(以上の複数は: Adverbien, Verben, Amphibien 等.)——Museum (博物館), Lycäum (高等専門學校), Orphäum (音楽堂, 娯樂館), Kolosseum (古羅馬の

\*-ien に終る名詞の單数は ium であるが此の ium を省くことも出来る其の場合には複數 ien の形も變はる、例せば Adverbium は Adverb となる、複數は Adverbia, Adverbien, Adverbe; Seminarium は Seminar となる複數は Semina-rien 或は Semina-re; Partizipium は Partizip となる複數は Partizipia, Partizipien, Partizipe; [das Kleinod の複數は Kleinode, Kleinodien であるが單數を Kleinodium とはしない],

大劇場)等之れ等の複數は: Museen, Lycäen 等——Jubiläum (祝祭)(上表を見よ), Propyläum (古雅典城の柱廊下)の複數は Jubiläen, Propyläen.——Individuum (個人), Bivuum (二日間の期日), Trivuum (三日間の期日), Quatrivuum (四日間の期日)等の複數は: Subvidien, Bivien, Trivien 等なり、Kapital', Kapitalien (資本), (複數を Kapitaler と作る時は柱頭の意味なり); Mineral', Mineralien (鑛物), Material', Materialien (材料, 物質) 女性名詞 Familië (家族), Prämie (賞典), Fölie (金屬の箔), Stüdie (修學), Lië (百合)等の複數は: die Familiën, Prämiën, Föliën, Stüdiën, Liëliën.

4) =ma, =mus に終る語は概して希臘から來たものか若しくは語尾のみを希臘的に形作つたものである、=mus に終るものは男性と覺へて差支ない而して之れ等は單數に於て變化せず複數は =men となる der Syllogismus, die Syllogismen (三段論法), der Paralogismus, die Paralogismen (似而非推論); das Sophisma, die Sophismen (似而非推論).

茲に注意すべきは =mus に終る語は其の mus の前に概して *s* がある事である(勿論 Katharmus (洗淨), der Psalmus (詩篇)[通常省略して Psal(m)]の如き極めて少数の例外はある)即ち: =asmus, =esmus, =ysmus, 殊に多いのが =ismus である、

5) 併し =ma に終る中性名詞でも其の ma の前に *s* の存するのではないではない、例せば前に引用しておいた Sophis'ma の如き其の例である尙ほ此の外に Chris'ma (聖油), Hypochrisma (偽聖油), Pris'ma (三稜角, 三稜玻璃), Phantasma (幻像).

6) 上 4) に於て言へる =asmus, =esmus, =ysmus に終る例を挙げれば Enthusias'mus (熱心), Sarkas'mus (嘲侮); Syndes'mus (關節韌帶), Paroxys'mus (病的發作)等であるが =ismus に終る語の例は夥しくある(之れ等は希臘語から許りでなく羅句語及び其の他有らゆる羅句語系統の國語から來てをる): Hellenis'mus (希臘的發表方), Anglizis'mus (英語的臭氣ある發表方); Gallizis'mus (佛語臭のある發表方), Germanis'mus (獨逸臭き發表方), Stoizis'mus (ストイック主義), Dogmatis'mus (教理主義), Kritizis'mus (批評); Thëis'mus (自然神教), Monothëis'mus (獨神教);

Polythëis'mus (多神教); Panthëis'mus (萬神教), Athëis'mus (無神教); Katholizis'mus (加特利教), Protestantis'mus (新教), Organis'mus (有機體), Patriotis'mus (愛國心), Rheumatis'mus (僕麻質斯) usw. — 之れ等の複數は上に述べて置いた通り =men である、

7) =us の語尾は羅句的であるが其の儘獨逸語になつたものがある之れ等は單複兩數に於て變化しない方が多い、併し文法の術語などでは單數二格複數一格に原語の語尾を附するのが習慣となつて居る語もある(但し之れは =us に終る語に限らない)例せば der Modus, des Modi; die Modi (動詞の話説法); des Subjaktivi, die Subjaktivi (直接法). — der Kasus の如きは變化しなものが習慣であるから der, des Kasus, die Kasus (格). また =us に終るもので中性のものがある其の時の複數の語尾は *a* である das Tempus, die Tempora (動詞の時稱); das Genus, die Genera (性).

8) =ma に終るものは希臘語であつて其の複數は希臘其の儘なれば =mata であるが他の語尾を附するのが普通である、併し文法の用語などでは上の 7) に言うてある通り原語の語尾を其の儘使ふことが往々ある、

das Komma, die Kommata od. Kommas (コンマ); das Thema, die Themata, Themas od. Themen (題目); das Paradigma, die Paradigmata od. Paradigmen (語の變化の例), das Zeugma, die Zeugmata od. Zeugmas (二個の主格と一個の客語との連結)また元來 =ma に終るものなれど a を省きて用ゐらるる語がある: Das Diplom (卒業證書), Idiom (慣用語), Phantom (幻像), Symptom (徴候)複数は =e.

9) 近世語殊に英佛より來たる名詞にありては s の語尾を附して複數を作る[§ 44, 2]: Sofas, Divans, Mottos, Cheffs (schäffs と發音す), Lords, Klubs 等の如し。

§ 52. 固有名詞の變化 *Declination der Eigennamen*. 獨逸語に於ては固有名詞は冠詞を伴はぬ場合が多い。

1. 冠詞を伴はぬ國名及び地名は第二格に於て =s の語尾を附するのみにして他の格に於ては變化せず、また固有名詞には複數を有するものは尠ない。

例 Nom. Japan Deutschland Tokyo Berlin

注意 羅甸の語尾の附け方に就ては拙著羅甸文法階梯 § 26 を見よ、

Gen.	Japans	Deutschlands	Tokyos	Berlins
Dat.	Japan	Deutschland	Tokyo	Berlin
Acc.	Japan	Deutschland	Tokyo	Berlin

注意一 齒音の s, ſ, ʃ 等で終つてゐる國名及び地名の第二格を表はすには次の如く書き換へる、即ち die Umgebungen von Paris (巴里の四圍)或は die Umgebungen der Stadt Paris (巴里市の四圍); die Lage von Cadix (カティツクスの情況)或は die Lage der Stadt Cadix (カティツクス市の情況); die Bewohner von Schweiz (瑞西の住民)或は die Bewohner des Kantons Schweiz (瑞西州の住民)——夫れと同じく der Kaiser von Russland (露國皇帝), der König von Italien (以太利王)などと云ふ言ひ方もある。

注意二 冠詞を伴ふ國名及び地名、併びに國民の名、川、海、湖、山及び月の名は普通の變化に従ふ、但し Anfang (初), Mitte (中), Ende (終)といふ語の後に來る月の名は變化されぬ、例: Ende Mai (五月の末), Anfang Juni (六月初め), Mitte August (八月中旬)等。

2. 冠詞なき人名は第二格にて =s の語尾を附す例: die Taten Karls des Großen (カール大帝の事業)。

冠詞と結合せる人名は變化せず、例へば die Taten des großen Karl (偉大なるカールの事業)の如し、然れども、第二格(茲では des großen Karl)が第一格(茲では Taten)の前に來る場合には第二格の人名は變化す、例: des großen Karls Taten (偉大なるカールの事業)。

昔、普通に用ゐられた第三格、第四格の語尾 =(e)n (Luthern, Uhlanden) は今では用ゐられぬ、

注意 a) 齒音 (s, ſ, ʃ, r, ʒ) で終つてゐる人名は第二格で =ens の語尾を附す、然かしこれは普通に名(姓に對する)の方に限られて

- あるので、姓では冠詞を伴ふか若しくは Apostroph (') を附す例：  
Hansens, Fröhens, Marens; der Tod des Sokrates, Wolf's Werke.
- b) e で終つて其處に Akzent の無い人名は第二格で =n の語尾を附することも出来るか一般、特に家族名 Familiennamen にあつては =s の語尾を附す例。Mathildens 又は Mathilde's, Goethes (Goethen's).
- c) 名か姓に先立つ時には最後のもの即ち姓のみが第二格の語尾を附す例。die Gedichte Ernst Moritz Arndts (エルンスト、モリツ、アルントの詩)——又、諸侯の姓名の中では唯だ最後のもののみが變化される、例。der Selbentod Gustav Adolfs (グスターヴ、アドルフの勇死).
- b) 位地、階級、姻戚等を表はす Titel (稱號)又は此れと類似の語が冠詞なくして姓名の前に有る時には、姓名のみ變化さる、例：Fürst Bismarck's Briefe (ビスマルク侯の手翰), Doktor Luthers Werke (ドクトル、ルテルの作物), Papst Leo's Bannbulle (法皇レオの破門狀), Onkel Heinrich's Haus (叔父ハインリッヒの家)——之れに反し Titel の前に冠詞のある時には Titel は變化せられ、姓名は變化せられぬものである、例。die Gedichte des Grafen Stollberg (ストルベルグ伯の詩), des Kaisers Wilhelm Kriege (皇帝ヴィルヘルムの戦)——夫れと同じく die Wohnung des Herrn Müller (ミュルラー氏の住居)と云はる; 但し Herr が姓名若しくは Titel の前にある時は Herr も姓名も二つながら變化す: Herrn Müller's Wohnung, die Predigten Herrn Doktor Walthers (ドクトル、ワルター氏の説教).
- e) 稀れに有る固有名詞の複数に語尾 =s, =e, =en を附するか尚ほ其の他の方法で作られる、例: zwei Karls, Heinriche, Marien, die Ottonen.——其の際 =en は普通 =e で終つて其處に Akzent の無い女性の名(姓に對する)に用ゐられ、=s は常に、母音で終る姓名の複数の語尾である、例: Annas, Lassos, Rasparis——聖書の中に出づる姓名殊に Jesus Christus (耶穌基督)は羅句語其の儘の變化を爲すのが殆んど常となつてゐる、Jesus Christus, Jesu Christi, Jesu Christo, Jesum Christum, Jesu Christe; die Bücher Moses (モー

セの書), das Evangelium St. Matthäi (聖馬太の福音書)——紀元後を歴史などでは n. Chr. 紀元前を v. Chr. と書いてあるがこれは nach Christo, vor Christo と讀む、

Jesu Christe は第五格(或は呼格) Vocativ と稱ふのである獨逸語では Vocativ も Nominativ と同形であるから殊更 Vocativ と云ふ格を使はない (o Vater オー 父よ, o mein Kind オー 吾が兒よ).

3. 固有名詞の中には其意味上 複数形のみを有するものがある、

例 Die Dardanellen (ダルダネルズ海峡), die Alpen (アルペン山), die Pyrenäen (ピュレネーエン山)等.

§ 53. 單數名詞 Singularia tantum. (Wörter, die nur im Singular gebräuchlich sind)——或る種類の名詞には單數にのみ用ひられて複数なきものがある、此の如きものを羅句の術語で Singularia tantum といひ、即ち次の如きものである:

I. 物質名詞 既に § 21, b) に述べたるが如く、物質名詞は其の物體の質さへ變化しなければ、形や量に如何程の變動があつても、其の名稱を變化することが無く、既に單數の形に於て其の物質の全量を表はし、其の物質の最大量を表はし得ると同時にその最小量をも表はし得るものなるが故に、複数を作るの要がない、

例 Fleisch (肉), Gold (金), Heu (秣), Horn (角), Wein (葡萄酒), Wasser (水)等.

併し此れ等の名詞にも複数の形があるが、其の時には最早、物質名詞ではなく、種屬名詞となつて仕舞ふ、

例 Horn——Hörner (各種の角), Hörner (獸の頭にある儘の角); Korn——Körner (穀粒); Wein——Weine (各種の葡萄酒); Holz——Hölzer (各種の木材), Hölzer (棒); Eisen——Eisern (蹄鐵); Brot——Brote (數塊の麵包)等.

注意 尚ほ次に此れ等の語を用ゐて文例を示さし:-

Horn heißt die Masse, aus der die Hörner der Rinder und ähnlicher Tiere bestehen, und zwar unterscheidet man viele Hornarten oder Hörner. (角質とは牛及びそれと相似たる獸類の角を組織せる實質の名にして、世人は實に多くの角の種類を分類せり).

Das Korn besteht aus vielen einzelnen Körnern. (穀物は多くの個々の穀粒より成る).

Er trinkt viel Wein (彼れは葡萄酒を澤山飲む).

Es giebt verschiedene Weine, z. B. Rheinwein, Champagner, Burgunder etc. (多くの葡萄酒の種類がある、例へばライン産葡萄酒、三鞭酒、ブルグンド葡萄酒等).

Der Tischler verarbeitet Holz, und zwar verschiedene Holzarten oder Hölzer (指物師は木を工作す、而かも各種の木材を).

Die beiden Hölzer eines Fensterkreuzes (窓骨の二本の棒).

Der Schmied soll dem Pferde vier neue Eisern auflegen (鍛冶屋が馬に四つの新しい蹄鐵を打ち付けねばならなかつた).

Ein Buch mit vielen Kupfern (多くの銅版畫のある本)

Wir essen viel Brot, jeden Tag zwei Brote (oder Bröte) (吾人は多くの麵包を食ふ、毎日二塊の麵包を).

Er hat soviel Geld, daß er kaum weiß, wo er seine Gelder unterbringen soll (彼は何處に己が貨幣を藏して可なるかを知らぬ程澤山の金を持つてゐる).

II. 集合名詞 § 21, c) に述べしが如くに、集合名詞は單に多數といふことを表はしてゐる許りでなく、獨立せる同種類のもの、集合を表はしてゐるのであるから複數を作ることが出来ぬ、[但し、集合名詞中異種類の獨立せるものが集まつて成れるものは然らず、例へば Heer——Heere; Regiment——Regimenter; Volk——Völker; Wald——Wälder 等の如し].

例 Gefinde (奴婢), Vieh (家畜), Ungeziefer (毒蟲).

III. 抽象名詞 § 20, b) に論じたるが如く、抽象名詞なるものは物體からその性質、動作、状態等を抽き離して、それを一個獨立せるものの如くに考へたものであるから、複數の作られ得べき筈のものではない、

例 Gedächtnis (記憶), Liebe (愛), Glanz (光輝), Glück (幸福)等.

然るに § 22. I. II. にて述べたる通り、抽象名詞と具體名詞との間には劃然たる區劃を立つることが出来難い場

合があるので、同じ抽象名詞でも具体的に用ひられた場合には、複數を作るものである、

例 Dummheit (愚)——Dummheiten (愚行); Unter allen Toden ist der Tod fürs Vaterland der edelste. (多くの死に様の中で祖國の爲めの死は最も貴きものなり)、

IV. Strand (濱), Kinn (頤), Kabel (嘴)等には複數がない、

以上述べたる複數のなき語の中、多くのものは他の語と組合はせて複數を作るのである、

例 Schnee (雪)——Schneemassen (大量の雪); Vieh (家畜)——Vieharten (家畜の種屬)等。

§ 54 複數名詞 Pluralia tantum (Wörter, die nur im Plural gebräuchlich sind)——或る種の名詞は複數のみ用ひられて單數のなきものがある、此の如きものを羅甸の術語にて Pluralia tantum と稱す、即ち次の如し:

Fasten (斷食祭), Fe'riën (休暇), O'stern (耶蘇復活祭), Pfingsten (聖靈降臨節), Weihnachten (耶蘇降誕祭); Blattern (痘瘡), Masern (麻疹), Röteln (赤疹); Eltern (兩親), Gebrüder (兄弟), Geschwister (同胞), Leute (人々); Brieffschaften (貯藏文書), Einkünfte (收入), Gliedmaßen (四

肢), Kosten (費用), Molken (乳清), Ränke (惡計), Sporteln (訴訟入費), Treber (煮出した大麥の殻), Trümmer (碎片), Zeitläufte (時勢); Beinkleider (股つ衣), Hofen (股つ衣); Alpen (アルペン山), Dardanellen (ダダネルス海峽), Pyrenäen (プレンネーエン山)(§ 51, 3)等。

§ 55. 度量衡を表はす名詞の複數につきて、「水一升」「酒二壺」「肉三斤」とか「幾貫」「幾尺」「幾人」などと云ふ風に數量を表はす名詞の用法に就きては次の規則がある:

1) かゝる名詞が數詞の後に立つて、其れと結合して用ひらるる場合には變化せず、[故に die Summe von 10 Pfennig と 10 Pfennige とを區別せねばならぬ、前者は「十フエンニヒの金額」といふことにして後者は「一フエンニヒ貨幣十個」といふことである、前者は 10 と Pfennig と結合して用ひられたる場合なり]、

例 mit 100 Taler (Talern に非ず)「十ターレルを持つて」、eine Summe von 100 Taler (Talern に非ず)「十ターレルの金額」、an 7 Fuß hoch (Fuße に非ず)「七尺の高さに」、3 Pfund Fleisch (Pfund に非ず)「三磅の肉」等。



2) 無調音の *e* にて終り度量衡を表はす女性の名詞は必ず複数には *n* の語尾を附す、

例 2 *Flaschen Wein* 「葡萄酒二壺」、3 *Meilen lang* 「三哩の長さ」、5 *Quadratmeilen groß* 「五方哩の大きさ」、

3) 時程を表はす場合には *Woche* (週), *Stunde* (時間), *Minute* (分), *Sekunde* (秒) の如き *e* にて終る女性名詞のみならず、他の語も亦、變化さるるのである、就中第三格に於て然りとす、

例 *Er war 7 Jahr* (*Jahre* の方が普通) *alt* 「彼は七才であつた」、*er will 3 Monat* (*Monate* が普通) *dort bleiben*. 「彼は三ヶ月彼處へ留まらんとす」、*er ist 8 Tag* (*Tage* といふ方がよい) *lang verreist gewesen* 「彼は八日間旅してゐた」、*ein Kind von 3 Monaten* 「三月の小兒」、*ein Knabe von 13 Jahren* 「十三歳の男兒」、*er ist in 3 Nächten nicht ins Bett gekommen* 「彼は三夜寢床に入らなかつた」、*nach vielen Jahrhunderten* 「數世紀の後」等。

### § 56. 冠詞の用法

獨逸語にては冠詞は比較的多く使用せらるゝものなるが故に、其の用法に精通せねばならぬことは論を俟たぬ、併し此れも文法の他の諸規則と同じく、一朝一夕にして

習得し得らるゝものではない、況んや此れを單に文法書のみによつて究めんと欲する人あらば必ず失望せらるゝであらう、讀書百遍、意自ら通ずとあるが冠詞の用法も讀書、作文、會話等にて種々の場合に於て遭遇して初めて自在に使用し得らるゝことと成る、文法は畢竟其の手引きたるに過ぎぬ、此の事は單に冠詞の用法に對する注意たるに止まらず、一般文法上の諸規則に對する注意である。

§ 57. 定冠詞 *bestimmter Artikel* の用ひらるゝ場合は次の如し：

#### I. 全種屬を代表する具體名詞の前、

例 *Der Mensch ist sterblich*, (人間は死すべきものなり)、

*Die Stimmen der Tiere sind sehr verschieden*. (動物の聲は極めて異なれり)、

#### II. 或る抽象名詞の前、

例 *Das menschliche Leben ist kurz*. (人生は短かし)、

*Die Zeit verging schnell*. (時は早く過ぎぬ)、

注意一 抽象名詞が集合名詞の意味に用ひられる場合には、第一格にては定冠詞は習慣によつて省かれたり附されたりする、但し第一格を除いて他の格の前、又は前置詞と結合する時には必ず定冠詞を要す、

例 (Die) Beschäftigung ist nötig für das Glück des Menschen. (職業は人間の幸福に必須なるもの也).

Aufrichtige Freundschaft verbindet uns. (誠實なる友誼は吾人を結合す).

Der Redlichkeit soll man nachstreben. (人は誠實ならんことを努めざる可からず).

併し此の名詞にても他の名詞の第二格又は關係代名詞(代名詞の章を見よ)に依つて意味が限定さるゝ場合には第一格に於ても常に定冠詞を附さればならぬ.

例 Die aufrichtige Freundschaft dieser Leute. (此の人々の誠實なる友誼).

Die aufrichtige Freundschaft, welche uns vereint. (吾人を結合する所の誠實なる友誼).

注意二 格言や諺の中の抽象名詞の前には凡べて定冠詞が省かれる.

例 Mut geht über Gut. (勇は善に優る).

Liebe ist einäugig, aber Haß ganz blind. (愛は隻眼なれど憎は盲目なり).

Kunst bringt Günst. (藝は身を助す).

### III. 團體、政治、科學、宗教名稱の前、

例 Der Adel (貴族), die Regierung (政治), die Monarchie (獨裁君主制), die Geschichte (歴史), das Christentum (基督教), das Judentum (猶太教).

### IV. 女性の國名、併びに町名 (Straße). 山、川、湖、海等の名の前、

例 Wir wohnen in der Friedrichstraße. (われ等はフリードリッヒ町に住めり); die Schweiz (瑞西), die Türkei (土耳其); die Alpen (アルペン山).

die Pyrenäen (プレンネーエン山); der Rhein (ライン川); der Bodensee (ボデー湖); die Nordsee (北海).

### V. 後へ直ちに固有名詞の續く種屬名詞の前、

例 Der Kaiser Wilhelm der Zweite (ウキルヘルム二世皇帝).

Die Königin Viktoria (ヴィクトリア女王).

Der Admiral Togo (東郷大將).

但し、男性の固有名詞の第二格で、其れが他の語の先きに立つてゐる時には例外である、例へば Admiral Togos Sieg (東郷大將の戰捷)の如し、

### VI. 固有名詞に形容詞が先き立つ場合、

例 Der arme Friedrich (憐れむべきフリードリッヒ).

Der heilige Paulus (聖者ポーロ).

### VII. 藝術家、著作者等の作物を云ふ時に其の作物の名を言はずして其の人の名を言うて此れを表はす場合、

例 Ich lese den Goethe (私はゲーテを読む)[ゲーテの作物].

Saben Sie schon den Shakespeare gelesen (貴君は既にセーキスピーヤを讀みましたか) [セーキスピーヤの著作物].

VIII. 多数の同名異人を宛かも種屬名詞の如く見做す時 (§ 61. III. 参照).

例 **Die** beiden Ludwig (或は Ludwige) in der französischen Geschichte (佛國史中の兩ルードウ、ヒ).

**Die** vielen Humboldts (多くのフンボルト).

IX. 古代の人名(殊に  $\Rightarrow$  に終るもの)の格を明らかにらしめんとする場合、

例 Die Tat **des** Alcibiades (アルチビアデスの事業).

Der Tod **des** Perikles (ペリクレスの最後).

Die Werke **des** Cäsar (ツェーザルの著作).

X. 甲と乙とがあり、甲なる人物の性格、事業、才能等が乙なる人物の之れと類似せる時には甲の性格、事業、才能等を云はずして乙の固有名詞を用ひてこれを表はすことあり、斯かる場合にはその乙の固有名の前に冠詞を附す、而して定冠詞を附したる時は乙と類似せるものは甲を除きて他になしといふことを表はす (§ 61. II. 参照).

例 Marquis Ito ist **der** Bismarck in Japan (伊藤侯爵は日本のビスマルク也).

Er ist **der** Napoleon in unserer Zeit (彼は現代のナポレオンなり).

XI. 四季、十二月、日、日の部分の名の前、

例 **Der** Sommer ist gewöhnlich lieblich und warm (夏は普通愛らしくして暖かなり).

**Der** April war naß und kalt (四月は濕潤にして寒冷なりき).

注意 金屬を一般的に言ひ表はす時には其金屬名の前に定冠詞が省かれたり、附されたりする、例. (Das) Eisen ist nützlich (鐵は有用なるもの也)、Gold ist schwerer als Blei (金は鉛よりも重し).

XII. 次の名詞及び其れと類似の名詞の前:

Der Mensch (人間), die Menschen (人々), die Leute (人々), das Frühstück (朝食), das Mittagessen (午餐), das Abendessen (晚餐), der Tee (茶), der Durst (渴), der Hunger (飢), die Sitte, (風俗) das Glück (幸福), das Unglück (不幸), das Schicksal (運命), die Zeit (時), das Gesetz (法律), die Natur (自然), der Himmel (天), das Leben (生命), der Tod (死), der Krieg (戦争).

## XIII. 次の句に於て、

Die meisten Menschen (多くの人々), er wohnt in der Stadt (彼は都に住む), der Knabe geht in die Schule (あの男兒は學校へ行く), das Kind ist in der Schule (あの兒は學校に居る), in der Kirche (教會に), in die Kirche (教會へ).

## XIV. 品物の價格を表はす時の單位となる名稱の前、

例 Sechs Pfennige der Meter —メートルは六フェンニヒ.

英語では之れに反し不定冠詞を用ゆ: six pence a meter.

## XV. 定冠詞は又、人體の部分を表はす名詞と結合して物主代名詞(代名詞の部を見よ)の代りに用ゐらる、

例 Taro hat das Bein gebrochen (太郎は[彼れの]足を挫いた).

Ich habe mich in den Finger geschnitten (私は[私の]指を切つた).

Ich hatte das Schwert in der Hand (私は[私の]手に劍を持つてゐた).

## § 58. 冠詞の反覆 Wiederholung des Artikels.

同性、同數の名詞が數個連續する場合には冠詞は唯だ最初の名詞にのみ附すればよい、

例 Ein Schuhmacher und Schneider weiß das allerdings nicht (靴工も仕立屋も成る程これを知らない),

併し單數にして同性の名詞が數個連續する時に、各名詞間の差別を特に力を強めて云ひ表はさんとする時には、定冠詞又は不定冠詞が各名詞の前に反覆される、

例 Ein Schuhmacher, ein Schneider und ein Hutmacher saßen am Tische (一人の靴工と一人の仕立屋と一人の帽子屋が食卓に着いてゐた).

又、同性同數の名詞が數個連續せる時に於ても其等が互に反對せる意味の物を表はしてゐる場合には冠詞を一々繰り返さねばならぬ、故に

die Freunde und Nachbarn (友人と隣人), die Verwandten und Bekannten (親戚と知己), die Kinder und Kindes-kinder (子と孫)等

とは云ひ得るが、

die Mutter und Schwestern (母と姉妹), der Vater und Sohn (父と息子)等

と云ふことは出来ぬ、(但し der Sohn und Erbe. とは

「息子にして同時に相続人」なる場合にのみ云ひ得らるる  
のである、

複数に於ては die なる冠詞は唯だ最初の名詞に附する  
のみ、

例 **die** Brüder und Schwestern (兄弟姉妹).

**die** Wiesen und Felder (牧場と草野).

性の異なる名詞が連続する時には各の名詞の前に冠詞を  
反覆せねばならぬ、

例 **das** Messer und **die** Gabel (ナイフと肉刺).

Sch habe **eine** Serviette und **einen** Teller (私は一つの布  
巾と一つの皿を持つてゐる).

§ 59. 定冠詞の省略せらるる場合は次の如し:

I. 不定にして特段な種類も量も質も表はさぬ物質名  
の前、

例 Sch habe Gold und Silber (私は金と銀とを持つ  
てゐます).

Er hat Fleisch und Brot (彼は肉と麩麩とを持つ  
てゐます).

英語では斯かる場合には普通に some とか any とかを附する例へば:  
Sch habe Gold und Silber = I have some gold and silver.

注意 物質名でも第二格、第三格に用ゐられた時には常に定冠詞を附  
す、次の二例を比較せよ、

Sch ziehe Tee dem Kaffee vor (私は珈琲より茶が好きだ).

Wir mögen Tee lieber als Kaffee (われ等は珈琲よりは茶を好む).

II alle, beide の附せる場合、

例 Alle Knaben (凡べての男兒等), beide Schwestern  
(二人の姉妹).

注意一 但し冠詞が beide と共に用ひらるる時には冠詞は beide に先だ  
ち、beide は n の語尾を取る例へば: Die beiden Schwestern.

注意二 mancher, =e, =es; kein, =e, には不定冠詞が省かれる、例へば  
manche Blume (多くの花); es war weit und breit kein Wasser (見渡す限  
り水がなかつた).

III. 各種の名詞の複数にして不定にして一般的意味  
を有するもの、

例 Federn (ペン), Eier (卵), Männer und Frauen  
(男と女), Knaben und Mädchen (男子と女子).

IV. gegen, nach といふ前置詞を有する方位の名の前、

例 Rußland liegt gegen Norden (露西亞は北方に位  
す).

V. 名詞が、その支配する第二格の後に來る場合には、  
其の名詞は冠詞を省く、(普通には、名詞はその  
支配する第二格に先だつものなり、例へば das  
Haus des Nachbarn の如し)、而して茲に述ぶるが

如き語の配置を sächsischer Genitiv と稱す、この sächsischer Genitiv は普通の書き方より口調よく詩などに於て殊に多く用ゐらる、

例 Was in des Dammes tiefer Grube die Hand mit Feuers Hilfe baut, hoch auf des Turmes Glockenstube, da wird es von uns zeugen laut. これを普通に書き直ほせば: was in der tiefen grube des Dammes..., hoch auf der Glockenstube des Turmes... (職工が火の助けもて土手の深き穴の中にて造るものを、塔の鐘樓の上高く引き上げて、われ等はこれを高く鳴らさん). [Schiller の詩 glocke の一句]

更らに此の第二格が、冠詞の助けを藉らずして其れ一個にて第二格たることの解かる場合には冠詞を省く、

例 aus Himmels Höhen [=aus den Höhen des Himmels](天の高きより), durch Sohnes Hand [=durch die Hand des Sohnes] (子息の手によつて), auf treuer Freunde Rat [=auf den Rat treuer Freunde] (忠實なる友人等の忠言に従つて), — 但し

durch Freunde Hand, auf Freunde Rat などと言ふことは出来ぬ、

併し、此の第二格を支配してゐる名詞が同じく第二格となる場合には sächsischer Genitiv を用ふることを得ず、

例 Die Erde ist voll der Güte des Herrn (voll des Herrn Güte に非ず)「此の世は神の恵に充てり」  
Die Geschichte der Söhne Jakobs. (Geschichte Jakobs Söhne に非ず)「ヤコブの息子等の物語」.

VI. 呼び掛け、短かき命令、驚嘆を表はす叫び等に用ゆる名詞の前、

例 Barmherziger Gott (恵み深き神よ).  
Augen rechts (眼を右へ).  
Gott sei dank (有り難い、しめたぞ).  
Ach Gott (おやおや).

VII. 單數及び複數に於て關係代名詞の第二格 dessen, deren, dessen の後、

例 Der Knabe, dessen Vater krank liegt (其の父が病に臥してゐる男兒).

Die Blume, deren Schönheit so sehr bewundert wird (其の美が非常に驚嘆さるる花).

VIII. 次に掲ぐる語法にては冠詞を省く、

zu Land (陸で), zu Wasser (水上で), zu Pferd (馬で), zu Fuß (徒歩で), zu Wagen (馬車で), zu Schiff (船で); vor Hunger (飢の爲めに), vor Durst (渴の爲めに); bei Tag (晝間に), bei Nacht (夜に); mit Vergnügen (喜んで), aus Verdruss (面白くなくて), aus Haß (憎しみから); recht haben (正しい), unrecht haben (正しくない), Hunger haben (飢えてゐる), Durst haben (渴えてゐる); zu Mittag essen (午飯を食ふ), zu Teil werden (有に歸す), zu Nacht (Abend) essen (晩飯を食ふ); (sein) Wort halten (約束を守る); Lust haben (楽しい), Rechenschaft geben od. ablegen (責任を果す); in Ohnmacht fallen (失神する), Schrecken einjagen (戦慄せしむ), anteilnehmen (参加する), Abschied nehmen (別れる), Gefahr laufen (危険を冒す), acht haben, acht geben, sich in acht nehmen (注意する), Geduld haben (忍耐する), Mitleid haben (同情する), um Verzeihung

bitten (許を乞ふ), Glauben schenken od. beimessen (信用を與ふる), Hilfe leisten (援助する), Gesellschaft leisten (仲間となる), zu Hilfe kommen (助けに来る), zu Bett gehen (寢に就く); Troß bieten (抵抗する), zu Grunde gehen (没落する), Zustand kommen (成功する), Zustand bringen (成就す), Erwähnung tun (陳述する), um Rat fragen (相談をする).

§ 60. 不定冠詞に複数の形なきことは已に述べた (§ 35. を見よ)、然らば單數に於て不定冠詞を有せる名詞が複數となれる場合には如何にすべきかと云ふに、斯かる時には、其の名詞に zwei (二), drei (三), vier (四), ... zehn (十), zwanzig (二十)等の數詞を附するか、viel (多くの), mancher (多くの), einige (二三の)等の不定數詞を附するか、或は何物をも附せずして單に名詞のみを變化させて置くかするのである、

例 Zwei Kinder spielen miteinander (二人の小供が遊んでゐる).

Er hat zwei Söhne und drei Töchter (彼れは二人の息子と三人の娘を持つてゐる).

Es gibt viele Berge in Japan (日本には澤山山がある).  
Da stehen einige Knaben (彼處に二三の男兒が立つて  
ゐる).

Sie sind Studenten (彼等は學生である).

§ 61. 不定冠詞の用ひらるゝ場合は次の如し:

I. 或る一個の物の名を表はす種屬名詞の前: (§ 33.  
を参照せよ)

例 Er ist ein Schüler (彼は一學生也).

Da kommt ein Mann (彼處に一人の男が来る).

II. 甲と乙とあり、甲なる人物の性格、事業、才能等  
が乙なる人物のそれと類似せる時には、甲の性  
格、事業、才能等を云はずして、乙の固有名を用  
ひてこれを表はすことあり、斯かる時にはその乙  
の固有名の前に冠詞を附す、而して不定冠詞を用  
ひたる場合には乙に類似せるものは多くあるが甲  
もその一人なるを示す (57. X. 参照).

例 Er ist ein Napoleon in unserer Zeit (彼れは現  
代のナポレオンなり).

Er ist ein Demosthenes in unserer Klasse (彼れは  
わが級のデモステネスなり).

III. 多数の同名異人を宛かも種屬名詞の如く見做す  
場合 (§ 57 VIII. を見よ),

例 Ich habe gestern einen Karl gesehen (私は昨日  
一人のカールに會つた).

注意 種屬名詞であつても冠詞の附せられぬ場合がある、例へば er ist  
ein Lehrer, er ist ein Soldat などと言へば、世の中には多くの教員や、兵卒  
が居るが彼れはその教員中の一個の教員であり、兵卒中の一個の兵卒であ  
るといふことを表はしてある、然るに世の中には教員も生徒も商人も官吏  
も居るが彼れは教員の職に従事してゐるとか、兵卒の務をなしてゐるとか  
云ふ場合には冠詞を省いて er ist Lehrer, er ist Soldat と云ふ、要之、種  
屬名詞が恰かも物質名詞の如く用ひられて何等の定限をも加へられぬ時  
には冠詞を省き、その種屬中の一個もしくは數個のものを意味して制限を  
加へらるゝ場合には冠詞を附す

## Kapitel V. 第五章

### Das Pronomen oder Fürwort.

#### 代名詞

§ 62. 獨逸語に於ては邦語に於けるよりも此の代名  
詞を用ふること多し、代名詞とは讀んで字の如く、名詞  
の代りをなす詞である、或る同一の名詞を幾回も繰り返  
すは餘り繁雜で耳障りになるものであるから斯かる時に  
代名詞が使用せらるゝのである。



代名詞は名詞として用ひらるゝ時もあり、又、形容詞として用ひらるゝ場合もある、而して其の變化にも形容詞のと、代名詞特有の變化をなすものがある、

今、包括的な定義を下したならば、代名詞とは人間、事物を其の名を呼ぶ代りに用ひ、又は其れを指示し、其れを問ふ時に用ふる語である、

§ 63. 代名詞には次の六種類がある:

- 1) 人稱代名詞 Prono'mina persona'lia (persönliche Fürwörter)
- 2) 物主代名詞 Prono'mina possessi'va (besitzanzeigende Fürwörter)
- 3) 指示代名詞 Prono'mina demonstrati'va (hinweisende Fürwörter)
- 4) 關係代名詞 Prono'mina relati'va (zurückweisende Fürwörter)
- 5) 疑問代名詞 Prono'mina interrogati'va (fragende Fürwörter)
- 6) 不定代名詞 Prono'mina indefini'ta (unbestimmte Fürwörter)

## I. 人稱代名詞

### Pronomina personalia oder persönliche Fürwörter.

§ 64. 人稱代名詞は談話中に出で来る人間、事物を其の名を云ふ代りに用ふる詞であつて、性と數と格とに従つて變化さる、然るに談話中には三つの關係の生ずるものなり即ち:

- (1) [談話者] 或は**第一人稱** die [sprechende] oder **erste Person**
- (2) [對話者] 或は**第二人稱** die [angesprochene] oder **zweite Person**
- (3) [第三者] 或は**第三人稱** die [besprochene] oder **dritte Person**

§ 65. 人稱代名詞は即ち ich (私); du (汝); er (彼), sie (彼女), es (其)——wir (私等); ihr (汝等); sie (彼等)であつて、其れ等は性、格によつて次の如く變化さる:

1. Person		2. Person		3. Person		
Singular.						
				m.	f.	n.
N.	ich	du		er	sie	es
G.	meiner*	deiner*		seiner*	ihrer	seiner
D.	mir	dir		ihm	ihr	ihm
A.	mich	dich		ihn	sie	es

		Plural.			
N.	wir	ihr		sie	} für alle Geschlechter.
G.	unser	euer		ihrer	
D.	uns	euch		ihnen	
A.	uns	euch		sie	

**注意一\*** 単数第二格の meiner, deiner, seiner には外に **mein, dein, sein** といふ省略した形がある。此れ等は舊い形であるが今でも或る句にては此の形を存して居るものがある。例 *ich gedenke deiner oder dein* (私は汝を想ひ起す), *vergiss meiner oder mein nicht!* (私を忘るゝな), *man bedarf sein* (世人は彼れを要す) 等、汝を想ひ起す。私を忘るゝな。彼を要す等に於ける **私を, 汝を, 彼を** が何故獨逸語では *deiner, meiner, seiner* と第二格であるかと云ふに之れは動詞の *gedenken, vergessen, bedürfen* は第二格を支配するからである。人稱代名詞としての**第二格は第二格支配の動詞若しくは形容詞がある時の外は用ゐらるゝことはない** 詳しき事は動詞、形容詞の部にて見よ**私の何々, 汝の何々** と云ふ様な物は物主代名詞(其處を見よ)で人稱代名詞ではない。

**注意二** 此の *mein, dein, sein* なる古き形に *wegen* (.....の爲めに) 及び *um*.....*willen* (.....の爲めに) *halben* (.....の爲めに) を結合するには **et** 又は **t** を用ゆ。例 *meinetwegen* (私の爲めに, 御隨意に, 御勝手に), *deinetwegen* (汝の爲めに), *ihrerhalben* (彼女, 彼等の爲めに) *unserwillen* (吾人の爲めに), *euerwillen* (汝等の爲めに), *deinetwillen* (汝の爲めに)。

**注意三** 第三人稱、中性、單數、第二格には、**es** 及び **'s** なる舊い形が今も尙ほ若干の句に於て用ひられる。例 *ich bin es fest entschlossen* (私はそれを確りと決心した), *ich bin es müde* (私は其れに疲れた), *er hat es kein Geheim* (彼れは其れに何等の秘密をも有せぬ), *ich bin's zufrieden* (私は其れに満足してある), *Sie haben's keinen Gewinn* (彼等は其れから何等の利得をも得ぬ), 等

**注意四** **ich** は第一人稱の單數であり、その複數は **wir** である、故に「私は...ことを命ず」とは *ich befehle, daß...* といふ、然るに主權者、君主、諸侯は此の **ich** の外に **wir** なる第一人稱の複數を用ゆることが往々ある、而して其 **Wir** は花文字を以て書き邦語の「朕」に當り所謂 *Pluralis majestatis*

(尊嚴複數) なるものである。例 **Wir**, Wilhelm II., (der zweite と讀む) von Gottes Gnaden Deutscher Kaiser und König von Preußen, befehlen, daß.....(神の慈により獨逸皇帝たり普魯士國王たる朕ウ非ルヘルム二世...ことを命ず)。

**注意五** 商業上の會話、文章には **ich** 或は **wir** なる代名詞の省かるゝことが屢々ある。

**注意六** **du** は第二人稱の單數で、その複數は **ihr** である、**du** の用ひらるゝ場合は次の如し:

1. 親しき同志即ち親子、夫婦、兄弟、親戚、親友等の間 2. 神を祈り又は呼び掛くる時、及び動物に向つて物を言ふ場合、 3. 長上の者が目下の者に對する時、 4. 韻文に於ては尊鄙親疎の差別なく常に之を用ふ、 (自修書、後編 § 1. 參照)

1. の場合に於て親しき同志が互ひに **du** と云ひ合ふことを **sich duzen** といふ。

**注意七** 以上の外の他の人と話す場合には第三人稱の複數 **Sie** **Ihrer, Ihnen, Sie** [あなた(方)は, あなた(方)の, あなた(方)に, あなた(方)を] を用ゆ、それは花文字で書かなくてはならぬ、花文字で書かれれば第三人稱の複數の彼等である、そして此の **Sie** は單數にも複數にも用ひらるゝ、恰かも英語の *you* 佛の *vous* 等が單複に通ずると同じ譯けなり、例 *Hast du das Buch gelesen, mein Kind?* (お前は其の本を讀んだか、吾が兒よ), *Habt ihr das Buch gelesen, liebe Kinder?* (汝等は其の本を讀んだか、愛する兒等よ); *Haben Sie das Bild gesehen, Fräulein M.?* (あなたはあの繪を御覽でしたか、M. 嬢よ), *Haben Sie das Bild gesehen, meine Dame?* (あなた方はあの繪を御覽でしたか、貴女達よ)

**注意八** **Sie** は又、命令法に用ゐらるゝ、而して單複兩數に共通である、例: *Gehen Sie, mein Freund!* (お行きなさい、吾が友よ), *gehen Sie, meine Freunde!* (お行きなさい、吾が友等よ)。

**注意九** **Sie** は現今では鄭重なる形 *Höflichkeitsform* である。

九世紀には第二人稱の複數 **Ihr** を今の **Sie** の様に用ゐたことがあつた、君主が其の臣下に向つて話さるゝ時には此れを用ひたこともあつた、例 *Wollt Ihr zum Feste kommen, Herr Ritter, so treffet zur rechten Zeit mit Eurem Gefolge ein.* (騎士よ、其方祭典に列せんとらば早

く其方が従者を伴うて来るべし)、Wie geht's **Euch**? (機嫌はいいか)  
此の形は今も尚ほ俗語には残つ居る

十七世紀には第三人稱の單數 **Er** 及び **Sie** を此の如く用ゐたのである、例: Was will **Er**? (其の方は何用があるのか), Wie heißt **Sie** (女に向ひ: お前の名は何といふか)。

**注意十** 文章の始め及び國君、主宰者が自身の事を云ふ場合を除いては **ich** は常に小文字で書き、尊稱の **Sie** 及び手紙の中に出る **Ihr**, **Er**, (**Sie** の代りの) **Sie**, [彼の女] (**Sie** の代りの) 及び **Du** は必ず花文字で書くべし、(§ 4. 注意 6. 7. 参照)

**注意十一** **er**, **sie**, **es** は第三人稱の單數で、人間、事物の代名詞である、而して複數は **sie**。

單數	{ er.....男性 sie.....女性 es.....中性       }	複數 <b>sie</b> .....男、女、中、三性に共通
----	---	--------------------------------

次に名詞とそれに相當する代名詞が對照してあるから之れに依つて人稱代名詞の用法を學べ

### 第一格

男性:

單 數

Der Knabe schreibt 男兒が書く = **er** schreibt.  
Der Vogel singt 鳥が歌ふ = **er** singt.  
Der Baum ist hoch 樹は高くある = **er** ist hoch.

複 數

Die Knaben schreiben = **sie** schreiben.  
Die Vögel singen = **sie** singen.  
Die Bäume sind hoch = **sie** sind hoch.

女性:

單 數

Die Frau arbeitet 女が働く = **sie** arbeitet.  
Die Biene ist nützlich 蜂は有益なり = **sie** ist nützlich.  
Die Blume blüht 花が咲く = **sie** blüht.

複 數

Die Frauen arbeiten = **sie** arbeiten.  
Die Bienen sind nützlich = **sie** sind nützlich.  
Die Blumen blühen = **sie** blühen.

中性:

單 數

Das Kind spielt 小兒が遊ぶ = **es** spielt.  
Das Schaf frisst 羊が喰ふ = **es** frisst.  
Das Haus ist groß 家は大なり = **es** ist groß.

複 數

Die Kinder spielen = **sie** spielen.  
Die Schafe fressen = **sie** fressen.  
Die Häuser sind groß = **sie** sind groß.

### 第二格

單 數

男性: Ich gedenke meines Freundes = ..... **seiner** oder **sein**.  
私は私の友人を想ひ起す

女性: Ich gedenke meiner Freundin = ..... **ihrer**.  
私は私の女友を想ひ起す

中性: Ich gedenke meines Töchterchens = ... **seiner** oder **sein**.  
私は私の娘を想ひ起す

**gedenken** が第二格を支配する語故、日本語で「誰れそれな」と云ふ處を獨逸では第二格にしてある (斯 § 注意一参照)

複 數

Ich gedenke der Knaben = ..... **ihrer**.

此の如く第三人稱に於て人稱を表はす代名詞の第二格には **seiner**, (或は **sein**) **ihrer**, **seiner** (或は **sein**); **ihrer** が用ゐらるゝけれども、事物 **Sachen** を表はす代名詞の第二格では此れ等の形を使用することが出来ぬ、其の場合には其の代りに指示代名詞の第二格を用ゆ、即ち:

單數にては **dessen** 「その」或は  

{ dessen.....男性、 derselben.....女性、 desselben.....中性、       }	
---	--

複数にては **deren** 「それ等の」或は **derselben**. (§ 80 IV. 1)

單 數

男性: Er gedenkt des Kampfes 彼は戦争を想ひ起す = er gedenkt **dessen** oder **desselben**.

女性: Ich erinnere mich meiner Antwort 私は私の答を思ひ出す = ich erinnere mich **deren** oder **derselben**.

中性: Ich gedenke meines Versprechens 私は私の約束を思ひ起す = ich gedenke **dessen** oder **desselben**.

複 數

Wir erinnern uns unsrer Worte 我々は我々の言葉を思ひ出す = wir erinnern uns **deren** oder **derselben**.

第 三 格

單 數

男性: Ich antworte dem Knaben 私は男兒に答ふ = **ihm** 彼れに

女性: Ich antworte der Mutter.....母に = **ihr** 彼の女に

中性: Ich antworte dem Kinde.....小兒に = **ihm** 彼れに

複 數

男性: Ich antworte den Knaben .....小兒等に = **ihnen** 彼等に

女性: Ich antworte den Müttern.....母等に = **ihnen** 彼の女等に

中性: Ich antworte den Kindern.....小兒等に = **ihnen** 彼等に

第 四 格

單 數

男性: Ich bewundere den Künstler 私は藝術家を賞嘆する = **ihn** 彼を

女性: Ich pflücke die Blume 私は花を摘む = **sie** 彼の女を

中性: Ich kaufe das Haus 私は家を買ふ = **es** それを

複 數

男性: Ich bewundere die Künstler = **sie** 彼等を

女性: Ich pflücke die Blumen = **sie** 彼等を

中性: Ich kaufe die Häuser = **sie** 彼等を

§ 66. 不定代名詞としての **es**

**Es** は不定代名詞として用ひらるゝ事がある、即ち次の如し:

1) 不明、不定なる或る物を云ふ場合、例 **es** brennt (燃える) [即ち何が燃えて居るか不明の時 其の何かの代りに **es**], **es** klopf (戸を敲いてゐる) [上と同じ理由], **es** wallt und siedet und brauset und zischt (奔盪し、激昂し、怒り、叫ぶ) [上と同じ理由], **es** spukt (妖怪出沒す), [妖怪の實物を見た譯けでなき故不明なり]

2) 非人称動詞 (動詞章中の非人称動詞の部参照) の主格、例 **es** regnet (雨降る), **es** hagelt (雹降る), **es** ist windig (風吹きだ), **es** ist kalt (寒い), **es** donnert und blit (雷鳴し稲妻が光る)、[自修書後、第十二課]

3) 「.....がある」といふ意味に **geben** といふ動詞が用ひらるゝ時には **geben** は **es** を主格として **es gibt** となる、例 **es gibt** Krieg (戦争がある), **es gibt** in allen Völkern gute und böse Menschen (凡べての國民の中には善人も居れば悪人も居る), **es gibt** nur wenige schiffbare Flüsse in Spanien (西班牙には航行し得る河流は極めて尠)

ない)、es gibt の次の名詞は第四格なり (自修後、§ 28, 2)、es gibt は英の there is, there are に當る

4) 後に説べんとする事柄、又は既に説べた事柄を指示しその代表をする場合、例 *es ist nicht gut, daß der Mensch allein sei!* (人間が唯だ一人であるといふ事は善くない)、*es ist das erste Mal, daß ich ihn um Rat frage* (彼れに相談を掛けるのは此れが始めて)、*es ist mir unbekannt, ob er hier wohnt* (彼れが此處に住んで居るかどうか私には解らぬ)——*ich weiß es nicht* (私はそんなことは知らぬ)、*ich habe es von anderer Seite gehört* (私はそれを他の方面から聞いた)、*wer hat es getan?* (誰れがそんな事をしたのか)、[後の三例にある es の内容は其等の文に先立てる前の文に既に述べてある]

5) 文の客語 Prädikat として用ひらる、例 *ich bin es* (私は其れだ)、*du bist es* (汝はそれである)、*wir sind es* (吾々はそれである)、[自修、後、29-30 頁の註を見よ]

6) 文の補足語 Objekt として用ひらる、例 *wer sagte es?* (誰れがそれを云つたか)、*wer tat es?* (誰れがそれをしたか)、*ich habe es gesagt und getan* (私がそれを云つてした)、*ich habe es gesehen* (私がそれを見た)、

注意 *es* が動詞に先だつ時には其れは Nominativ 即ち Subjekt (主語) であり、動詞の後にある時は Infinitiv 即ち Prädikat (客語) 或は Objekt (補足語) である。

§ 67. 文章の語の位置が轉換されて客語、補足語の *es* が文章の頭に立つ様な場合には其の *es* を用ひてはならぬ、その代りに *das* 又は *dies* を用ふる、例 *das bin ich* (それが私だ)、*das sind wir* (それが吾々だ)、*das habe ich gesagt* (それを私が言ふた)、*dies oder das habe ich getan* (それを私がしたのである)、*dies weiß ich nicht* (これを知らぬ)、*das habe ich wohl gedacht* (それを篤と考へた)、

*es* は常に語勢がない、故に此の *es* に力を罩めて言はんとする時には、*es* の代りに *das* 又は *damit*, *dafür*, *darüber* 等の副詞を用ゆ、(斯かる場合には此等の副詞には第一綴音に語勢がある)、例 *das hat er gewiß nicht gewußt* (それを彼は確かに知らなかつたのである)、*das habe ich von ihm selbst gehört* (それを私は彼れから直接に聞いた)、*darüber hat er nie gesprochen* (それに関して彼れは決して話さなかつた)、

*es* を屢々略して 's とすることがある、例 *ich bin's zufrieden* (私はそれを満足に思ふ)、*ich hab's gewußt* (私

はそれを知つてゐた), 's ist einerlei (孰れでも同じことだ), 's ist schönes Wetter heute (今日はいゝ天気だ),

§ 68. 人稱代名詞の第三人稱 er, sie, es; 複數 sie は第三格及び第四格にて前置詞と結合し得らるゝのである、例へば:

三格	Der Lehrer ist mit seinem Schüler (=mit ihm) zufrieden. 教師は彼れの生徒を満足に思ふ
	Der Lehrer ist mit seiner Schülerin (=mit ihr) zufrieden. 教師は彼れの女學生を満足に思ふ
	Der Lehrer ist mit seinem Töchterchen (=mit ihm) zufrieden. 教師は彼れの娘を満足に思ふ
	Der Lehrer ist mit seinen Kindern (=mit ihnen) zufrieden. 教師は彼れの小兒等を満足に思ふ
四格	Er hat den Brief durch einen Boten (=durch ihn) empfangen. 彼は手紙を使者に依つて受取たり
	Er hat den Brief durch seine Tochter (=durch sie) empfangen. 彼は手紙を彼の娘に依つて受取たり
	Er hat den Brief durch das Töchterchen (=durch dasselbe) empfangen. 彼は手紙を彼の娘等に依つて受取たり

Er hat den Brief durch die Kinder (=durch sie) empfangen. 彼は手紙を彼の小兒等に依つて受取たり

注意 mit seinen Schülern 等に於ける mit は「...を持って」とか「...と共に」と譯すが上の文章では mit が熟字的に使はれてゐる即ち mit seiner Schülerin zufrieden で「彼の女學生で満足して居る」、「女學生を満足に思ふ」と云ふことにて「持て」、「共に」と譯しては分からね、—durch は「通じて」「依つて」等の意味があるので上の文では「...の手を経て」である

人稱代名詞の中性第四格の es が人間の名稱の代りに用ひられて前置詞と結合する時には dasselbe と云ひ(其の方が音の調子も良いから) es とは言はぬ

§ 69. er, sie, es; sie が第三格及び第四格の前置詞(前置詞の部参照)と結合して事物の名稱の代りに用ひらるる場合には、此れ等代名詞の代りに副詞 da 或は hier に前置詞を結合したる組立語を用ふるのである、其の場合には單複兩數は同形である、(人間の名稱の代りにには必ず er, sie, es; sie が用ひらるゝので即ち § 68 の例にて示した如くである

I. da と結合せるもの:

dabei' (その側ら, 其の際) davon' (それから, に付て)  
dadurch' (それを通して) daneben (その傍に)  
dafür' (その爲め, 代りに) davor' (その前に)

dage'gen (それに対して)    daw'i'ber (それに反して)  
 dah'i'nter (その後ろに)    dazu' (それに迄で)  
 damit' (それを持つて)    dazwi'schen (その間に)

併かし結合に際し母音が二つ列ぶ時には da= は dar= となる:

daran' (それに就いて)    darob' (其故に)  
 darauf' (その上に)    darü'ber (それに就きて)  
 daraus' (それから)    darum' (それ故に)  
 darein' (その中へ)\*    darun'ter (その下に)  
 darin' (その中に)\*

注意 \*darein と darin とを區別せねばならぬ、前者は wohin? (何處へ) の間に答ふるもので、後者は wo? (何處に) の間に答ふる形である、  
 例 Wer andern eine Grube gräbt, fällt selbst darein (他人に穴を掘る人は自分自身その中へ陥る = 人を呪へば穴二つ)、

此等の語にては語勢は前置詞にある、併し文章中にて此の語に特に力を單めんとする場合には副詞 (即ち da) を強く發音す

## II. hier と結合するもの:

hierbei' (その側ら)    hierneben' (その傍に)  
 hierdurch' (それを通して、之れに依つて)  
 hierfür' (その爲めに、その代りに)  
 hiernach' (その後)    hieran' (それに就いて)

hierge'gen (それに対して)    hierauf' (その上に、その後)  
 hiermit' (それを以て)    hieraus' (それから)  
 hiervon' (それから、に付て)    hierin' (その中に)  
 hierzu' (それに迄)    hierü'ber (それに就きて)  
 hierzwi'schen (その間に)

ohne (無しに) といふ前置詞は da, hier と結合することは出来ぬ、又 wo とも結合しない、故に darohne とか hierohne など云うてはならぬ必ず ohne ihn, ohne sie, ohne es; ohne sie 或は ohne denselben, ohne dieselbe, ohne dasselbe と云はねばならぬ、

hier= と前置詞とが結合する時に前置詞の頭文字が子音であつて、其の爲め、結合して二個の子音が列ぶ場合には hier が r を失つて hie= となることもある、例 hie= mit, hiegegen, hiedurch 等、併し斯かる形は今では舊くなつて、使用さるゝことが尠ない、

例 Ich esse gern Obst und kaufe im Herbst viel davon [von ihm に非ず]、(私は果物を好んで食ふ、故に秋には その澤山を買ふ)、Wir wollen die Äpfel von den Bäumen schütteln, es sitzen nicht mehr viel darauf [auf ihnen に非ず]、(われ等は林檎を木から振り落さうと思ふ、その [木の] 上には最早多くは無い)

Wir haben viel über den Krieg gelesen und sprachen mit unsern Freunden arüber oder über denselben [über ihn に非ず、I.] (われ等は戦

争に關して澤山に讀書した、そして其れに就きわれ等の友人等と語つた)、

Er wusste nichts von dem Untergang des Schiffes und hörte mich mit Interesse davon oder von demselben sprechen [von ihm に非ず、I.] (彼れは船の沈没といふことに就いては何も知らなかつたので、其れに就いて私が語ることを面白く聞いてゐた)、

Haben Sie etwas gegen Herrn B.? Ich habe nichts gegen ihn [人稱を表はす故 ihm] (君は B 氏に反對なことが何かあるか、僕は彼に反對なことは何もない)、

Haben Sie etwas gegen die Ansichten des Herrn B.? Ich habe nichts dagegen oder gegen dieselben [gegen sie に非ず、] (君は何か B 氏の意見に反對があるか、僕はそれには = その意見に何も反對でない)、

Kennen Sie etwas von Schiller? Ich kenne nur die Dramen von ihm [人稱なる故 ihm] (君はシルラーに就いて何か知つてゐるか、僕は唯だ彼れに就いてはその劇を知つてゐる許りです)、

Wissen Sie etwas über die Rede des Präsidenten? Ich weiß nichts darüber oder über dieselbe [über sie に非ず、人稱に非ざる故] (君は大統領の演説に就き何か知つてゐるか、僕はそれに就いては何も知らぬ)、

§ 70. 人稱代名詞に再歸的 reflexiv といふものがある、即ち補足語としての第三格、第四格の人稱代名詞が主格と同一人物を表はす場合に其の第三格、第四格の代名詞を再歸的 reflexiv といふ

Akkusativ	Dativ	Genitiv
ich bezwinde <b>mich</b>	ich wünsche <b>mir</b>	ich vergesse <b>meiner</b>
du bezwingst <b>dich</b>	du wünschest <b>dir</b>	du vergiffest <b>deiner</b>

er	er	er vergift <b>seiner</b>
sie	sie	sie vergift <b>ihrer</b>
es	es	es vergift <b>seiner</b>
wir bezwingen <b>uns</b>	wir wünschen <b>uns</b>	wir vergessen <b>unser</b>
ihr bezwingt <b>euch</b>	ihr wünschet <b>euch</b>	ihr vergesst <b>euer</b>
sie bezwingen <b>sich</b>	sie wünschen <b>sich</b>	sie vergessen <b>ihre</b>

注意一 再歸的代名詞に就きては再歸動詞の處に詳述しあり就きて見よ、

注意二 第一人稱、第二人稱の單數、複數には Reflexiv として特別な形が無く人稱代名詞の第三格、第四格と同じである、即ち: mir, mich; dir, dich; uns, uns; euch, euch.

注意三 唯だ第三人稱の單數、複數のみが特別な Reflexiv の形を有してゐる、即ち男、女、中の三性、單複數の別なく sich を用ひ、

注意四 第二格では第三人稱に於ても特別な Reflexiv の形なく人稱代名詞の seiner, ihrer, seiner; ihrer が用ゐらる、

注意五 Reflexiv の意味を強むる爲めに selbst 及び selber を用ひ  
例 er widerspricht sich selbst (彼れは己れ自身に反對す = 自家撞着)、  
ich traue mir selbst (余は己れ自身を信ず)、  
ich ernähre mich selbst oder selber (余は余自らを養ふ)、  
wir helfen uns selbst (吾人は己れ自らを助く)、

注意六 第二格も亦、selbst を用ひて意味を強むることが出来る、例  
sie vergaß ihrer selbst (彼女は己れを忘れた)、  
er spottete seiner selbst (彼れはわれと我が身を誹つた)、

注意七 Reflexiv の sich は又よく、相互的 reziprok に用ひられて einander, miteinander, untereinander 等の代りに用ひらるゝのである、例  
die Brüder gleichen sich = sie gleichen einander (兄弟は互ひに似てゐる)、  
die Knaben stritten sich = sie stritten untereinander (小兒等は互ひに争ひ合ふた)、  
sie zankten sich = sie zankten miteinander (彼等は互ひに喧み合つた)、



第二格、第三格、第四格も亦、相互的 reciproc. に用ひらるゝが、それに就き特段な形を有してゐない、例 wir sankten **uns** = wir sankten untereinander (われ等は互ひに嘆み合つた), schonet euer! = schonet euer gegenseitig! (汝等相互ひに愛惜すべし)

§ 71. 文の調子により又は關係を一層明瞭に言ひ表はさんが爲めに *ihm, sie, es; sie* なる人稱代名詞の第四格の代りに指示代名詞の **denselben, dieselbe, dasselbe; dieselben** を用ゆ、例 ich habe Schillers Werke nicht, bitte, leihen Sie mir **dieselben** [leihen Sie **sie** mir の代りに] (私はシラーの作を持つて居ませぬ、どうぞ其れを御貸し下さい), wann werden Sie ihm den Brief bringen? ich werde ihm **denselben** heute nachmittag bringen [werde **ihm ihm**.....の代りに] (あなたは何時彼れに手紙を持つて行きますか、私は其れを彼れに今日午後持つて行きます)。

注意一 人稱代名詞の *es* は略して 's とすることが出来る ('s は apostrophiertes s といふ)、例 gib *es* mir = gib 's mir (それを呉れろ), ich bin *es* = ich bin 's (私がそれだ), habt ihr 's gefunden? (汝等はそれを見出したか), ja, wir haben 's gefunden (然り、吾等はそれを見出した), ich glaube *es* nicht = ich glaub 's nicht (私はそれを信じない), *es* ist kalt = 's ist kalt (寒い), wenn 's immer so wäre! (いつでも其の様ならいゝが)。

注意二 *mein, dein, sein* といふ舊い第二格の形は今も尙ほ二三の文章に残つてゐる、即ち; *gedenke mein!* (私のことを思つて呉れ), *vergib*

*mein* nicht! (私を忘れるな), ich pflege *sein* (私は彼を養育す), man bedarf *dein* (世人は汝を要す) [§ 65 注意] — 然れども第三人稱の女性の第二格 *ihrer* は *ihr* とはならぬ、ich pflege *ihrer* (*ihr* とは決して云はず)。

## II. 物主代名詞

### Pronomina possessiva, Possessiv Pronomen oder besitzanzeigende Fürwörter.

§ 72. 物主代名詞は通常、名詞と結合して、其の物の所有主を表すものである、即ち「私の本」「あなたの机」「彼れの時計」等の「私の」「あなたの」「彼れの」等凡べて事物の所有者を示す代名詞がこれである

§ 73. 物主代名詞は人稱代名詞の第二格 (*meiner, deiner, seiner* 等の語尾 *er* を除去したもの) から作られたもので *wessen?* (誰れの) の問に答ふる形である、此れには四つの使用法がある即ち次の如し:

1. 所有者が一人で所有物が一つの時 (換言すれば所有者が單數で所有物も單數の時)

私の机が *mein Tisch*      あなたの机が *Ihr Tisch*

私のペンが meine Feder あなたのペンが Ihre Feder

私の本が mein Buch あなたの本が Ihr Buch

物主代名詞は其の次に來る名詞の性によりて形が異なること恰も冠詞の如くであるそれで此の代名詞は單數にては不定冠詞 ein, eine, ein と同變化をなす、上の例で説明するに Tisch は男性名詞であるから不定冠詞を置けば ein Tisch となる處を此處では mein Tisch としたのである、Feder は女性名詞故 meine Feder (不定冠詞は eine Feder)、本は中性名詞故 mein Buch (不定冠詞は ein Buch) となる Ihr (あなた) と云ふ第一格は不定冠詞の第一格 ein とは形が全く違つて居るがこれは只だ語の形が異なるのみにて二格以下の語尾は矢張り不定冠詞の語尾を附するのであるから同冠詞と同變化であると云ふことが出来る(例へば不定冠詞の男性は ein, eines, einem, einem で此の代名詞の男性は Ihr, Ihres, Ihrem, Ihren であるので解かる)

2. 所有者が一人で所有物が二つ以上の時 (或は所有者が單數で所有物が複數の時)

私の机(複)が meine Tische

あなたの机が Ihre Tische

私のペン(複)が meine Federn

あなたのペンが Ihre Federn

私の本(複)が meine Bücher

あなたの本が Ihre Bücher

机、ペン、本の複數は已に名詞の處で學んだ通り Tische, Federn, Bücher となる而して名詞が複數になると同時に其の前の代名詞は矢張り複數の語尾を附す(物主代名詞複數の語尾は定冠詞と同語尾である即ち第一格は冠詞 die の e を附し meine となるこれは其の次の名詞が何性でも變らぬ、これ恰も定冠詞の複數が男女中の三性に對し常に die であると同じく)、併し此處に注意し置かねばならぬことは mein (私の) に複數の語尾 e を附したとて其の meine が複數の意味即ち „我々の“ と云ふ意味になるのではない e の語尾は只だ所有物が複數であると云ふことを示すに過ぎぬ其證には „我々の本“ は unser Buch であるが其の本(Buch) が二つ以上の時は unser に複數語尾 e を附し unsere Bücher とす此の時にまさか „我々の“ と云ふ語が複數の意味となつたと云ふことは出来まい(次の 3. 4. を見よ)

3. 所有者が二人以上で所有物が一つの時 (所有者が複数で所有物が単数の時)

我々の机が unser Tisch

あなた方の机が Ihre Tisch

我々のペンが unsere Feder

あなた方のペンが Ihre Feder

我々の本が unser Buch

あなた方の本が Ihr Buch

即ち所有者は „我々” と複数であるが所有物は一つであるから „unser” に複数語尾 *e* を附するには及ばぬ

4. 所有者も所有物も複数の時

我々の机(複)が unsere Tische

あなた方の机が Ihre Tische

我々のペン(複)が unsere Federn

あなた方のペンが Ihre Federn

我々の本(複)が unsere Bücher

あなた方の本が Ihre Bücher

此處では上の 2. で説明した通り所有物が複数なる故に所有者 (此處では unser と Ihr) に複数の語尾 *e* を附して unsere, Ihre としたのである „我々” „あなた方” に複数のあらう筈がない

§ 74. 人稱代名詞にて第一人稱には *ich* (私) と *wir* (我々), 第二人稱に *Sie* (あなた) と *Sie* (あなた方), *du* (汝) と *ihr* (汝等) 第三人稱には *er* (彼), *sie* (彼女), *es* (それ) があると同じく物主代名詞にも *mein* (私の.....), *unser* (我々の.....), *Ihr* (あなたの.....), *Ihr* (あなた方の.....), *dein* (汝の.....), *euer* (汝等の.....), *sein* (彼の.....), *ihr* (彼女の.....), *sein* (その.....), *ihr* (彼等の.....) がある而して此の物主代名詞は前に説明し置きたる如く其の次にある名詞の性によつて形を異にするのである。此如く述べ來たる時は甚だ複雑したる様に思はれるが名詞の性、數、格と代名詞の性、數、格と區別をなして置けば變化は冠詞の變化と同一であるから甚だ簡単に記憶することが出来る、今念の爲め最一度此の代名詞の第一格 (單複 (とも) のみを示さん、其れには 代名詞其の儘の時と夫れに *e* の語尾が附いた時との二つしか場合はないのである、而して第一格さへ知つて置けば余は冠詞の如く (單數では不定冠詞の如く、複數では定冠詞の如く) 變化する故極めて簡単に記憶することが出来るのである

mein, unser, Ihr, dein, euer, sein, ihr,

{ Bleistift (單數男性名詞)  
Buch (單數中性名詞) } 代名詞其の儘の時

meine, unsere, Ihre, deine, eure, seine, ihre,

{ Feder (單數女性名詞)  
Federn (女性)  
Bleistifte (男性) (複數)  
Bücher (中性) } 代名詞に e を附した  
る場合

§ 75. 以上 § 73 と § 74 に説明したる處に基き次に  
物主代名詞全部の變化を示さん

第一人稱單數 „私の“ + 單數名詞 (§ 73. 1 の場合)

m.	f.	n.
N. mein Tisch	meine Feder	mein Buch
G. meines Tisches	meiner „	meines Buches
D. meinem Tische	meiner „	meinem Buche
A. meinen Tisch	meine „	mein Buch

„私の“ + 複數名詞 (§ 72. 2.)

N. meine Tische, Federn, Bücher.  
G. meiner Tische, Federn, Bücher.  
D. meinen Tischen, Federn, Büchern.  
A. meine Tische, Federn, Bücher.

第一人稱複數 „我々の“ + 單數名詞 (§ 73. 3.)      „我々の“ + 複數名詞 (73. 4.)

(名詞の變化は上例と同一故之を略す)

以下名詞の處に線を引く)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	unser	— unse(re)	— unser	— unse(re) —
G.	unse(re)s	— unse(re)r	— unse(re)s	— unse(re)r —
D.	unse(re)m	— unse(re)r	— unse(re)m	— unse(re)n —
A.	unse(re)n	— unse(re)	— unser	— unse(re) —

第二人稱 „あなたの“ „あな  
なた方の“ + 單數名詞      „あなたの“ „あな  
なた方の“ + 複  
數名詞 (73. 2)

(§ 73. 1)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	Ihr <sup>x</sup>	Ihre	Ihr <sup>x</sup>	Ihre —
G.	Ihres	Ihrer	Ihres	Ihrer —
D.	Ihrem	Ihrer	Ihrem	Ihren —
A.	Ihren	Ihre	Ihr	Ihre —

第二人稱 „汝の“ + 單數  
名詞 (§ 73. 1)      „汝の“ + 複數  
名詞 (§ 73. 2)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	dein	— deine	— dein	— deine —
G.	deines	— deiner	— deines	— deiner —
D.	deinem	— deiner	— deinem	— deinen —
A.	deinen	— deine	— dein	— deine —

第二人称 „汝等の” + 單數名詞 (§ 73. 3)      „汝等の” + 複數名詞 (§ 73. 4)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	euer	eu(e)re	euer	eu(e)re
G.	eu(e)res	eu(e)rer	eu(e)res	eu(e)rer
D.	eu(e)rem	eu(e)rer	eu(e)rem	eu(e)ren
A.	eu(e)ren	eu(e)re	euer	eu(e)re

第三人称 „彼れの” „それの” + 單數名詞 (§ 73. 1; § 74)      „彼の” „それの” + 複數名詞 (§ 73. 2)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	sein	seine	sein	seine
G.	seines	seiner	seines	seiner
D.	seinem	seiner	seinem	seinen
A.	seinen	seine	sein	seine

第三人称 „彼の女の” „彼等の” + 單數名詞 (§ 74)      „彼等の” + 複數名詞 (§ 73. 4)

	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	ihr <sup>x</sup>	ihre	ihr <sup>x</sup>	ihre
G.	ihr <sup>s</sup>	ihrer	ihr <sup>s</sup>	ihrer
D.	ihr <sup>m</sup>	ihrer	ihr <sup>m</sup>	ihren
A.	ihren	ihre	ihr	ihre

注意 物主代名詞の ihr と云ふ形が五つの意味に通ずる (1) ihr の i が花文字即ち § と書いてある時は „あなたの” + 男性名詞 = Ihr *Sich*, 或は „あなたの” + 中性名詞 = Ihr *Buch*. (2) i が花文字でなく單に ihr としてある時は „彼の女の” + 男性名詞 = ihr *Sich* 或は „彼の女の” + 中性名詞 = ihr *Buch*; (3) „彼等の” + 單數男性若しくは中性名詞 = ihr *Sich*, ihr *Buch*. 此等に (4) 人稱代名詞三人稱女性單數第三格の ihr (彼の女に) と、同じく (5) 人稱代名詞二人稱複數の ihr (汝等) を加ふれば ihr には五つの意味があると云ふことが出来る。

§ 76. 物主代名詞は又、客語の如く (prädikativisch) に用ひらる、その場合には常に名詞の後に來て、變化しない、例 *der Hund ist mein, dein, sein, unser usw.* (その犬は私ので、汝ので、彼れので、吾等ので……ある), *die Hunde sind mein, dein, sein, unser usw.* (その犬等は私ので、汝ので、彼れので、吾等ので……ある)。

§ 77. 物主代名詞は屢々 *eigen* といふ字によつて其の意味を強めらる、

例 *das ist mein eigener Hund* (それはわれ專有の犬である), *das ist mein eigenes Haus* (それはわれ專有の家である), 殊に第三人稱の時は *eigen* を使用するとせざるとで大なる意味の差が生ずることがある例せば上の文章を *das ist sein Wille* とすれば「それは彼の意志なり」でどの「彼れ」なりや明白ならず *sein eigener Wille*

とすれば今話題になつて居る「彼れ」の事なり、das ist sein eigener Wille (それは彼れ自身の意志である)、

§ 78. 物主代名詞は名詞となすことが出来る、例へば mein なる物主代名詞を名詞となさんとせば定冠詞を附して der **Meine** (私のもの), des **Meinen** (私のものの), dem **Meinen** (私のものに), den **Meinen** (私のものを) 等となすのである、此の外に der **Meinige**, des **Meinigen**, dem **Meinigen**, den **Meinigen** 等といふ形もある。凡そ物主代名詞を名詞とするにはそれに定冠詞を附して形容詞の如く變化するか、その物主代名詞に ig なる語尾を附して定冠詞と共に形容詞的に變化さすればよい、即ち mein, meinig; dein, deinig; sein, seinig; ihr, ihrig; unser, unserig; euer, eurig; ihr, ihrig; Ihr, Ihrig を次の表中の——に挿入すればよい、

		Singular			Plural
		m.	f.	n.	
N.	der —e	die —e	das —e		die —en
G.	des —en	der —en	des —en		der —en
D.	dem —en	der —en	dem —en		den —en
A.	den —en	die —en	das —e		die —en

## 例

Singular	Plural
der meine, meinige	die meinen, meinigen
des meinen, meinigen	der meinen, „
dem meinen, meinigen	den meinen, „
den meinen, meinigen	die meinen, „

注意 扱て此等の語に、ある名詞を附加して考へずとも分かる時若しくは „所有” „親族” の意味の時には代名詞の頭文字は花文字で書かれねばならん、例 ich habe die **Seinigen** lange nicht gesehen (私は彼れのを [= 彼れの両親, 姉妹, 親戚等] 長い間見なかつた), er hinterließ all das **Seinige** den Armen seiner Vaterstadt (彼れは彼れのを [= 彼れの財産] 残らず自分の生れた町の貧民に遺した), das **Meine** beträgt nicht viel (私の [= 私] の股分) 多くはない、

併かし此れ等代名詞の後に何か名詞を附加して考へる場合は小文字で書くのである、

例 Meine Eltern werden wieder nach Amerika reisen, wollen die **deinen** auch wieder hinüber? (私の両親は再び米國へ行かうとしてゐます、汝のも [= 汝の両親] 更らにお出掛けになられませうか), ich hatte alle meine Bücher gelesen, als er mir die **seinigen** schickte (彼が私に彼のを [= 彼の書籍] 送つて呉れた時には私は残らず私の本を讀み終つて居た)

§ 79. der, die, das Meine ; der, die, das Deine 等の外に冠詞を用ゐず只だ語尾に定冠詞の語尾を附して作るのがある (但し中性 das の a は e となる)

		Singular			Plural
		m.	f.	n.	
	meiner	meine	meines		meine

deiner	deine	deines	deine
seiner	seine	seines	seine
unser	unsre	unses	unsre
eurer	eure	eures	eure
ihrer	ihre	ihrer	ihre

第二人称の鄭重なる形 *der, die, das Ihre; die Ihren* — *Ihrer, Ihre, Ihres; Ihre* は常に花文字で書く、  
(以上 § 78—§ 79 までに就ては自修、後第三、四課を参考せんことを薦む)

### III. 指示代名詞

*Pronomina demonstrati'va oder Demonstrativ-*

*Pronomen, hinweisende Fürwörter.*

§ 80. 指示代名詞は人間及び事物を指示するものにして、即ち次の如し;

Singular			Plural	
m.	f.	n.	m. f. n.	
<i>der</i>	<i>die</i>	<i>das</i>	<i>die</i>	(其れは) (その.....)
<i>dieser</i>	<i>diese</i>	<i>dieses</i>	<i>diese</i>	(これに) (此の.....)
<i>jener</i>	<i>jene</i>	<i>jenes</i>	<i>jene</i>	(あれに) (あの.....)

Singular			Plural	
m.	f.	n.	m. f. n.	
<i>solcher</i>	<i>solche</i>	<i>solches</i>	<i>solche</i>	(斯様な)
<i>derjenige</i>	<i>diejenige</i>	<i>dasjenige</i>	<i>diejenigen</i>	( „ )
<i>der nämliche</i>	<i>die nämliche</i>	<i>das nämliche</i>	<i>die nämlichen</i>	(同じ)
<i>derselbe</i>	<i>dieselbe</i>	<i>dasselbe</i>	<i>dieselben</i>	( „ )
<i>der eine</i>	<i>die eine</i>	<i>das eine</i>	<i>die einen</i>	(其の一方)
<i>der andere</i>	<i>die andere</i>	<i>das andere</i>	<i>die anderen</i>	(其の他方)
<i>selbst, selber</i>				(自身)

以上の内 *der, die, das; der-, die-, dasjenige; der, die, dasselbe; solch(er), solche, solches* は又た之れを **Determinativ-pronomen** 或は **bestimmendes Fürwort** とも稱ふ

*der, die, das* は指示代名詞であり關係代名詞でありまた定冠詞であるが其の音調に差がある即指示代名詞の時は高調音、關係代名詞なれば低調音、定冠詞の時は無調である

I. *der, die, das; 複 die* なる指示代名詞は常に強く發音さる、

夫等は定冠詞の如く變化され、名詞と共に用ひらるゝ時も、單獨にて用ひらるゝ時もあり、第二格は (*der*)—*dessen*, (*die*)—*deren* 又は *derer*, (*das*)—*dessen*; 複數 (*die*)—*deren*; 複數第三格は *denen* で、第二格は略して

**des** (男中性), **der** (女性と複数) と書くことがある、他の関係代名詞が次に来る場合は複数第二格は **derer** となる *gedenke **derer**, die in Not sind.* (困難にある者等を想へ)

例 *Macht nicht so viele Worte, **deren** oder **der** bedarf es nicht!* (何の役にも立たぬ言辭をその様に多く弄するな), *wes Brot ich eß', **des** Lied ich sing'* (我れに麩麩を與ふる人の歌をわれは歌ふ = 犬はその主の爲めに吠ゆ) 等、

II. **dieser, diese, dieses**; 複 **diese** なる指示代名詞は近い所にある人間、事物又は直ぐ前に述べた人間、事物を指示す、

**jener, jene, jenes**; 複 **jene** なる指示代名詞は談話者より隔たりたる所にある人間、事物又は直ぐ前の人間、事物よりも以前に述べた人間、事物を指示す

a) 夫れ等は共に定冠詞の如くに變化され、名詞と共に用ひらるゝ時も、單獨にて用ひらるゝ時もあり

例 ***Dieser** Knabe hat fleißig gearbeitet, **jener** (單獨の場合) ist sehr faul gewesen* (此の男兒は勤勉に働いた、彼の(男兒)は甚だ怠惰であつた), ***dieses** Haus ist alt,*

**jenes** (單獨の場合) *ist neu* (此の家は古い、あの[家]は新らしい), ***dieses** Haus gehört mir, **jenes** (單獨の場合) meinem Freunde* (此の家は私のもので、あの[家]は私の友人のだ)

注意 中性 第一格、第四格の **dieses** は、名詞なく單獨に用ひらるゝ場合には **dies** と略すことがある、其の場合には § 67 の **das** に力を單めたのと同意義である、

例 ***dies** ist unmöglich* (これは不可能だ), ***dies** scheint nicht das Richtige zu sein* (これは正常なものとは見えぬ), ***dies** ist nicht die Wahrheit* (これは眞理に非ず), *lies **dies**!* (これを認め)

b) **dieser** と **jener** とは **hier, dort** 或は **da** によつて意味の強めらるゝことがある、

例 ***dieses** Haus **hier** ist nicht so bequem eingerichtet wie **jenes dort*** (此處の此の家は、彼處のあの家の如くに勝手がよくない), ***dies hier** ist nicht so modern wie **jenes dort*** (此處の此れは、彼處のあれの如くに近代的でない)、

c) 指示代名詞 **der, die, das**; 複 **die**—**dieser, diese, dieses**; 複 **diese**—**jener, jene, jenes**; **jene** が主格となつて **sein** なる働詞にて一つの名詞と結合する場合には此れ等の代りに **性と數との別なく中性の形なる das, dieses** 或は **dies, jenes** を用ふる。併かし後に形容詞の續づく場合には **性と數により變化しなくてはならぬ**、



例 **dies** ist mein Sohn, **dies** ist meine Tochter [dieser, diese に非ず] (これは私の息子でこれは私の娘です), **das** war mein Freund Tanaka, **jenes** war Kato (これは私の友人の田中で、あれは加藤でした), **jenes** ist mein Taschentuch (あれは私のハンケチです), **jenes** sind die Gärten unfreier Freunde [jene に非ず] (あれ等はわれ等の友人の庭である), ich habe viele Blumen gepflückt; **dies** sind Veilchen, **jenes** sind Schneeglöckchen (私は多くの花を摘みました、これ等は堇で、あれ等は松雪草です)——ich habe viele Blumen; **diese** riechen (後に形容詞がある故、**dies** に非ず) sehr schön, **jene** sind ohne Duft. [茲では後に形容詞はないが其の前の文章で形容詞のあるため **diese** となつて居るから統一上矢張 **jene** とし **jenes** とせぬのである] (私は多くの花を持つて居る、此れ等は非常によく香ひ、あれ等は香がない), ich kenne die Namen der Edelsteine, **dies** sind Smaragde, **jenes** sind Saphire (私は寶石の名を知つてゐる、これ等は緑玉であり、あれ等は碧玉である)——**diese** sind sehr kostbar, **jene** sind minder wertvoll [**dies** **jenes** に非ず] (これ等は非常に高價であり、あれ等はあまり高價でない)、

d) 中性指示代名詞の **das**, **dieses**, **jenes** が第三格、第四格の前置詞と結合する場合には **das**, **dieses**, **jenes** の代りに § 69 の人稱代名詞に於けると同じく **da**, **hier** なる副詞に前置詞を組合はせた組立語を用ゆるのである (此の形は矢張り § 69 に於けると同じく事物を指す時に限る)

von dem, diesem, jenem	の代りに	davon, hiervon.
über dem, diesem, jenem	„	darüber, hierüber.
über das, dieses, jenes	„	darüber, hierüber.
bei dem, diesem, jenem	„	dabei, hierbei.

mit dem, diesem, jenem	„	damit, hiermit.
unter dem, diesem, jenem	„	darunter, hierunter.
unter das, dieses, jenes	„	darunter, hierunter.
auf dem, diesem, jenem	„	darauf, hierauf.
auf das, dieses, jenes	„	darauf, hierauf.

例 ich habe nicht **daran** gedacht [an **das** に非ず] (私はその事を考へなかつた), ich habe nicht **darüber** nachgedacht [über **das** に非ず] (私はそれに就いて熟考しなかつた)。

III. **solcher**, **solche**, **solches**; 複 **solche** なる指示代名詞は確定せる人間、事物にして比較的の意味を有せるものを指示す、

例 **solches** Obst——wie **diese** amerikanischen Äpfel——gibt es in Japan nicht (これ等亞米利加産の林檎の如き **斯**かる果物は日本にはない), **solchen** Tabak——Tabak, der so gut ist wie **dieser**——wächst nur auf Kuba (此の如く善き **斯**かる煙草は玖馬にのみ産す)。

夫れ等は次の五種の場合に用ひられて、夫々異なる變化をなす:

1) 名詞の前にあつて、定冠詞の如く變化さる:

**folcher** Mann (斯かる男), **folche** Frau (斯かる女),  
**folches** Kind (斯かる小供), **folche** Menschen (斯かる人間等)、

2) 不定冠詞を其の前に置き、不定冠詞を有する形容詞の如く變化する (形容詞の部を見よ):

m.	f.	
ein <b>folcher</b> Mann (斯かる男)	eine <b>folche</b> Frau (斯かる女)	
eines <b>folchen</b> Mannes	einer <b>folchen</b> Frau	
einem <b>folchen</b> Manne	einer <b>folchen</b> Frau	
einen <b>folchen</b> Mann	eine <b>folche</b> Frau	
n.		
ein <b>folches</b> Kind (斯かる小供)		
eines <b>folchen</b> Kindes		
einem <b>folchen</b> Kinde		
ein <b>folches</b> Kind		

3) 不定冠詞を其の後に置き、**folch** 其の物は語尾を附せず:

**folch** ein Mann (かゝる男) **folch** eine Frau (かゝる女) **folch** ein Kind (かゝる小兒) 此の云ひ方の代りに **fo** ein Mann, **fo** eine Frau, **fo** ein Kind 等ともいふ

	m.	f.	n.
N.	folch ein Mann	folch eine Frau	folch ein Kind
G.	folch eines Mannes	folch einer Frau	folch eines Kindes
D.	folch einem Manne	folch einer Frau	folch einem Kinde
A.	folch einen Mann	folch eine Frau	folch ein Kind

4) **folch** の後へ形容詞が来る場合には不定冠詞は省かれ強變化をなす:

**folch** starker Mann (斯かる強き男), **folch** fleißige Frau (斯かる勤勉なる女), **folch** artiges Kind (斯かる溫和なる小供), **folch** schlechte Menschen. (斯かる悪しき人間等)、  
之れに就ては形容詞の變化の處にて詳述せり

5) 名詞と結合せずして用ひらる:

**folch** einer (斯かるもの [男性]), **folch** eine (斯かるもの [女性]), **folch** eins (斯かるもの [中性])—**fo** einer, **fo** eine, **fo** eins とも云はる、

IV. **derselbe**, **dieselbe**, **dasselbe**; 複 **dieselben** (この, その, 同じもの)—**derjenige**, **diejenige**, **dasjenige**; 複 **diejenigen** (.....する處のもの)—**der nämliche**, **die nämliche**, **das nämliche**; **die nämlichen** (この, その, 同じもの)—**der andere**, **die andere**, **das andere**;

**Die andern (他のもの) なる指示代名詞は兩部分共に變化さる、即ち定冠詞を有する形容詞の變化をなす**

**1. derselbe, dieselbe, dasselbe; dieselben:**

	Singular			Plural
	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	derselbe	dieselbe	dasselbe	dieselben
G.	desselben	derselben	desselben	derselben
D.	demselben	derselben	demselben	denselben
A.	denselben	dieselbe	dasselbe	dieselben

此の指示代名詞が力を強めて發音されぬ時には人稱代名詞の意味を有しそれと同じ價値を有してゐる、而して文の調子の上から又は關係を明瞭にし得るが故に人稱代名詞の代りに用ひらるゝことが多い、(§ 65. 注十一、第二格参照)

例 Nachdem ich den Brief gelesen hatte, gab ich ihm **denselben** zurück (私はその手紙を讀み終つて後それを彼れに返した。)

Ich habe **dasselbe** nur gesagt, damit er sich beruhige (私は彼が安心する様にとそれを云つた許りです。)

此の指示代名詞が力を強めて發音さるゝ場合には後續文章 Nachsatzにて述べらるる人間、事物を指示す

例 Er hat **denselben** Weg genommen, den sein Freund genommen hatte (彼はその友人が取つたと同じ道を取つた)

Ich habe **dasselbe** Buch gelesen, was du gelesen hast (私は君が讀んだと同じ本を讀んだ)

Ich habe **dieselbe** Reise gemacht, die du im vorigen Jahre gemacht hast (私は君が前年したと同じ旅行をした。)

此れは **ein, eben, ganz** といふ語によつて意味が強めらるゝのである。

例 Wir haben **ganz** dieselbe Reise gemacht, die ihr gemacht habt (吾等は汝等がしたと全く同一の旅をした)

Er hat **ein und denselben** Weg genommen, den sein Freund genommen hatte (彼れはその友人が取つたと同一の道を取つた)

Er ist mit **eben** demselben Schiffe gefahren, mit dem Herr M. gefahren ist (彼れは M. 氏が乗つたのとすつかり同じ船に乗つた。)

**2. derjenige, diejenige, dasjenige; diejenigen:**

	Singular			Plural
	m.	f.	n.	m. f. n.
N.	derjenige	diejenige	dasjenige	diejenigen
G.	desjenigen	derjenigen	desjenigen	derjenigen
D.	demjenigen	derjenigen	demjenigen	denjenigen
A.	denjenigen	diejenige	dasjenige	diejenigen

此の指示代名詞は後に續づく關係文章 Relativsatzにて述べらるゝ人間、事物を指示するものなるが故に、常に關係代名詞と結合して用ひらるゝ、(§ 83. 6) 即ち次の如し:

單數: **derjenige** der (oder welcher); **diejenige**, die (oder welche), **dasjenige**, das (oder welches); 複數: **diejenigen**, die (oder welche). [何々する處の其の物] **derjenige**, der seinen Hut in der Hand hat, ist mein Onkel [帽子を手を持つて居る處の (der) 其の人が (der)

ienige) 私の伯父である]、—Das ist **diejenige** (Dame), die ich gestern gesehen habe [これは私が昨日見た處の其の人(貴夫人)である]、—Welches ist Ihr Buch? **Dasjenige, das** auf dem Tische liegt. [どれが君の本ですか? 机の上にある處の其れです] (關係代名詞のある文章では動詞が文の結尾に来ることに就ては關係代名詞の處にて詳述すべし)

3. **der nämliche, die nämliche, das nämliche; die nämlichen** は力を罩めて發音されたる *der=selbe, dieselbe* 等と同じ意味を有す

Singular			Plural	
m.	f.	n.	m. f. n.	
N. der nämliche	die nämliche	das nämliche	die	} nämlichen
G. des nämlichen	der nämlichen	des nämlichen	der	
D. dem nämlichen	der nämlichen	dem nämlichen	den	
A. den nämlichen	die nämliche	das nämliche	die	

例 Ich habe **die nämlichen** (=dieselben) Menschen gestern im Theater gesehen, die heute im Konzert gewesen sind (私は今日音樂會に居たと同じ人々に昨日劇場で遇つた)

4. **der eine, die eine, das eine; die einen.** — **der**

**andere, die andere, das andere; die andern** は *dieser, jener* と同意味を有してゐる、此れ等の變化は *derjenige, der nämliche* 等と全然同一故これを略す

例 **der eine** ging rechts, **der andere** ging links (一方は右に行き他方は左に行つた)

**die einen** ergaben sich dem Feinde, **die andern** zerstreuten sich in wilder Flucht (一部分は敵に降り、他部分は潰走した)

#### IV. 關係代名詞\*

##### Pronomina relativa oder Relativpronomen oder bezügliche Fürwörter.

§ 81. 關係代名詞は **der, die, das; die; —welcher, welche, welches; welche; —wer —was** にして其の變化次の如し:

關係代名詞の使用法に就ての詳細なる説明は拙著自修書、後、第二十三課にあり之れをも一讀せば一層明白になることと思ふ殊に初學者には之れを勸む、